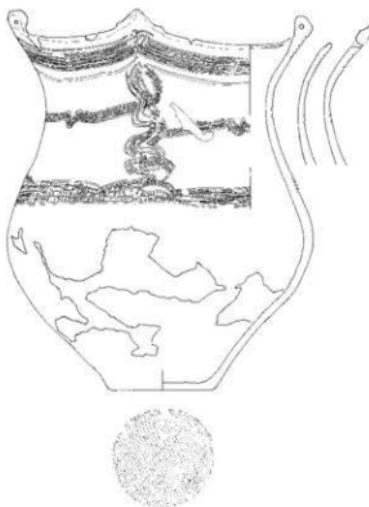


# 塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡

一般国道137号河口2期バイパス建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



2006.3  
山梨県教育委員会  
山梨県土木部



塚越遺跡1号住居跡（柄鏡形敷石住居跡）



塚越遺跡出土繩文土器

## 序 文

本書は、一般国道137号河口2期バイパス建設工事に伴って平成15年度、16年度に発掘調査した富士河口湖町塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の発掘調査についての報告書です。調査対象面積は全体で3,380m<sup>2</sup>となり2ヶ年にわけて発掘調査を行いました。

調査を行った遺跡は、富士山北麓にあたる御坂山地の御坂山・三ツ峠山の南麓で、河口湖北東部の緩斜面にあります。また古代官道の通過するところでもあり、平安時代の法典「延喜式」に記載された甲斐国三駅の1つ「河口」駅が置かれた地と推定されています。井坪遺跡は富士山スコリア層の下から繩文土器と欹状遺構がみつかりました。炭焼遺跡は、黒褐色土中に遺物の包含層が確認でき、遺物は古墳時代、平安時代、中近世の土器・陶磁器の小片が出土しました。

塚越遺跡は近世頃と推定できる土坑の他、下層から弥生時代と繩文時代の包含層がみつかりました。山梨県では類例の少ない弥生時代中期初頭の土器、石鏃などが出土しています。また、焼土跡がいくつかみつかり、当時の人々の生活の痕跡を示しています。繩文時代では後期初頭の柄鏡形敷石住居跡1軒がほぼ完全な形でみつかり、また晩期前半期の住居跡と思われる遺構も検出することができました。

富士河口湖町では富士山の火山活動の影響によって遺跡の存在は明確ではありませんでしたが、この度、繩文時代や弥生時代の人々の生活の痕跡が明らかとなり、富士河口湖町の歴史を考えるうえで、新たな資料が提供されたことになります。遺跡はさらに広く周辺に広がっているものと想定され、今後の周辺地域の調査研究にも期待したいと思います。本報告書が多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査、整理作業に従事された方々にお礼を申し上げます。

2006年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 渡辺 誠

## 例　　言

- 1 本書は、山梨県南都留郡富士河口湖町河口に存在する塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、一般国道137号河口12期バイパス建設に伴う事前調査であり、山梨県土木部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
- 3 本書の執筆・編集は当センターの依田幸浩・正木季洋が行った。また、第6章第1・2節をパリノ・サーヴェイ株式会社、第6章第3節を高橋哲（株アルカ）の報告書より転載した。石器については実測からトレース、観察表作成まで株式会社アルカに委託した。鉄器の保存処理・レントゲン写真については（財）帝京大学山梨文化財研究所に委託した。測量基準点については昭和測量株式会社に委託した。
- 4 遺跡における遺構等の写真については、塚越遺跡が今福利恵・正木季洋、炭焼遺跡が高野玄明・今福利恵・正木季洋、井坪遺跡は高野玄明・正木季洋が撮影した。なお、遺跡の鳥瞰写真等航空写真については株式会社こうそくに委託した。
- 5 炭化材同定・獸骨同定、土壤分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 6 本報告書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 7 発掘調査や整理作業にあたっては以下の諸氏、諸機関の御教示・御協力を賜った。記して謝意を表する。(順不同、所属、敬称略)  
柳原功一 宇佐美哲也 三浦寿男 流石昇 古屋正人 友谷文一 杉本悠樹 岡野秀典 高根重 中山誠二  
植月学 保坂和博 舞水達司 富士河口湖町教育委員会 河口地区自治会連合会 富士河口湖町文化財審議委員会  
河口浅間神社賛助会

## 凡　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は図中に示した。
- 2 住居跡や土坑などの遺構番号は、各遺跡においてそれぞれ順次付したものである。
- 3 調査区は国土座標軸によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって南北のグリッド線および図中の北印は真北を指す。
- 4 遺構挿図中に用いたスクリートーンは■■■■■が被熱により焼土化した部分、■■■■■が炭化物の分布する部分、■■■■■が灰の分布する部分を示す。挿図中のドットマークの番号はそれぞれ遺構ごとの遺物図版の番号と対応している。
- 5 遺構断面図中のレベルポイント部分に当たる数字は標高（単位はm）を示す。
- 6 遺物挿図中、土器類の断面図において黒く塗りつぶしてあるものは須恵器、網点は灰釉陶器・綠釉陶器を示す。また石器類の器体において薄い網点は磨り面の範囲を、濃い網点は被熱範囲を示す。
- 7 遺物観察表中の括弧付き数値は現存値もしくは推定値である。
- 8 石器観察表中の記号は「ハンマーの種類」と「打撃の種類」を示し、以下のとおりである。  
・HP：ハードハンマーの押圧剥離。　・HD：ハードハンマーの直接打撃。　・nHP：径の細いハードハンマーの押圧剥離。　・nHD：径の細いハードハンマーの直接打撃。　・S'P：ソフトハンマー（弾性変形するハンマーであるがその変形度合いが通常のソフトハンマーよりも弱いハンマー）の押圧剥離。　・Hvd：ハードハンマーの垂直打撃。　・MF：微小剥離痕。　・Po：研磨による加工。　・Pe：敲打による加工。　・Z：属性そのものが存在しない。

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

## 第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘調査の概要 .....	1

## 第2章 遺跡周辺の環境と歴史 .....

3

## 第3章 塚越遺跡

第1節 調査の方法と基本層序 .....	5
(1) 調査の方法 .....	5
(2) 基本層序 .....	5
第2節 繩文時代の遺構と遺物 .....	5
(1) 遺構 .....	5
(2) 遺物 .....	7
第3節 弥生時代の遺構と遺物 .....	8
(1) 遺構 .....	8
(2) 遺物 .....	8
第4節 近世の遺構と遺物 .....	9
遺構一覧表 .....	10
遺構挿図 .....	11
遺物観察表 .....	21
遺物挿図 .....	29

## 第4章 炭焼遺跡

第1節 調査の方法と基本層序 .....	64
(1) 調査の方法 .....	64
(2) 基本層序 .....	64
第2節 遺構と遺物 .....	64
(1) 遺構 .....	64
(2) 遺物 .....	65
遺構一覧表 .....	66
遺構挿図 .....	67
遺物観察表 .....	71
遺物挿図 .....	72

第5章 井坪遺跡	
第1節 調査の方法と基本層序	73
(1) 調査の方法	73
(2) 基本層序	73
第2節 遺構	73
第3節 遺物	74
遺構一覧表	75
遺構挿図	76
遺物観察表	83
遺物挿図	84
第6章 自然科学分析	
第1節 塚越遺跡の自然科学分析	87
第2節 井坪遺跡・炭焼遺跡の自然科学分析	91
第3節 塚越遺跡出土の石器	97
第7章 まとめ	
第1節 縄文時代	101
(1) 塚越遺跡・井坪遺跡出土の縄文土器	101
(2) 遺構	102
第2節 弥生時代	103
(1) 塚越遺跡出土の弥生時代中期初頭の土器について	103
(2) 塚越遺跡弥生時代の遺構について	104
第3節 平安時代	104
写真図版	109

# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査に至る経緯

塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の発掘調査は、山梨県土木部による南都留郡富士河口湖町(旧河口湖町)河口地区内の「一般国道137号河口2期バイパス建設事業」に伴い、実施された。河口2期バイパス道路は、河口地区内を通過している国道137号を東に迂回し、同地区内の交通混雑の緩和を目的とした延長3.2kmの2車線道路である。

バイパスの建設に先立ち、平成14（2002）年11月に延べ延長約610mの路線内で試掘調査を実施した。試掘調査では、対象路線内に幅約1.5m～2m、長さ約6～23m、深さ約1～2mの試掘溝を計31本設定し、油圧ショベルで掘り下げた後、人力での精査によって遺構・遺物の有無を確認した。その結果、すでに周知の遺跡であった滝沢遺跡の範囲追加部分と、新たに塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の計4遺跡を発見した。

この試掘調査の結果により、平成15（2003）年6月から、井坪遺跡・炭焼遺跡の発掘調査を行い、平成16（2004）年6月からは、炭焼遺跡の前年度未調査部分と塚越遺跡の発掘調査を行った。

### 〈平成15年度 炭焼遺跡・井坪遺跡〉

- ・平成15年6月16日 文化財保護法第99条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文2第6-7号）
- ・平成15年12月2日 遺失物法第13条に基づく埋蔵文化財発見通知を富士吉田署に提出（教理文5第12-2号）
- ・平成15年12月19日 発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文2第12-10号）
- ・平成16年3月22日 発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文2第一号）

### 〈平成16年度 塚越遺跡・炭焼遺跡〉

- ・平成16年6月23日 文化財保護法99条に基づき発掘通知を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文第162号）
- ・平成16年12月21日 遺失物法第13条に基づく埋蔵文化財発見通知を富士吉田署に提出（教理文第598号）
- ・平成16年12月14日 発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文第626号）
- ・平成17年3月23日 発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出（教理文第874号）

### 〈平成17年度 塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡（整理作業）〉

- ・平成18年3月末 実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出（予定）



第1図 試掘調査により発見された遺跡

## 第2節 発掘調査の概要と組織

### 第1項 調査の概要

**塚越遺跡** 塚越遺跡は、遺跡のすぐ東側が山地となる標高約855mの緩斜面地で、試掘調査では、地表下0.8m程に土坑が数基確認されていた。本調査の結果、直径1m程、深さ1m前後の土坑が15基発見された。土坑からの出土遺

物は無く、性格・時期ともに明らかではないが、地層から近世頃の遺構と推定できる。また、この土坑が掘り込まれている黄褐色土層の下に弥生時代の遺物包含層を確認し、さらに下層には縄文時代の遺物包含層の存在が明らかとなつた。弥生時代の遺物包含層は地表下1.5~3mの土石流堆積下の暗褐色土層で、主に弥生時代中期初頭の土器、石鏸などが出土した。住居跡は明確でないが、5ヶ所に焼土跡があり、生活の痕跡を示している。縄文時代の遺物包含層は地表下2~4mの富士山スコリア下の黒褐色土層で、上層から晚期前半、後期中葉、後期初頭の遺物が認められた。また、後期初頭の柄鏡形敷石住居跡1軒をほぼ完全な形で検出し、晚期前半期の住居跡と思われる遺構も検出した。この地は山際の傾斜地であり、土石流による堆積や富士山テフラ降灰がありながらも、縄文時代後期から晚期、弥生時代へと重層的に遺跡が形成されていることが明らかとなった。

**炭焼遺跡** 炭焼遺跡は、遺跡の北側が山地となる標高約845mの緩斜面地に位置している。調査区域1,000mのうち、平成15年度に600mを調査し、平成16年度に残りの400mの調査を行った。平成15年度の調査では、地表下0.6~1.0mの黒褐色土層中に中・近世、平安時代、弥生時代、縄文時代の遺物包含層を確認し、小破片ではあるが、各時代の土器片や陶磁器片が出土した。また、覆土に平安時代の遺物を含んだ土坑等を検出した。平成16年度の調査では、地表下1.6mほどから竪穴状の掘り込みを検出し、覆土からは古墳時代の土器片が少量出土した。調査区南端部では、遺跡の南側を流れている山の神川の洪水による砂礫が厚く置っていたが、その下から畝状遺構を検出した。畝状遺構からは遺物が出土しなかつたため、時期は明らかではないが、地層などから近世以前の遺構と推定される。本遺跡からは住居跡などの遺構は見られないものの、縄文時代から近世にわたる各時代の遺物が出土しており、調査区周辺に存在する遺跡からの流入によるものと推測できる。

**井坪遺跡** 井坪遺跡は、炭焼遺跡の南方約250m、標高約840mの緩斜面地に位置している。遺跡は、調査区域を水路や道路で分断されているため、北側から1区~3区に分けて調査を行った。本調査の結果、地表下1.0~2.0mにある黒色火山灰層の下から畦状及び畝状の遺構等を検出した。畦状及び畝状の遺構からの出土遺物は見られず、時期・性格ともに不明である。2区では、畦状及び畝状の遺構を掘り下げたところ、縄文時代後期後葉の土器片が、約3m四方に集中して出土した。当該時期の遺構は確認できなかつたが、調査区周辺に同時期の遺跡の存在が推定できる。

## 第2項 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 平成15年度 高野玄明、正木季洋  
平成16年度 今福利恵、正木季洋

報告書作成 平成17年度 依田幸浩、正木季洋

担当者

発掘作業員 天野智子、大川裕子、久根口睦雄、後藤明美、鈴木蝶子、蘭廣明、高根みち子、田辺秋太郎、中村明美、  
中村かつ子、額谷いち子、古屋生代、堀内知子、本田幸子、山脇鈴子、湯山伊津江  
(平成15年度~平成16年度)

整理作業員 赤塙富夫、井内雅恵、岡和子、小川秀子、笠谷麻紀、小林順子、富永茂樹、中込久子、並木寿子、  
平川涼子、三好美智 (平成15年度~平成17年度)

## 第2章 遺跡周辺の環境と歴史

塚越遺跡、炭焼遺跡、井坪遺跡のある富士河口湖町は、平成15年11月15日に、河口湖町、勝山村、足和田村の3町村が合併して誕生した。また、平成18年3月には、上九一色村の一部が分村合併により編入された。富士河口湖町は、南側の富士山傾斜地、北側の御坂山系に挟まれた高原地帯であり、国の特別名勝である富士山を望む観光地として、国内外から多くの人々が訪れている。

本遺跡群のある河口地区は、旧河口湖町にあり、昭和31年9月の合併により、旧河口村から河口湖町大字河口となつた。河口村は、河口湖をとりまく船津村、浅川村、小立村、勝山村、長浜村、大石村、河口村のうち、船津、浅川、小立、大石、河口の5村が合併してきた河口地区の旧村名であり、河口湖の北東部にある。

かつて八代郡に属したことのある河口村は、中世までは「河口」と表していたが、近世は「川口」が多く使われていた。しかし、「河口」とも混用されており、明治5年から「河口」を正字とするようになった。村の南側は河口湖で、南東は産屋ヶ崎をもって浅川村との境となり、南西は馬乗石をもって大石村との境となる。北側は山々を連ねた地形で、村界も産屋ヶ崎から滝沢山までは富士河口湖町浅川、滝沢山から柏尾山、入会山、木撫山、三ッ峰までは富士吉田市新倉・上暮地、西桂町下暮地との境となる。三ッ峰から茶臼山にかけては、都留市大幡、大月市黒野田との境となり、茶臼山、八丁金座山、黒岳にわたって笛吹市御坂町藤野木と接し、黒岳から広瀬山、馬乗石までは富士河口湖町大石との境となる。

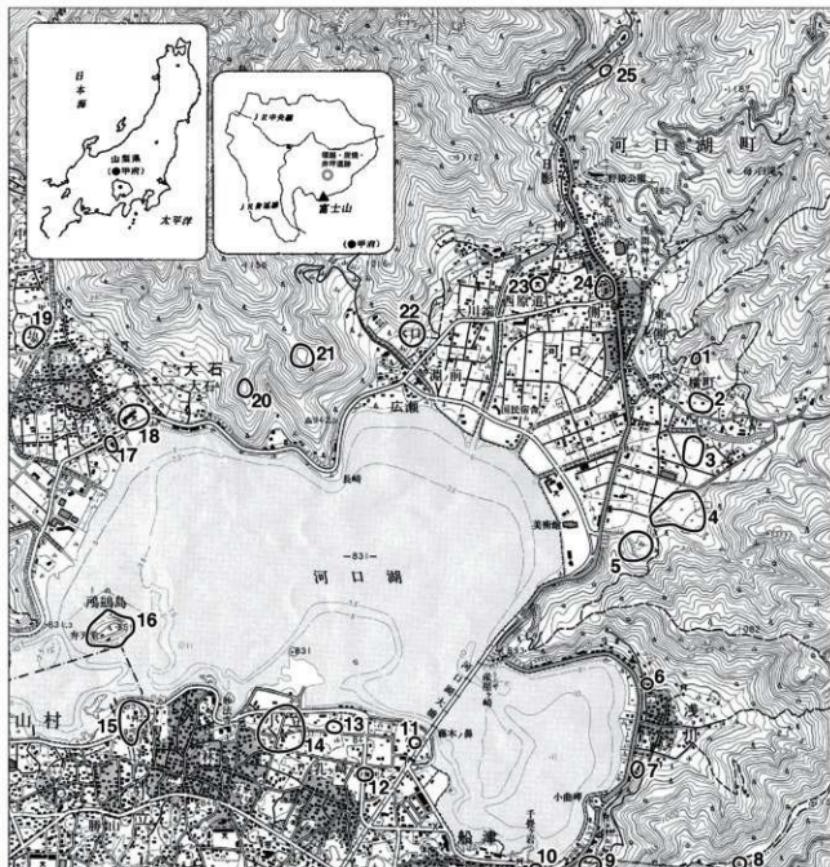
河口地区が、河口湖の南側と大きく違うところは、南側が溶岩におおわれ河川が全くないのに対して、鯉の水川、山神川、六首川、寺川、庵川、梨川の6河川が湖水に注いでいることである。これらの河川のうち天神沢が天神社前から六首と名を変えて湖水に注いでいた六首川は、耕地および河川整備によって下流で寺川と合流している。また、庵川は庵橋川とも言われ、庵神社前を通ることから名付けられた川であるが、現在は西川を正称としている。この西川は、河口湖に注ぐ全河川中最長の川である。

この河口地区内には、古代の官道が通過していたとされ、平安時代の法典である『延喜式』『卷28兵部省諸国駅伝馬条』で、甲斐国に3つあったとされる駅のうちの1つ、「河口」の駅が河口地区内に置かれていたと推定されている。平安時代には、官道の30里（約16km）ごとに、常時、伝馬をおいておくための「駅」という施設が設置されていた。官道は、平安時代には甲斐路または御坂路とも呼ばれ、鎌倉時代になると鎌倉街道と呼ばれるようになるが、当時の河口地区が中央政府と甲斐国の中継点であったことは間違いない。

また、河口地区内には、『甲斐国志』にも詳しく記載されている河口浅間【せんげん】神社がある。河口浅間神社は、貞觀6年（西暦864年）に起こった富士山の大噴火（貞觀の噴火）の鎮祭を行なうために、貞觀7年（西暦865年）に創建されたとされ、祭神には木花咲耶姫命【このはなさくやひめのみこと】を奉る。河口浅間神社では、県の無形文化財に指定されている「稚兒の舞」が、毎年7月28日に行われる「太々御神楽祭【だいだいおかぐらさい】」において奉納されている。また、毎年4月25日に行われる「孫見祭り」の際にも、その一部が奉納されている。「稚兒の舞」は、噴火を鎮めた木花咲耶姫命の苦労を慰めるために始められたもので、現在でも、氏子中の7歳から12歳までの童女が、古式に則り、神楽を奉納している。また、境内の七本杉は県の天然記念物に指定されている。

河口湖周辺では、縄文から平安時代まで各時代の遺物散布地がいくつか確認されており、数多くの遺跡が存在していると考えられるが、本格的な発掘調査が行われたことがほとんどなく、詳細は今だ不明の部分が多い。

その中で、河口湖の湖中に浮かぶ鶴の島で発見された鶴の島遺跡は、山梨県の遺跡の中でも古くから存在が注目され、昭和20年代後半から同40年代には発掘調査が行われた結果、弥生時代初期の遺跡として全国に広く知られるようになった遺跡である。鶴の島遺跡で発見された遺物は、縄文時代早期の茅山式、前期初頭の花積下層式、中期の勝坂式、晚期の氷I式、弥生時代前期～中期初頭の条痕灰土器など多岐にわたるが、特に縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物は、本県の縄文時代から弥生時代への移行を考える上でも貴重な資料である。



周辺の遺跡名 ※（遺跡の時代、遺跡の種別）

1塚越遺跡（縄文・弥生、散布地）2炭焼遺跡（平安・中世、散布地）3井坪遺跡（縄文、散布地）4滝沢遺跡（弥生～平安、散布地）5追坂遺跡（縄文、散布地）6老坂遺跡（縄文、散布地）7宮の下遺跡（縄文～古墳、散布地）8天女山烽火台（城館跡）9東電放水路遺跡（縄文、散布地）10船津浜中村遺跡（縄文、散布地）11梨宮公園遺跡（縄文、散布地）12鳥原遺跡（弥生、散布地）13宝司塚遺跡（弥生、散布地）14船津鐘撞堂（城館跡）15里宮遺跡（縄文、散布地）16鶴の島遺跡（縄文・弥生、散布地）17大石鐘つき戸（城館跡）18大石遺跡（縄文、散布地）19木本原遺跡（縄文、散布地）20大石の城山遺跡（城館跡）21広瀬の城古山（城館跡）22金山遺跡（縄文、散布地）23大染地遺跡（縄文、散布地）24西川遺跡（古墳、散布地）25庖橋遺跡（縄文～古墳、散布地）

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

（本文の引用・参考文献）

中山誠二 1998 「鶴の島遺跡」『山梨県史 資料編1 原始古代1 考古（遺跡）』 山梨県  
都留市史編纂委員会 編 1988 『都留市史 資料編 村絵図村明細帳集』 都留市

## 第3章 塚越遺跡

### 第1節 調査の方法と基本層序

#### (1) 調査の方法

塚越遺跡は、平成14年度に行われた試掘調査により発見された遺跡で、試掘調査時には、時期不明の土坑が数基発見されていた。本調査は平成16年度に行われ、当初、前年度に調査した炭焼遺跡の未調査部とあわせて約2ヶ月間の調査日程が計画された。しかし、本調査により、弥生時代と縄文時代の遺物包含層および遺構を検出したことで、当初の予定期間を延長し、最終的には2遺跡あわせて約6ヶ月間の調査となった。

本調査は、試掘調査時に確認された土坑の検出面まで油圧ショベルを用いて土砂を平坦に取り除き、その後は、人力による掘り下げ、精査、および遺構・遺物の検出、記録を行った。

調査区内のグリッドは、5m方眼で設定し、北から南に123...、西から東にABC... とグリッド番号を振り分けた。

#### (2) 基本層序

第4図に基本土層を示した。土層は富士山噴火による堆積や土石流などの影響により31層に分けられる。ここでは31層を I 層：耕作土、 II 層：表土下の遺物をほとんど含まない自然堆積層、 III 層：弥生時代遺物包含層、 IV 層：富士山火山灰層、 V 層：縄文時代後期初頭～晚期初頭遺物包含層、 VI 層：VI層以下遺物を含まない自然堆積層、 VII 層：縄文時代前期遺物包含層、 VIII 層：VII層以下自然堆積層に大別する。

土層は I 層が北から南、東から西にむかって緩い傾斜で下がる地形に沿って堆積するのに対し、 II ～ VIII 層は急傾斜で堆積しており、 II 層堆積後、耕作などによる削平をうけ、現在の地形になったものと考えられる。

II 層上面では、 I 層直下から II a 層に掘り込まれる近世の土坑が確認されている。 II a 層は調査区北側において、削平をうけており、北側部分においては近世の土坑は見られない。 III 層の弥生時代遺物包含層は調査区のほぼ全域において見られるが、北側においては II k 層の洪水堆積層により削られる状況が見られる。 III 層と V 層縄文時代遺物包含層の間に IV 層富士山火山灰層が所々で見られる。第 V 層は4つにわけられ、 Va 層：縄文時代晚期、 Vb 層：縄文時代後期中葉、 Ve ～ Vd 層：縄文時代後期初頭に分けられる。 VI 層以下は V 層調査終了後のトレンチ調査により確認されたものである。 VI 層は無遺物層であり色調、内容物により VIa ～ VIi 層に分けられる。 VII 層からは焼土遺構1基と石鏡が1点のみ出土しており、石鏡の形態から縄文時代前期の層と考えられる。

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 遺構

##### 住居跡

今回の調査では2軒の住居跡が検出された。このうち、1軒が縄文時代後期初頭、1軒が縄文時代晚期初頭に比定される。

##### 1号住居跡（第5・6図）

【位置】 B-7・8、 C-7・8グリッドで検出された。

【重複】 なし。

【形状・規模】 主軸がほぼ東西方向の柄鏡形敷石住居で、西側に柄部を持つ。住居全体の長径は4.50mをはかり、柄部は長径1.89m、短径1.01m、深さ0.49mを測る。主体部掘り込みは南北3.50m、東西3mの梢円形となる。

柄部の敷石は約30~40cm大の平石を垂直方向に立て、石棺上に組み合わせる。柄部掘り込み上部から底面敷石上部までの深さは約30cmあり、底面には約20~30cm大の平石を敷いている。

主体部の敷石は北東部の敷石が一部失われているが、五角形に縁石を配し、内部に約20~50cm大の平石を用いて、入り口部と居住部の境を頂点とした扇形に配置する。扇形の頂点から主体部中央の炉まで約40cm大の平石を直線上に配されるが、これが住居の中心を表すものであろう。

【壁】 壁は東側で検出され、壁高は70cmを測る。周溝は検出されなかった。

【柱穴】 居住主体部の五角形の敷石の頂点部分に5基と居住外側に入り口部をはさんで一対の柱穴が検出された。柱穴の深度はP1-12cm、P2-19cm、P3-42cm、P4-18cm、P5-36cm、P6-27cm、P7-15cmとなる。

【炉】 住居のほぼ中央で検出された。掘方は椭円形を呈し、東西53cm、南北41cm、深さ4cmを測る。4方向に石が配置される石囲い炉で、比熱により赤変している。

【その他の施設】 居住部南側において周堤を検出した。東西に75cmの溝を掘り、溝内に土を盛り、堤を構築しているものと考えられる。南西部において18号土坑に切られる。

【遺物出土状況】 柄鏡部で深鉢形土器（第13図1住1）が敷き詰められるように出土した。石器は敷石の一部として使用されている。

【時期】 繩文時代後期初頭。

## 2号住居跡（第7図）

【位置】 D-3・4グリッドで検出された。

【重複】 なし。

【覆土】 覆土内に焼土、灰がほぼ全面に広がって検出された。

【形状・規模】 半分が調査区外に伸びているため、平面形は定かではないが、ほぼ円形を呈すると思われる。

【壁】 居住中央にとあると考えられる炉から緩やかに立ち上がるすり鉢状を呈し、底面と掘り込み上部の深度30cmを測る。

【ピット】 ピットは検出されなかった。

【炉】 地床炉。

【その他の施設】 なし。

【遺物出土状況】 全体として散在する傾向にある。

【時期】 繩文時代晩期初頭。

## 土坑（第5・6図）

繩文時代の土坑は後期中葉の土坑が1基確認された（18号土坑）。土坑内より繩文後期中葉の大型土器片（第19図18土1）が出土した。詳細なデータに関しては一覧表（第1表）を参照されたい。

## D-5土器集中（第7図）

D-5グリッド南東部において確認された集中区で、0.5×1mの範囲に繩文時代後期中葉堆之内2式の土器片がまとまって出土した。土器はすべて繩文時代後期中葉である。集中区北側においては第6図D-5土器集中1の底部片が自然疊の上におかれた状態で出土している。土器片下には土坑状の掘り込みがあり、土坑掘り込み底面から側面にかけて、焼土が検出された。

## 1号柱穴群（第8図）

C-5、D-4・5グリッドにおいて検出された。北から南に向かってハの字にならんでおり、建物跡の可能性も考えられる。柱穴内からは遺物は出土していないが、周辺より繩文時代晩期初頭の土器片が出土しており、繩文時代晩期初頭に属すると考えられる。詳細なデータに関しては一覧表（第1表）を参照されたい。

## 焼土遺構（第8図）

縄文時代の焼土遺構は6基検出され、縄文時代前期と思われる焼土1基、縄文時代後期初頭の焼土2基、縄文時代後期中葉のものが1基、縄文時代晚期初頭のものが2基検出された。これらの詳細なデータについては一覧表（第1表）を参照されたい。

## （2）遺物（第13～26図）

塚越遺跡出土の土器の所産時期は縄文時代前期から弥生時代中期初頭までに及ぶ。下記の分類に基づいて報告する。

I群 縄文時代前期

II群 縄文時代後期初頭

III群 縄文時代後期中葉

IV群 縄文時代後期後葉

V群 縄文時代晚期前半

VI群 弥生時代中期初頭

ここではIからV群までの縄文時代の土器について述べ、VI群弥生時代中期初頭の土器については弥生時代の遺構と遺物の項で後述する。

I群 縄文時代前期諸磯b式。

II群 縄文時代後期初頭。

1類 沈線・帯縄文により渦巻文・J字文・スペード文・紡錘文などのモチーフを描くもの

a種 口縁部に縄文帯がめぐり、縄文帯下に窓枠状を持つもの

b種 口縁部直下が無文帯となり、胴部が横方向につながるモチーフが2段の構成をとるもの。

2類 4単位の波状口縁となり、波頂部には突起や貼り付け文が施される。口縁に沿って横長のU字文を配する。圓沢類型。

3類 地文が縄文・条線のもの

a種 口縁部直下に沈線がめぐり、縄文地文となるもの。

b種 口縁部直下に沈線がめぐり、間隔を持って縦位に縄文が施文されるもの。

c種 器面全体に縄文が施されるもの。

4類 口縁部から縦位の条線が施されるもの。

5類 その他の深鉢

1～3類にあてはまらないものや底部破片を一括する。

III群 縄文時代後期中葉堀之内2式新段階。

1類 口縁が外反する朝顔形の深鉢。口縁部には2条の刻みのある隆線をめぐらせ、8字形の貼り付け文を施す。胴部には充填縄文による縄文帯で3角形のモチーフを描く。

2類 縄文を充填した多条細沈線により連鎖状文などのモチーフを描くもの。

3類 細く繊細な沈線でH字状の懸垂文を描くもの

4類 口縁が内湾し、胴部がくびれる器形のもの

5類 外面無文の土器

a種 外面が無文で口縁内面に沈線を有するもの

b種 口縁部に突起を有するもの。

c種 無文

## 6類 注口土器

### V群 繩文時代後期後葉

口縁部が波状を呈し、波長部の頂点より刻みを有する隆帯を垂下させるもの。

### V群 繩文時代晩期前半

#### 1類 清水天王山式土器を一括する。

沈線による右下がりの三叉入り組み文を施す口縁部文様帶と、胴部の綾杉文を主文様とする。口縁部有刻隆帯の有無により2つに細分する。

a種 口縁形が平縁を呈し有刻突帯をもたないもの。

b種 口縁部に有刻突帯がめぐるもの。

#### 2類 雷文土器

口縁部が外反する深鉢で口縁部には口縁直下に2条の縄文帯をもち、縄文帯間に沈線による鍵の手文様帶となる。

#### 3類 その他の土器

## 第3節 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

#### 土坑（第9図）

今回の調査では弥生時代の土坑は1基検出された（17号土坑）。詳細については一覧表（第1表）を参照されたい。

#### 柱穴（第9図）

今回の調査では柱穴は3基検出された。3基は調査区南側のD-9・10グリッドにあり、ほぼ一直線上に並ぶ。柱穴近くには2号焼土、3号焼土が存在し、周辺から多量の土器片、石器が出土していることから住居跡の可能性も考えられる。柱穴の詳細なデータに関しては一覧表（第1表）を参照されたい。

#### 焼土遺構（第9・10図）

焼土遺構は5基検出された。2号焼土、3号焼土は焼土下に掘り込みを有する。詳細なデータについては一覧表（第1表）を参照されたい。

#### D-9土器集中（第10図）

D-9グリッドにおいて、長径86cm、短径65cmの梢円形を呈する土坑を検出した。土坑内からは2個体の土器片と緑色凝灰岩の剥片18点（第41図62～79）が出土している。

掘り込み上部からは約10～15cmの大型土器片第27図D-9土器集中16と17が重なり合い、その間に緑色凝灰岩剥片18点が埋納されている。

### (2) 遺物（第27～34図）

弥生時代の遺物は調査区南側において大半が出土しており、特に遺構が集中するC-8・9・10、D-8・9・10グリッドにおいて濃密に分布する。（第9図6）ここでは以下の基準で弥生土器を分類する。

#### VI群 弥生時代中期初頭

#### 1類 条痕文甕

ほとんどが桶状工具または植物纖維束によって条痕を施す。

- a種 口縁部断面が角頭であり、装飾がないもの
  - b種 口縁部に刻みを有するもの
  - c種 口唇部に指頭による圧痕、V字状の刻みを有するもの。刻みを施すことにより口縁部上端に隆帯を貼り付けたようになるものもある。
  - d種 口縁部に指頭により長楕円状のくぼみを施すもの
  - e種 口縁部に押捺を連続させ、押捺下に縱方向、以下横方向の条痕が施されるもの。
- 2類 口縁部に沿って縄文帯を施す甕
- a種 口縁部縄文帯下の頸部が無文帯で肩部以下に条痕を施すもの。
  - b種 口縁部縄文帯下の頸部に無文帯で肩部以下に縄文を施すもの。
- 3類 その他の甕
- a類 棒状工具による沈線で器面に文様を描くもの。
  - b類 無文のもの。
  - c類 底部破片を一括する。
- 4類 壺
- a類 条痕を施すもの
  - b類 太い沈線で三角形などのモチーフを描き、モチーフ内に縄文を充填するもの。
- 5類 浅鉢

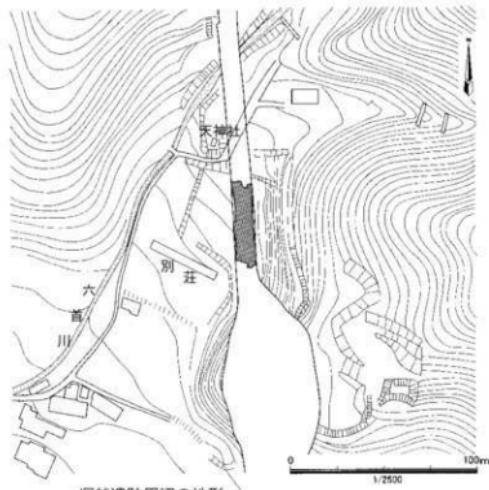
## 第4節 近世の遺構と遺物

### 土坑（第11・12図）

近世の遺構は表土下から掘り込まれた土坑が15基確認された。遺物は土坑中より下層の弥生時代の土器が掘り返されて出土したのみで近世に属する遺物の出土はみられなかった。土坑の詳細なデータについては一覧表（第1表）を参照されたい。

第1表 塙越遺跡遺構一覧表

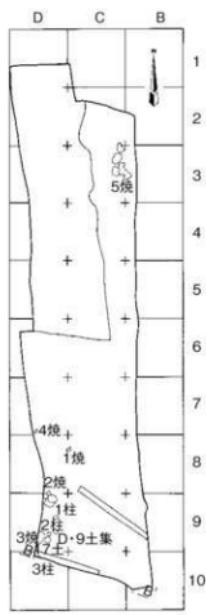
土坑番号	時期	位置(アリット)	重複	形状	長軸m	短軸m	深さm	出土遺物/備考
1a土	近世	D-9	1b	円形	1.25	1.20	0.30	
1b土	近世	D-9	1a	-	0.61	-	0.06	
2土	近世	B-9	なし	円形	1.41	1.22	1.25	
3土	近世	C-8	なし	円形	1.07	1.04	0.23	弥生時代の土器小破片
4a土	近世	C-8	4b土	円形	1.07	1.05	0.89	
4b土	近世	C-8	4a土	円形	1.20	-	0.73	
5土	近世	D-8	なし	長円形	1.71	1.36	0.72	
6土	近世	C-7	なし	円形	1.53	1.50	1.32	
7土	近世	C-6・7, D-6・7	なし	円形	1.60	1.49	0.99	
8土	近世	D-7	なし	円形	1.52	1.44	0.77	
9土	近世	B-10, C-10	なし	円形	1.94	1.73	0.90	
10土	近世	B-9, B-10	なし	円形	1.31	-	0.58	
11土	近世	D-6・7	なし	円形	1.28	1.07	1.18	
12土	近世	C-6・D-6	なし	円形	1.37	1.27	0.64	平安時代土師器小破片
13土	近世	D-6	なし	円形	1.11	-	0.29	平安時代土師器小破片
14土	近世	C-6・C-7	なし	円形	1.21	1.20	0.50	
15土	近世	C-6	なし	円形	1.08	0.98	0.41	
16土(大番)	-	-	-	-	-	-	-	
17土	弥生	D-9	なし	橢円形	0.63	0.50	0.18	弥生時代の土器片
18土	縄文後期中葉	C-8	1住周壁	不明	-	0.76	0.19	縄文後期中葉の土器片
1柱	弥生	D-9	なし	長円形	0.48	0.27	0.30	
2柱	弥生	D-9	なし	円形	0.28	0.25	0.28	
3柱	弥生	D-10	なし	円形	0.23	0.21	0.30	
1柱穴群P1	縄文晩期	D-4	なし	円形	0.30	0.27	0.11	
1柱穴群P2	縄文晩期	D-5	なし	円形	0.31	0.28	0.06	
1柱穴群P3	縄文晩期	D-5	なし	円形	0.28	0.25	0.17	
1柱穴群P4	縄文晩期	D-4	なし	円形	0.47	0.43	0.20	
1柱穴群P5	縄文晩期	C-5, D-5	なし	円形	0.38	0.32	0.14	
1柱穴群P6	縄文晩期	C-5, D-5	なし	円形	0.39	0.36	0.14	
1焼土	弥生	C-8・D-8	なし	-	0.35	-	-	
2焼土	弥生	D-8	なし	-	0.56	-	-	
2焼土P1	弥生	D-8	P2	長円形	0.90	0.67	0.40	底面より弥生土器片出土
2焼土P2	弥生	D-8	P1・P3	長円形	-	0.29	0.11	
2焼土P3	弥生	D-8	P1	橢円形	0.74	-	0.25	
2焼土P4	弥生	D-8	なし	円形	-	0.39	0.16	
3焼土	弥生	D-9	なし	-	1.25	-	-	焼土内より弥生時代の土器片出土。
3焼土偏方	弥生	D-9	なし	長円形	1.31	-	0.34	
4焼土	弥生	D-7・8	なし	-	0.44	-	-	焼土南脇より弥生土器片
5焼土	弥生	B-2・3, C-2・3	なし	-	3.65	-	-	
6焼土上面	縄文後期初頭	C-8	なし	-	0.81	-	-	焼土周辺に遺物多数出土。住居跡炉の可能性もある。
6焼土下面	-	C-8	なし	-	0.25	-	-	
7焼土	縄文前期	D-9	なし	-	0.53	-	-	縄文トレーニング内最下層で検出。同層位中より前期の石器出土。
8焼土	縄文晩期	D-4	なし	-	1.02	-	-	縄文時代晩期土器片出土。
9焼土	縄文晩期	D-4	なし	-	0.66	-	-	縄文時代晩期土器片出土。
10焼土	縄文後期中葉	D-5	なし	-	0.37	-	-	
10焼土偏方	縄文後期中葉	D-5	なし	円形	0.53	0.48	0.14	
11焼土	縄文後期初頭	B-6	なし	-	0.94	-	-	
D5土集	縄文後期中葉	D-5	なし	橢円形	0.64	0.42	0.15	
D9土集	弥生	D-9	なし	橢円形	0.86	0.65	0.32	



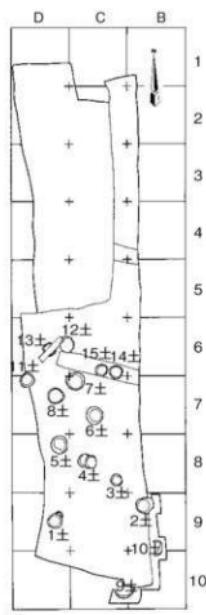
塙越遺跡周辺の地形



塙越遺跡縄文時代全体図

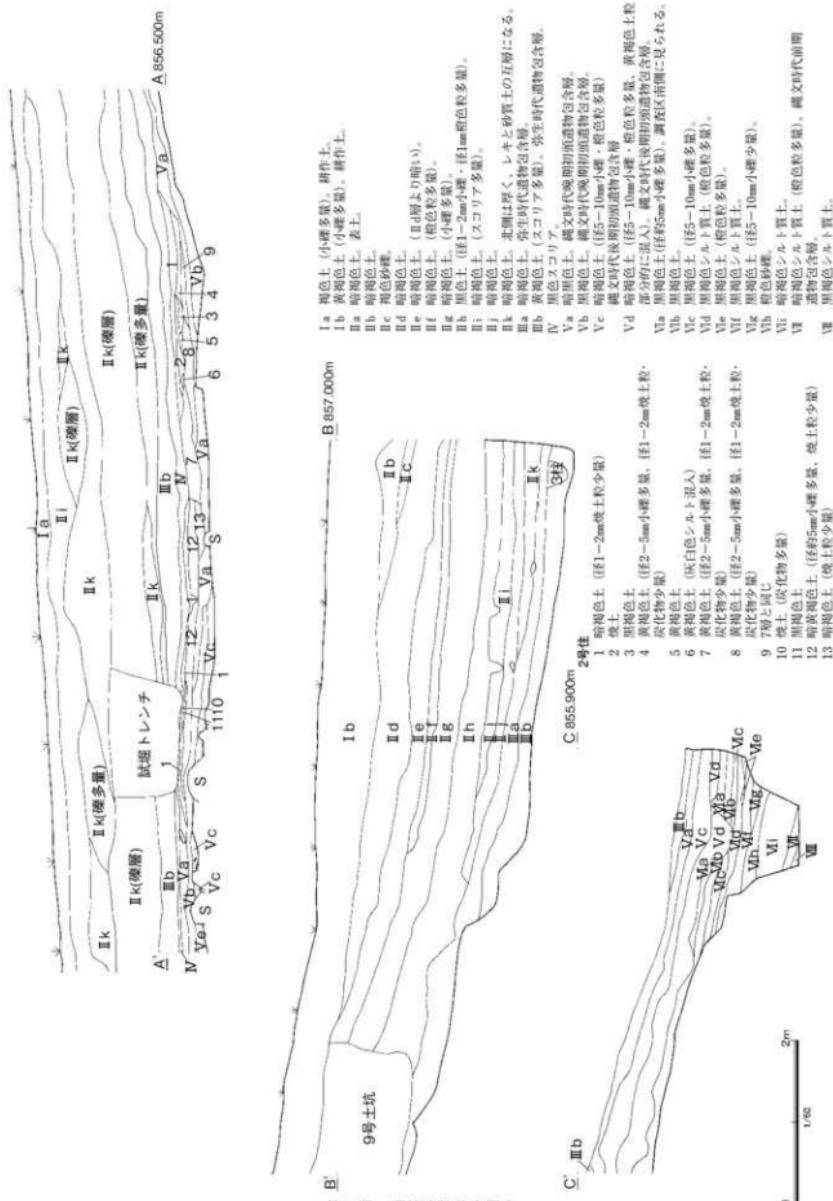


塙越遺跡弥生時代全体図

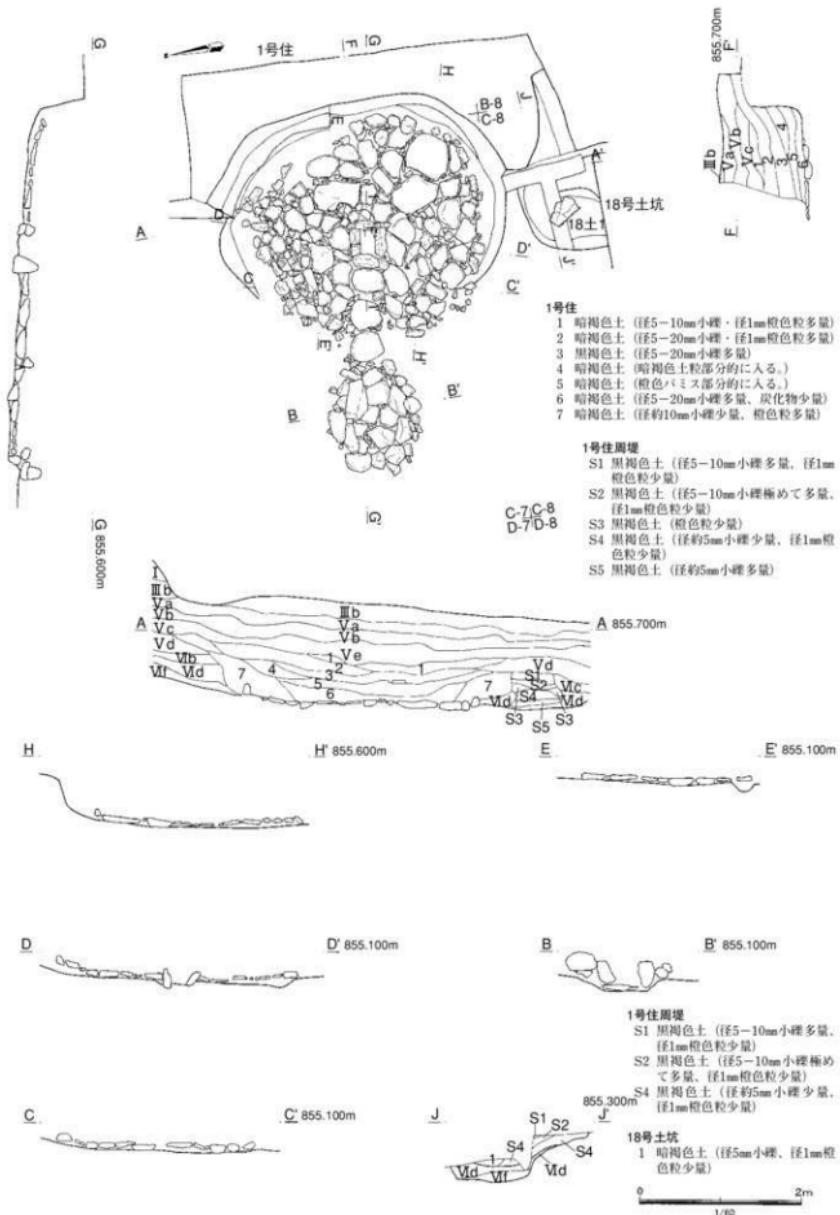


塙越遺跡近世全体図

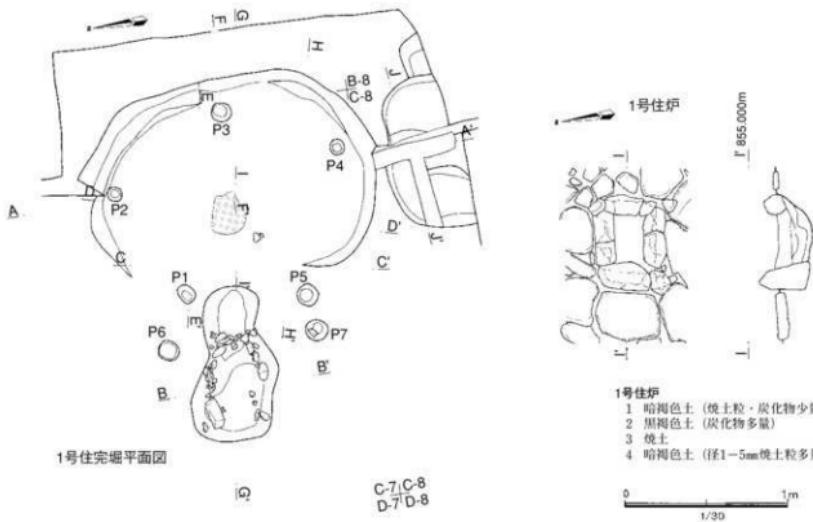
第3図 塙越遺跡周辺の地形・全体図



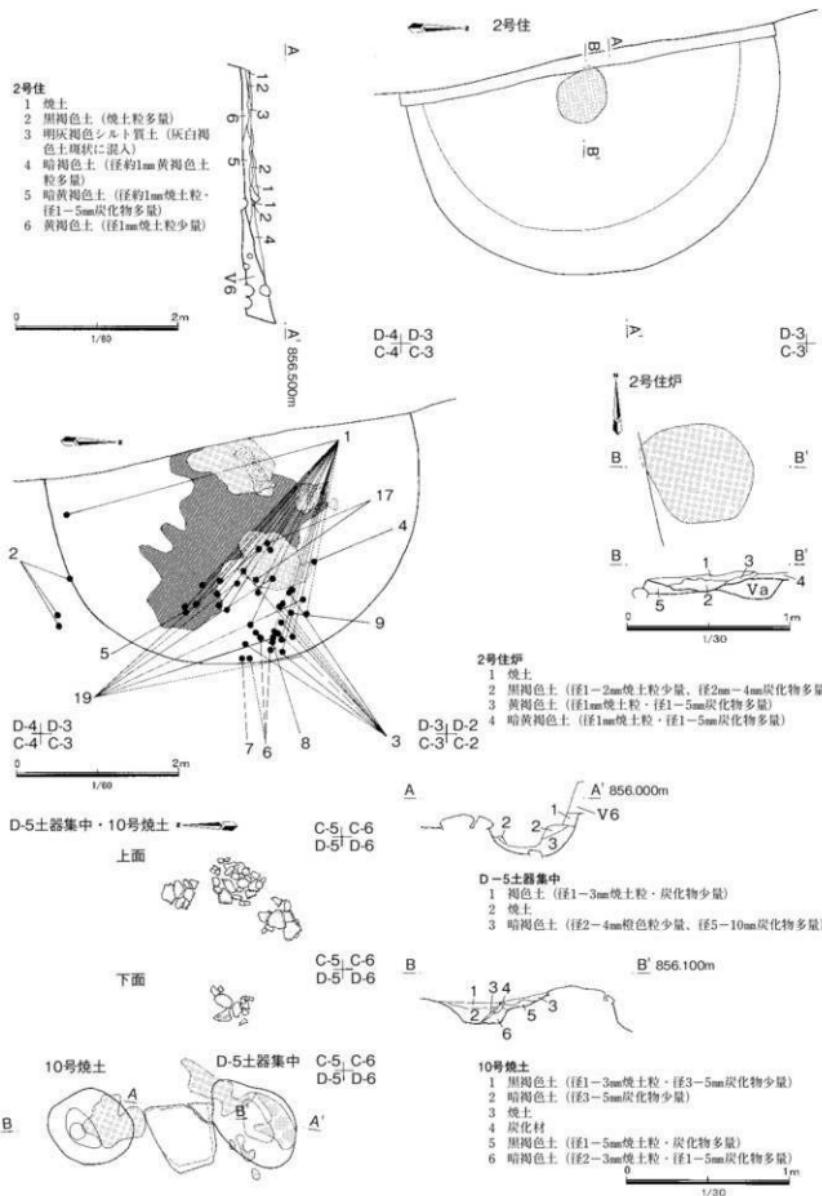
第4図 塚越遺跡基本層序



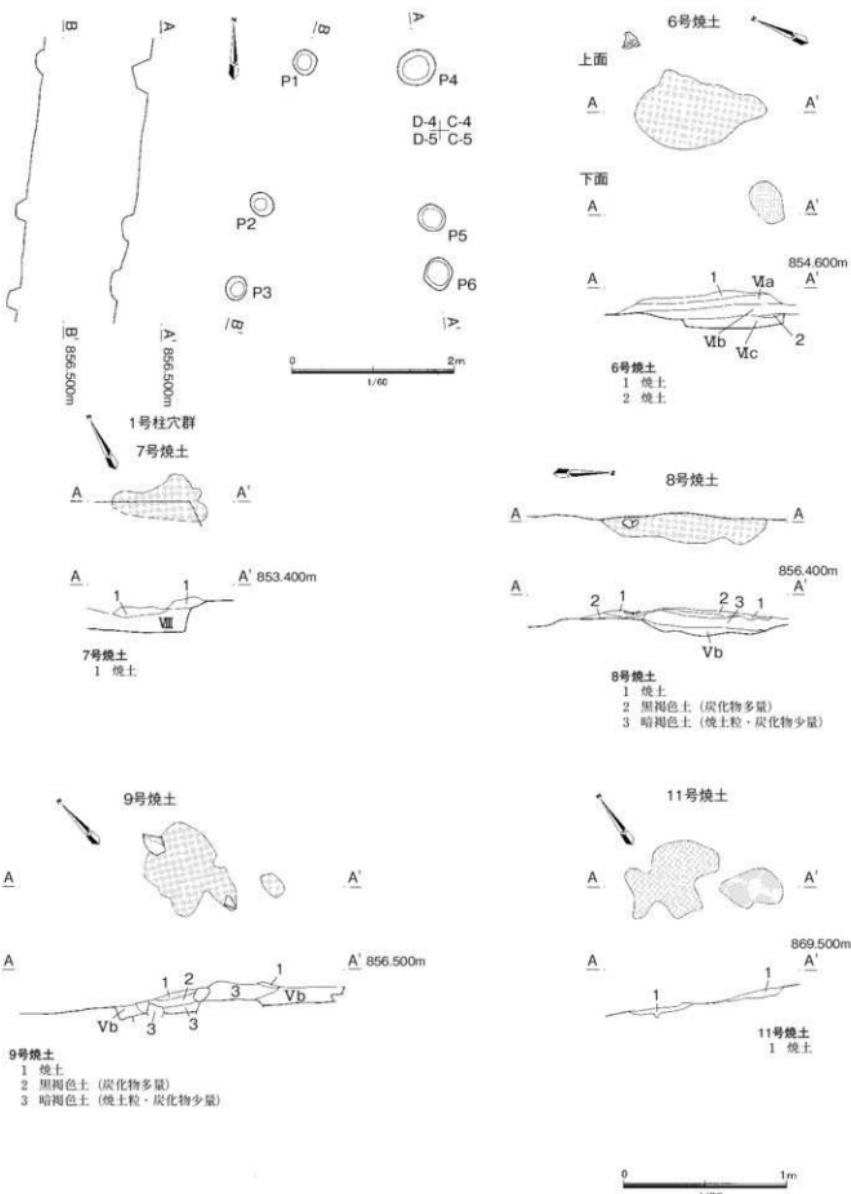
第5図 塚越遺跡縄文時代1号住跡



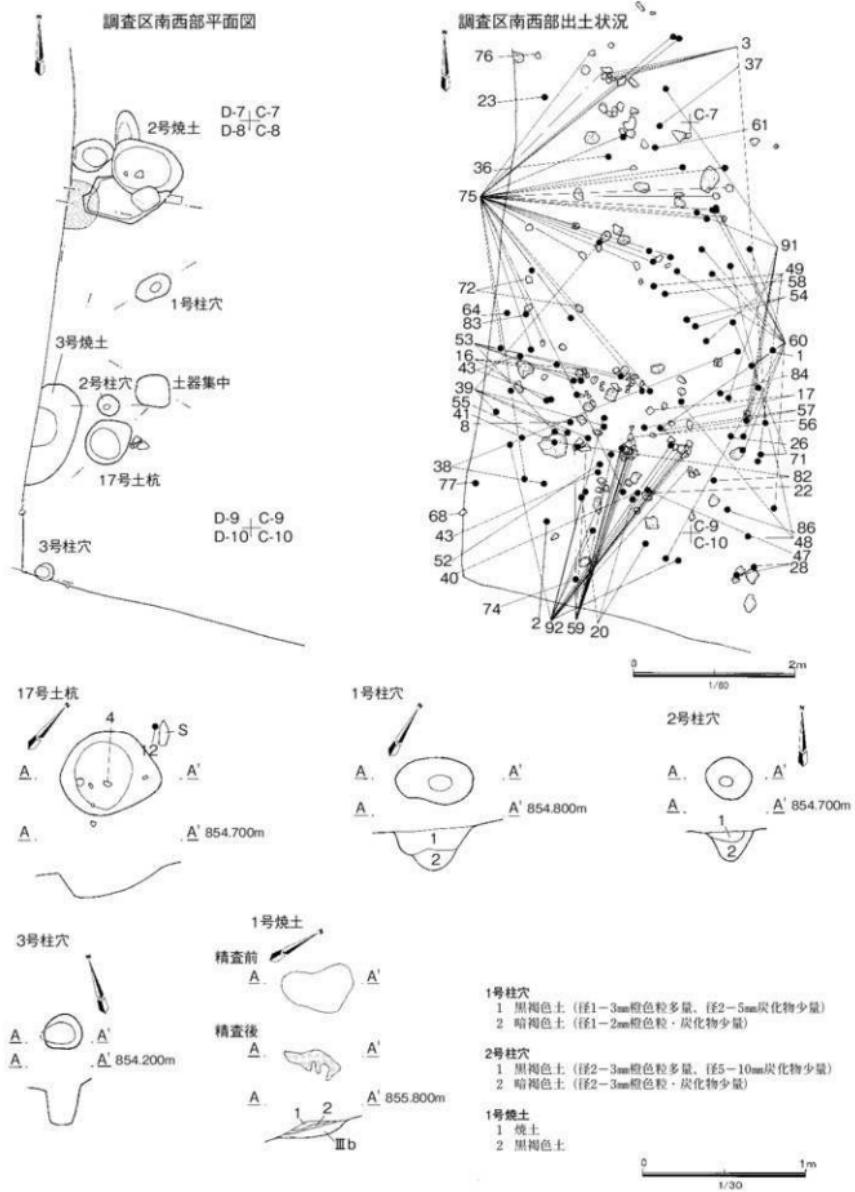
第6図 塚越遺跡縄文時代1号住居跡



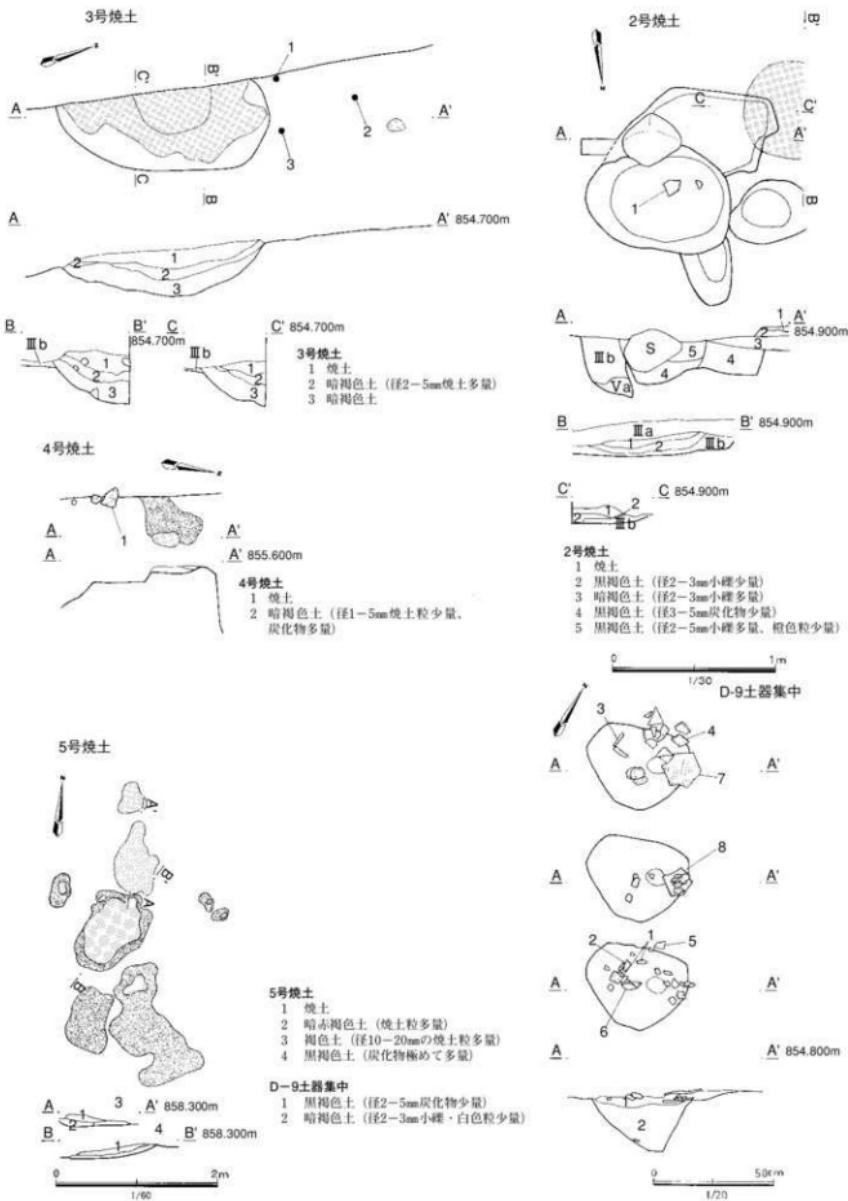
第7図 塚越遺跡縄文時代2号住居跡・D-9土器集中



第8図 塚越遺跡縄文時代1号柱穴群・焼土

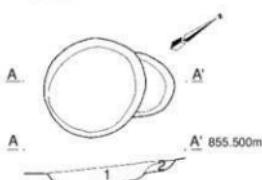


第9図 塚越遺跡弥生時代調査区南西部・土坑・柱穴・焼土



第10図 塚越遺跡弥生時代焼土・D-9土器集中

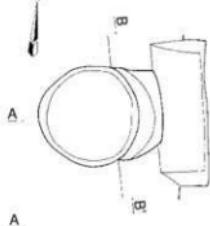
1号土坑



1号土坑

- 1 黑褐色土 (径3~4mm小砾多量, 径1~2mm橙色粒少量)
- 2 喀褐色土 (径2~3mm小砾·橙色粒少量)

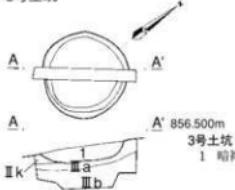
2号土坑



B 858.500m

A' 858.500m

3号土坑



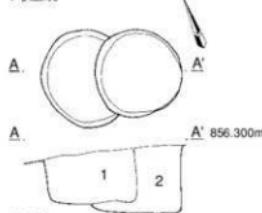
3号土坑

- 1 喀褐色土 (径1~2mm小砾·径1mm橙色粒少量)

2号土坑

- 1 喀褐色土 (径2~3mm小砾·径1mm橙色粒多量)
- 2 喀黄褐色土 (径2~3mm小砾·径1mm橙色粒少量)
- 3 黑褐色土 (径1~2mm小砾少量, 黑色土粒少量)
- 4 喀褐色土 (径2~5mm小砾少量)

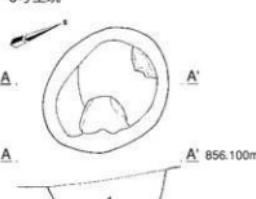
4号土坑



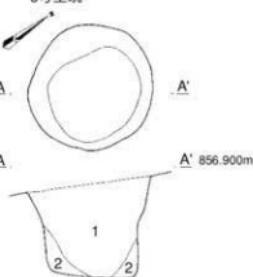
4号土坑

- 1 喀褐色土 (径2~3mm小砾·橙色粒多量, 橙色土粒少量)
- 2 喀褐色土 (径2~3mm小砾·橙色粒少量, 橙色粒·褐色土粒少量)

5号土坑



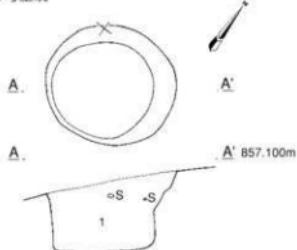
6号土坑



6号土坑

- 1 喀褐色土 (径2~5mm小砾多量)
- 2 喀褐色土 (径1~2mm小砾少量)

7号土坑



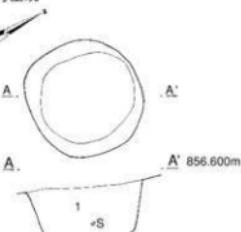
7号土坑

- 1 喀褐色土 (径30~50mm砾少量, 径1~5mm小砾多量)

8号土坑

- 1 喀褐色土 (径2~3mm小砾多量, 橙色粒少量)

8号土坑



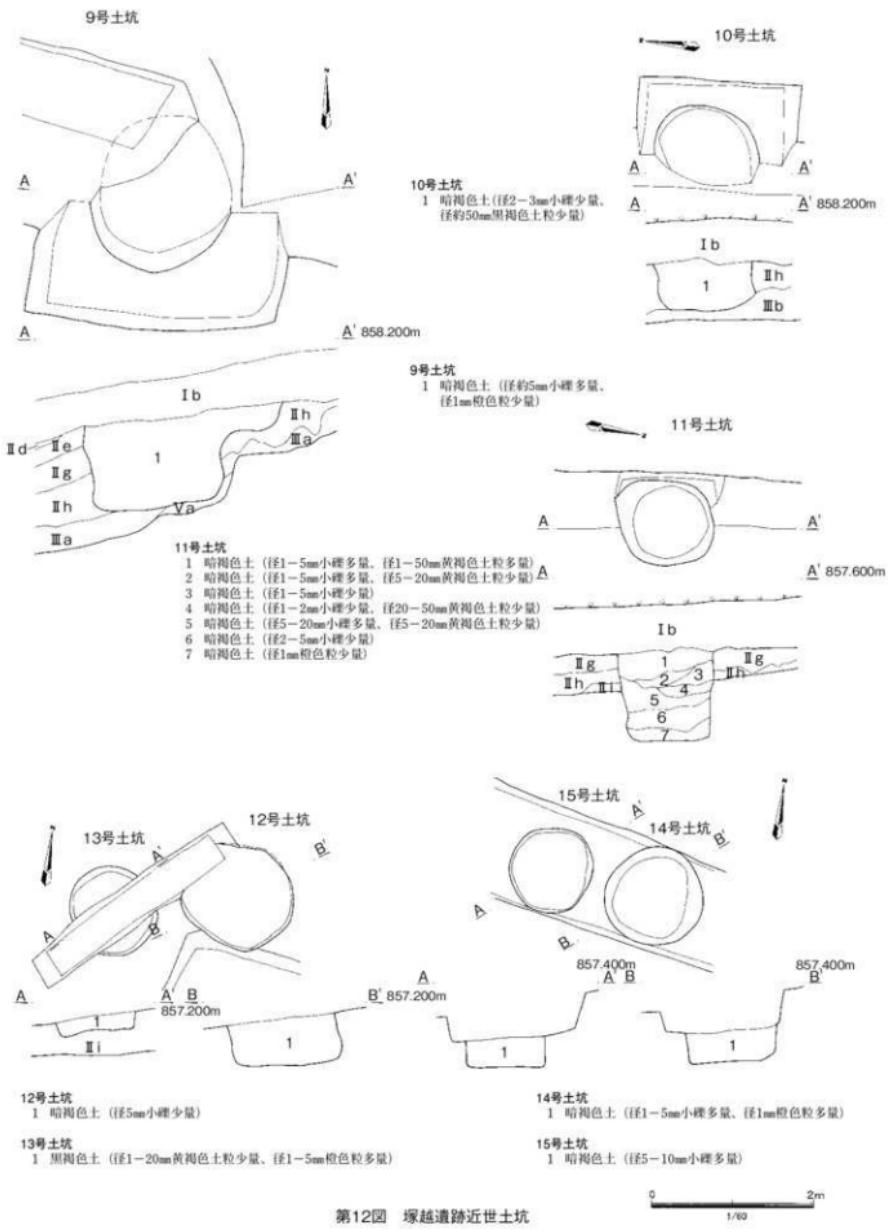
0

1

2m

1/80

第11図 塚越遺跡近世土坑



第12図 塚越遺跡近世土坑

表2-2 墓越遺跡縄文時代土器・土製品觀察表

出土地点	図版番号	分類	機種	口径 (cm)	寸法 (cm)	部位・形態	整形・施文技法		色調	粘土	備考
							( )	=復元値			
2住	17	11	V群1類	深鉢	-----	脚部	沈像で三叉状入組文を施す。	明褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	12	V群2類	深鉢	(20.0) -----	口縁部	口縁部底面下段をもじら。段上に纏文が施文される。	黒褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	13	V群2類	深鉢	-----	口縁部	脚部	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	14	V群2類	深鉢	-----	口縁部	脚部	明褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	15	V群3類	深鉢	-----	口縁部	口縁部底面下に纏文をもじら。纏文が施文すると思われる。	黒褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	16	V群3類	深鉢	-----	口縁部	口縁部底面下に纏文をもじら。纏文が施文すると思われる。	黒褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	17	V群3類	深鉢	-----	口縁部	無文の口縁部底面下に脚部を削り取る。	黒褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
2住	17	18	V群1類	深鉢	(7.6) -----	脚部	脚部に木製鉗をもじつ。	黒褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
D-5土集	18	1	III群2類	深鉢	27.5-9.0-34.1 最大径27.6	脚部	脚部に木製鉗を呈する。底部には網代鉢底。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
D-5土集	18	2	III群	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
D-5土集	18	3	III群	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
18土	19	1	III群3類	深鉢	(46.0) -----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
8焼	19	1	V群	深鉢	(4.7) -----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
D-7	19	1	I群	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-9	19	2	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	19	3	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-7	20	4	II群1類	深鉢	(24.0) -----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-7	20	5	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-9	20	6	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-6	20	7	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8・C-9	20	8	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-7	20	9	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	20	10	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-9	20	11	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	20	12	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-9	20	13	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	20	14	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	20	15	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	にぶい黄褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8・C-9	21	16	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	21	17	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-7	21	18	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-6	21	19	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-8	21	20	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	
C-7	21	21	II群1類	深鉢	-----	脚部	脚部がくびれ、脚部が膨らむ。	暗褐色	密(雲母含)	密(雲母含)	

出土地点	図版番号	番号	分類	機種	口括・底括・器高 (cm) （）＝復元値	部位・形態	整形・施文技法		色調	粘土	備考
							口縁～胴上部	口縁部			
C-8	21	22	II群2類	深鉢	(23.1) ····	4脚立の茎尖口唇の底面部に円形の大型突起を施し、口縁部に沿つて輪を施した陰帶を施す。脇筋部は口縁貼付文に繩文を充填する。		黒褐色	密		
C-8	21	23	II群2類	深鉢	··· ··· ···	脇から腹部に沿つて輪を下させ、2条陰帶によって区画された範囲外に繩文を充填する。		黒褐色	密(雲母含)		
C-8	21	24	II群2類	深鉢	··· ··· ···	脇から腹部に沿つて輪を下させ、2条陰帶によって区画された範囲外に繩文を充填する。		黒褐色	密(雲母含)		
C-8	21	25	II群2類	深鉢	(24.7) ····	形状を呈する口縁部で底面部に大型突起をもつ。口縁部突起が輪筋部に沿つて輪を施された陰帶間に繩文を充填する。		黒褐色	密(雲母含)		
C-8	21	26	II群2類	深鉢	··· ··· ···	口縁部に沿つて輪筋部で底面部に大型突起をもつ。口縁部突起が輪筋部に沿つて輪を施された陰帶が並ぶ。陰帶下は繩文が施文される。		にぶい 黄褐色	密		
C-8	21	27	II群2類	深鉢	··· ··· ···	輪筋によつて区画し、区画内に繩文を施す。区画内に繩文を施す。輪筋は輪筋上に縦筋を施す。		にぶい 黄褐色	密		
C-7	22	28	II群2類	深鉢	··· ··· ···	輪筋によつて区画し、区画内に繩文を施す。輪筋は輪筋上に縦筋を施す。また、ぶぶ。		明赤褐色	密		
C-8	22	29	II群2類	深鉢	··· ··· ···	輪筋によつて区画し、区画内に繩文を施す。輪筋は輪筋上に縦筋を施す。		桜色	密(雲母含)		
C-9	22	30	II群2類	深鉢	··· ··· ···	輪筋下部によつて区画し、区画内に繩文を施す。		桜色	密		
C-8	22	31	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、次輪下に縦筋を保険方向に施す。		にぶい 黄褐色	密(雲母含)		
C-8	22	32	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、次輪下に縦筋を保険方向に施す。		明褐色	密(雲母含)		
C-8	22	33	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、次輪下に縦筋を保険方向に施す。		明褐色	密(雲母含)		
C-6・D-6	22	34	II群3類	深鉢	(34.0) ····	輪筋下部に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。35・36・37と同一個体。		明黄褐色	密(雲母含)		
C-8	22	35	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。33・36・37と同一個体。		にぶい 黄褐色	密(雲母含)		
C-6・C-9	22	36	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		黒褐色	密(雲母含)		
C-6・C-7	22	37	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋下部に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。33・35・36と同一個体。		黒褐色	密(雲母含)		
C-9	23	38	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		明褐色	密(雲母含)		
C-8	23	39	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		黒褐色	密(雲母含)		
C-8	23	40	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		明褐色	密(雲母含)		
C-8	23	41	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		黒褐色	密(雲母含)		
C-4	23	42	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		オリーブ褐色	密(雲母含)		
C-8・C-9	23	43	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		にぶい 黄褐色	密(雲母含)		
C-8・C-9	23	44	II群3類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		明黄褐色	密(雲母含)		
C-8	23	45	II群4類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		黒褐色	密(雲母含)		
C-8	23	46	II群5類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		明褐色	密(雲母含)		
C-8	23	47	II群1類	深鉢	··· ··· ···	輪筋部下に輪を巡らし、縦方向の筋繩文を施す。		にぶい 黄褐色	密(雲母含)		
C-9	23	48	II群	深鉢	-6.8-	底部に輪筋に縦筋を施す。底部で横円状のモチーフを描き、横円内に外反する口縁部で、次輪で横円状のモチーフを描き、横円内に繩文を充填する。		明黄褐色	密(雲母含)		
C-8	23	49	II群	深鉢	-9.6-	底部には輪筋と、底面には縦筋代用。本垂頭はみられない。		明褐色	密(雲母含)		
C-9	23	50	II群	深鉢	-8.0-	底部が突出する器形。		明褐色	密(雲母含)		
C-6	23	51	II群	深鉢	-11.6-	底部は底面側斜めに張り出る。		桜色	密(雲母含)		

出土地点	図版番号	分類	機種	口径 (cm)	部位・形態	色調	粘土	備考
C-3・D-3	24	52	III群1類	深鉢	(15.0) ···· )=(後元鉢)	口縁部に沿って2条の羽みを持つ隆線をめぐらし、8字形のモチーフを描く。	灰褐色	密(蒙母含)
B-3	24	53	III群1類	深鉢	·····	口縁部で隆線をつなぐ。胸面部には繩文帯で三角形のモチーフを描く。	明褐色	密
C-6	24	54	III群1類	深鉢	·····	口縁部で隆線をつなぐ。胸面部で2条の羽みをもつ隆線をめぐらす。	黒褐色	密(蒙母含)
C-4・C-5	24	55	III群4類	深鉢	(14.4) ····	口縁部で隆線をつなぐ。胸面部で2条の羽みをもつ隆線をめぐらす。	黒褐色	密(蒙母含)
C-3・C-4	24	56	III群5類a種	深鉢	(11.0) ····	口縁部に沿って2条の羽みがめぐる。口縁部の内面部と頸部に口縁部で隆線をつなぐ。	黒褐色	密(蒙母含)
C-6	24	57	III群5類b種	深鉢	(11.0) ····	口縁部に外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-7	24	59	III群5類d種	深鉢	·····	口縁部で隆線をつなぐ。	黒褐色	密(蒙母含)
D-4	24	60	III群5類e種	深鉢	·····	口縁部に外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-2	24	61	III群5類f種	深鉢	·····	口縁部で隆線をつなぐ。	黒褐色	密(蒙母含)
D-5	24	62	III群5類g種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
B-4	24	64	III群5類h種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-2・C-3	25	65	III群5類i種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-5	25	66	III群5類c種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-6	25	67	III群5類d種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
B-3	25	68	III群5類e種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-6	25	69	III群	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-5	25	70	III群	深鉢	-6.1- ····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-2	25	72	III群6類	注口	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
一括	25	73	IV群	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-5	25	74	V群1類a種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
B-2・C-3	25	75	V群1類b種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-5	25	76	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-2	25	77	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-5	25	78	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
B・C-2	25	79	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-3	25	80	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
D-2・3	25	81	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-4	25	82	V群1類	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黒褐色	密(蒙母含)
C-6	26	83	V群2類a種	深鉢	(20.6) ····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	橙色	密(蒙母含)
D-5・6	26	84	V群2類b種	深鉢	(13.2) ····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	黑褐色	密(蒙母含)
D-6	26	85	V群2類c種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	灰褐色	密(蒙母含)
C-4	26	86	V群2類d種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	灰褐色	密(蒙母含)
D-5	26	87	V群2類e種	深鉢	·····	口縁部で外反する器形。口縁部内面に2条の辺線がめぐる。	灰褐色	密(蒙母含)

出土地点	図版番号	番号	分類	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	性形・施文技法		部位・形態	色調	粘土	備考
								( ) = 後元鏡					
C-6	26	87	V群2瓶a類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に縄文帯をもち、その下に大いに弦文で入組織の手文をほどこす。		口縁部	暗褐色	密	密 (雲母含)
D-5	26	88	V群2瓶a類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部から縄文帯、入組まない織の手文、縄文帯の斯で施文される部に強い凹凸を持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-3・4	26	89	V群2瓶a類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
C-4	26	90	V群2瓶a類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-5	26	91	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
C-5	26	92	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
B-4	26	93	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
C-4	26	94	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-5・6	26	95	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-5	26	96	V群3瓶類	深鉢	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形。		口縁部	灰褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)

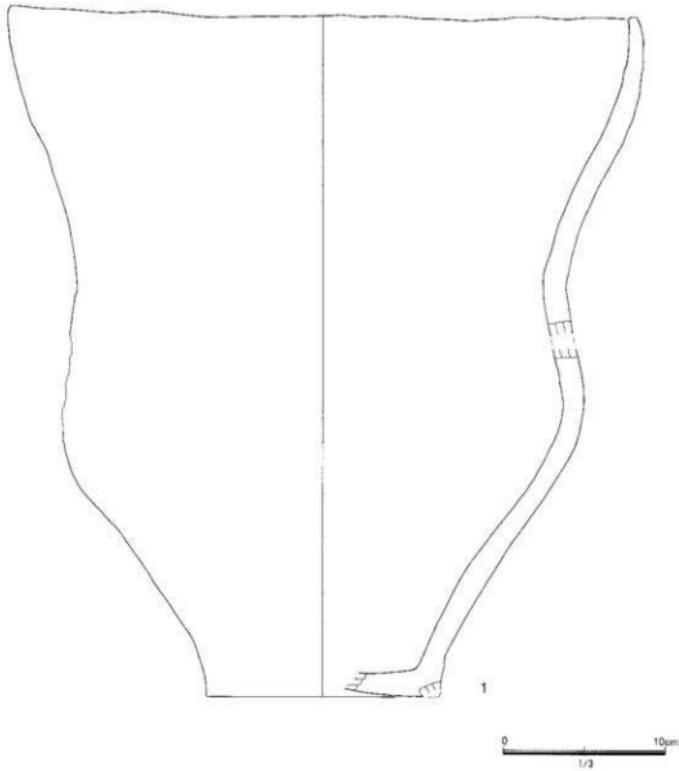
出土地点	図版番号	番号	分類	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	性形・施文技法		部位・形態	色調	粘土	備考
								( ) = 後元鏡					
17土	27	1	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
17土	27	2	IV群2瓶a種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具による。口縁部内面に無文章、条件となる。条件は植物の枝葉を束ねた工具による。口縁部内面に無文章とし、口縁部を施文する。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
3柱	27	1	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	明褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
2焼	27	1	IV群4瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
3焼	27	1	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
3焼	27	2	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
3焼	27	3	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で横方向の条件を施す。		口縁部	黑褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
4焼	27	1	IV群3瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	明褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	1	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	明褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	2	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	明褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	3	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	黄褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	4	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	黄褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	5	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	黄褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)
D-9土集	27	6	IV群1瓶c種	甕	---	---	口縁部	口縁部に強いたれを持った器形のくぼみを施し、断面が丸底状である。		口縁部	黄褐色	密 (雲母含)	密 (雲母含)

第3表 塙越遺跡縄文時代土器観察表

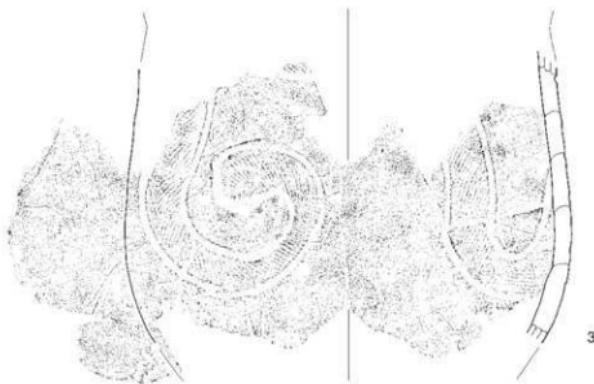
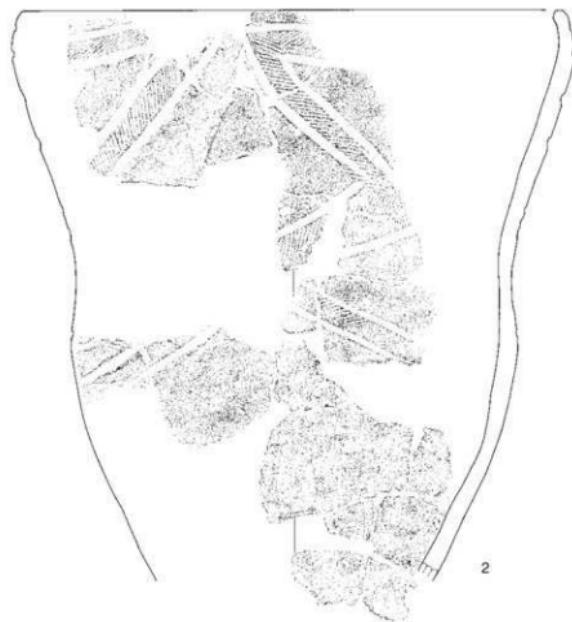
出土地點	回収番号	番号	分類	機種	口径・底径・器高 (cm)	部位・形態	絞り・施文技法	色調	粘土	備考
D-9土集	27	7	IV群1類	壺	-----	肩部	頭部が無文となり、胴部には植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	にぶい褐色 褐色 灰褐色	密(雲母含) 密(雲母含) 密(雲母含)	
D-9土集	27	8	IV群1類	壺	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 灰褐色	密(雲母含)	
C-9	28	1	IV群1類c種	壺	-----	口縁部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 灰褐色	密(雲母含)	
C-9	28	2	IV群1類b種	甕	(29.6) -----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	明赤褐色 黒褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
C-9・8	28	3	IV群1類b種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	黒褐色	密(雲母含)	
D-10	28	4	IV群1類b種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
C-9	28	5	IV群1類c種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを部分的に施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
C-5	28	6	IV群1類c種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
D-8	28	7	IV群1類c種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
D-9・10	28	8	IV群1類c種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
C-7	28	9	IV群1類c種	甕	-----	口縁部	口縁部にへら状工具による割込みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色 褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
C-7	28	10	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
C-7	28	11	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
C-7	28	12	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
C-7	28	13	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
C-7	28	14	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
C-6	28	15	IV群1類c種	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。器壁は薄。	褐色	密(雲母含)	
D-9	29	16	IV群1類c種	甕	(33.4) -----	口縁部	口縁部に指印による長楕円形の刻みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	黒褐色	密(雲母含)	
D-9	29	17	IV群1類c種	甕	(25.6) -----	口縁部	口縁部に指印による長楕円形の刻みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	黒褐色	密(雲母含)	
C-8	29	18	IV群1類	甕	-----	口縁部	口縁部に指印による長楕円形の刻みを施し、植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色	密(雲母含)	
D-8	29	19	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	明赤褐色 褐色	密(雲母含) 密(雲母含)	
D-9	29	20	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) にぶい褐色	
D-9	29	21	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) にぶい褐色	
D-9	29	22	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) にぶい褐色	
D-8	29	23	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) にぶい褐色	
D-10	29	24	IV群1類	甕	-----	肩部	植物の枝葉を束ねた工具で機方向の条件を施す。	褐色 暗褐色	密(雲母含) にぶい褐色	

出土地点	区段番号	番号	分類	機種	口径・底径・器高 (cm)	部位・形態	整形・施文技法		色調	胎土	備考
							側部	底部			
-活	29	25	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密	
C-9	29	26	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	灰褐色	密	
C-9	29	27	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密	
C-10	29	28	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	
C-9	29	29	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	
C-9	29	30	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	
C-9	30	31	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	(實母含)
B-3	30	32	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	(實母含)
C-7	30	33	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	(實母含)
B・C-3	30	34	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密	(實母含)
-活	30	35	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密	
D-9	30	36	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
C-9	30	37	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密 (實母含)	
D-9	30	39	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密 (實母含)	
D-9	30	40	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
D-9	30	41	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
C-10	30	42	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
D-9	30	43	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
B-8・C-9	30	44	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
C-9	30	45	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
D-10	30	46	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密 (實母含)	
D-9	30	47	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
C・D-9	30	48	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
C-9	30	49	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
C-9・10	31	50	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
C・D-9	31	51	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
D-9	31	52	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密 (實母含)	
D-9	31	53	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	明赤褐色	密 (實母含)	
C・D-9	31	54	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	褐色	密 (實母含)	
D-9	31	55	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	にぶい黒褐色	密 (實母含)	
D-8・9	31	56	IV群1類	甕	26	IV群1類	甕	甕	灰褐色	密	
D-9・10	31	57	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	灰褐色	密	
C-8・9	31	58	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	灰褐色	密 (實母含)	
D-9	32	59	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
C-9	32	60	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
D-9・10	32	61	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	黒褐色	密 (實母含)	
D-6	32	62	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	明赤褐色	密 (實母含)	
D-8	32	63	IV群2類	甕	26	IV群2類	甕	甕	明赤褐色	密 (實母含)	
D-9	32	64	IV群3a類	甕	26	IV群3a類	甕	甕	明赤褐色	密 (實母含)	

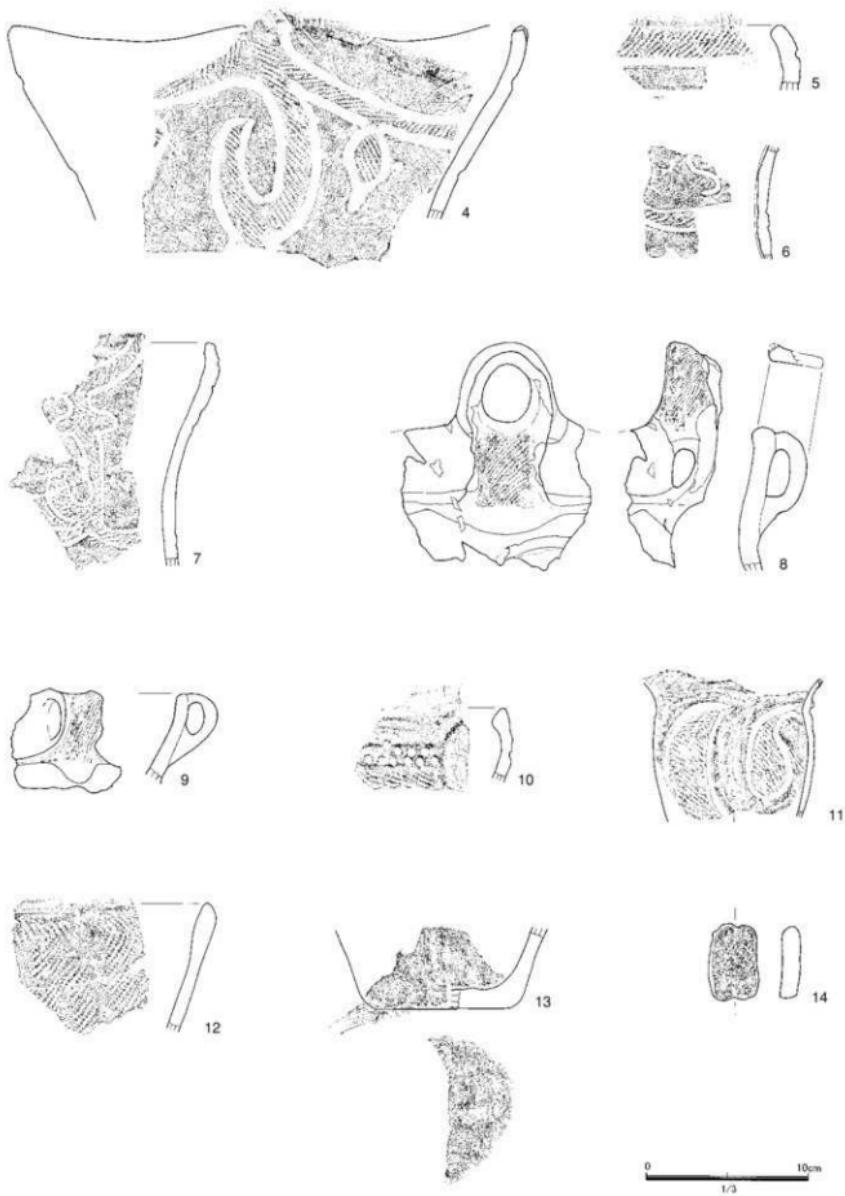
出土地点	図版番号	分類	機種	口径・底径・器高 (cm)	部位・形態	整形・施文技法	色調	胎土	備考	
B-10	32	65	IV群3頭立彌	甕	口縁部 側部 脇部 脇部	口縁部が外に出っ張る。無文。	にぶい黄褐色	密		
D-6・7・9	32	66	IV群	甕	脇部 脇部 脇部	脇部	明褐色	密(黒母合)		
C-9	33	67	IV群	甕	脇部 脇部	脇部	明褐色	密(黒母合)		
B-9	33	68	IV群	甕	脇部 脇部	脇部	褐色	密(黒母合)		
C-7・8・9	33	69	IV群3頭立彌	甕	底部 底部 底部	底部	にぶい黄褐色	密(黒母合)		
D-9	33	70	IV群3頭立彌	甕	底部 底部 底部	底部	黄褐色	密		
C-9	33	71	IV群3頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	オリーブ褐色	密(黒母合)		
C・D-9	33	72	IV群3頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	明黄褐色	密(黒母合)		
C-9	33	73	IV群3頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	にぶい黄褐色	密(黒母合)		
D-10	33	74	IV群3頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	明黄褐色	密(黒母合)		
C-9	33	75	IV群4頭立彌	甕	最大径18.0 底面木製底 底面木製底	下部 口縁部 脇部	にぶい黄褐色	密(黒母合)		
D-8	34	76	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	明赤褐色	密(黒母合)		
D-9	34	77	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	黒褐色	密(黒母合)		
D-10	34	78	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	黒褐色	密(黒母合)		
D-9	34	79	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	黒褐色	密(黒母合)		
C-8	34	80	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	黒褐色	密(黒母合)		
B-8	34	81	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	褐色	密(黒母合)		
C・D-9	34	82	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	褐色	密(黒母合)		
D-9	34	83	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	褐色	密(黒母合)		
C-9	34	84	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	明赤褐色	密		
D-10	34	85	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	明赤褐色	密		
C-9	34	86	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	にぶい黄褐色	密		
C-9	34	87	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	褐色	密		
D-9	34	88	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	にぶい黄褐色	密		
C-10	34	89	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	褐色	密(黒母合)		
D-10	34	90	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	黒褐色	密(黒母合)		
C-9	34	91	IV群4頭立彌	甕	底面木製底 底面木製底 底面木製底	脇部 脇部 脇部	太い沈線で三角形の区画をし、区画内に墨文を充填する。	黒褐色	密(黒母合)	
D-8・9	34	92	IV群5頭	鉢	20.8-5.3-10.3	口縁～底部	黒褐色	密(黒母合)		
D-9・10	34	92	IV群5頭	鉢	20.8-5.3-10.3	口縁～底部	黒褐色	密(黒母合)		



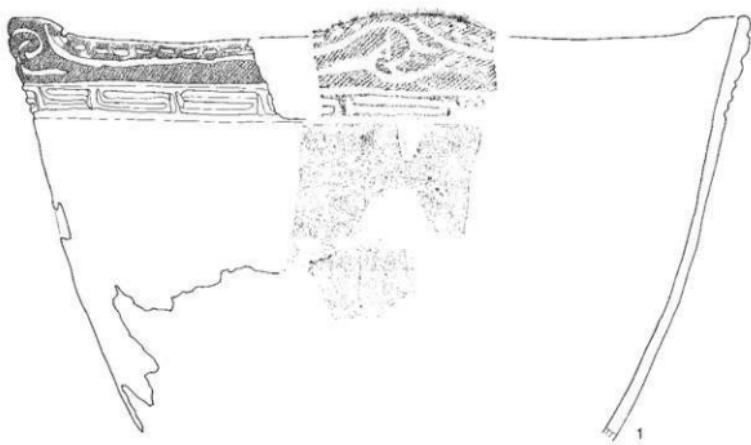
第13図 塚越遺跡出土縄文土器（1号住居跡）



第14図 塚越遺跡出土網文土器（1号住居跡）



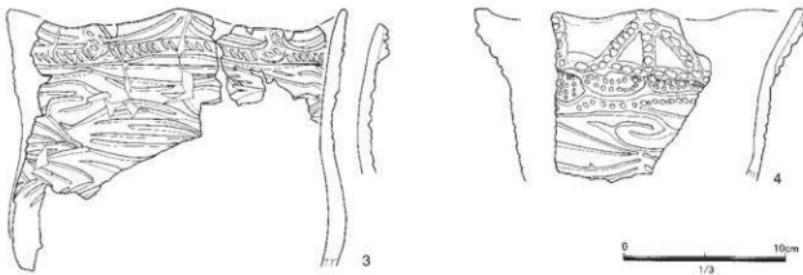
第15図 塚越遺跡出土繩文土器・土製品（1号住居跡）



1



2

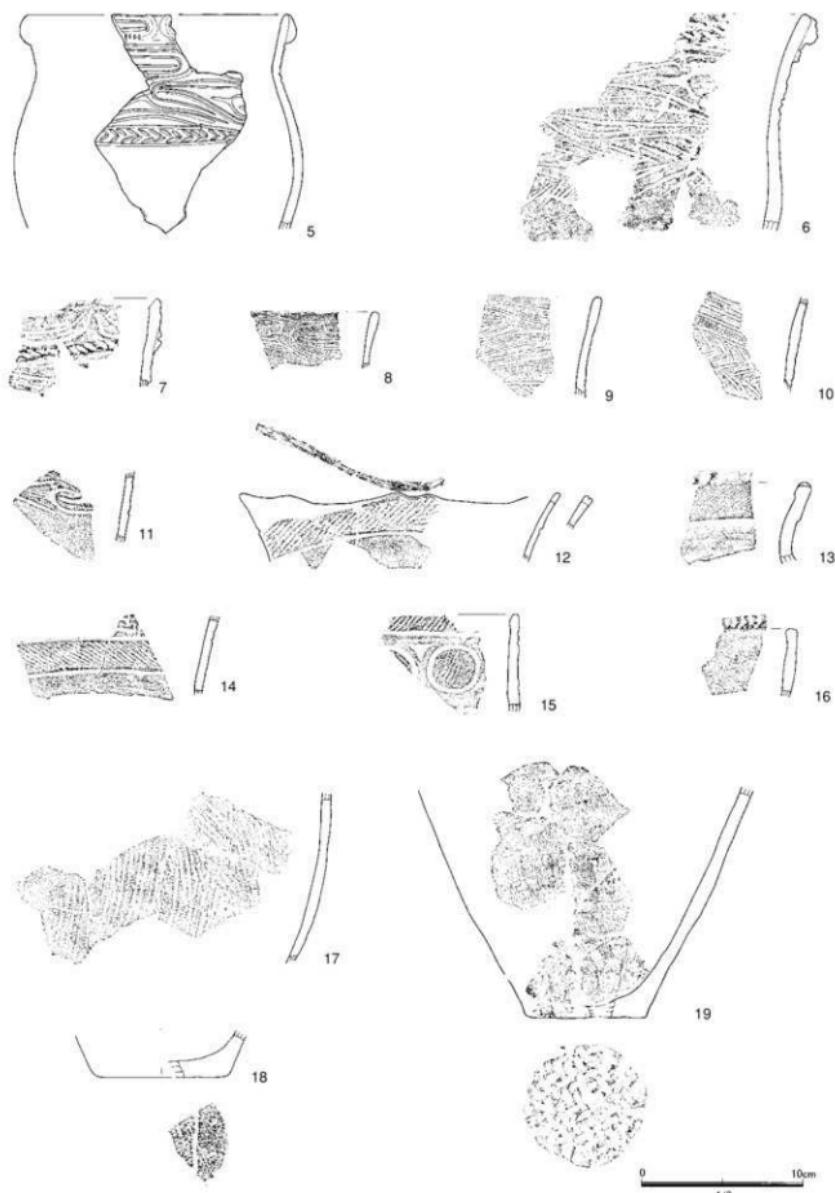


3

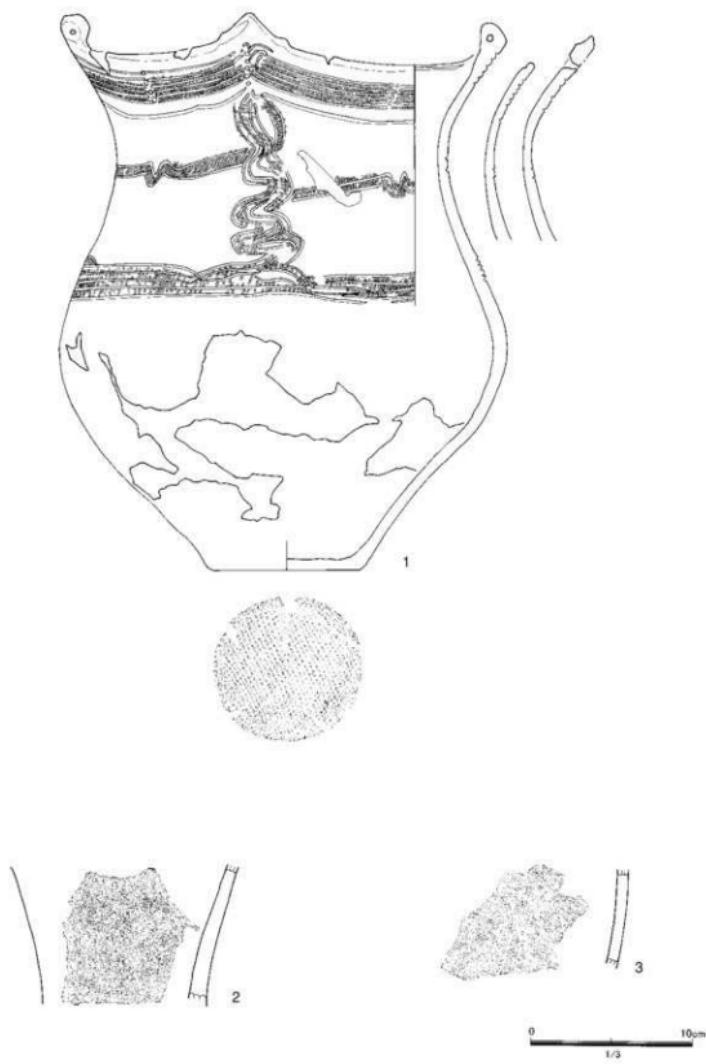
10cm

1/3

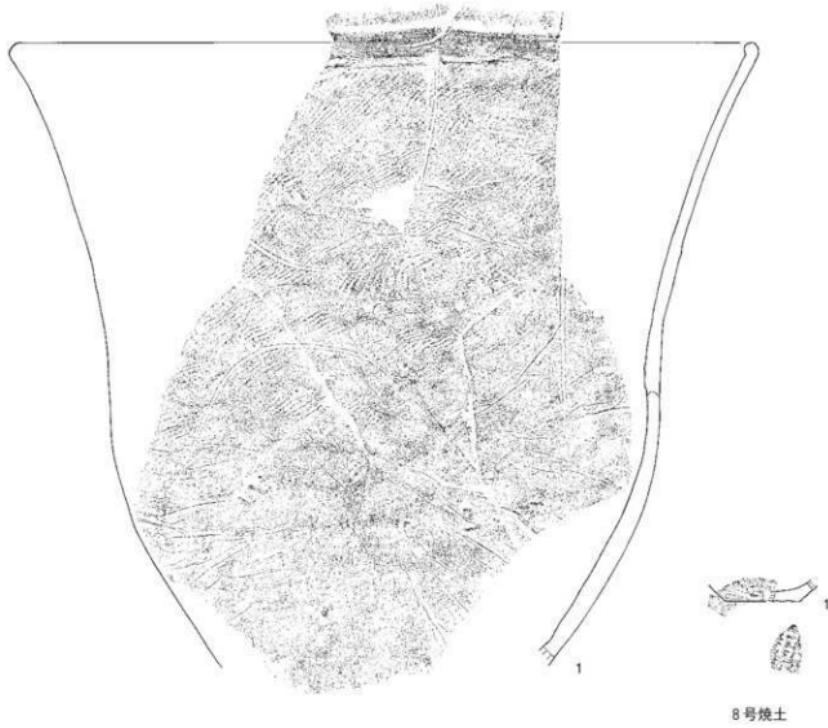
第16図 塚越遺跡出土繩文土器（2号住居跡）



第17図 塚越遺跡出土網文土器 (2号住居跡)



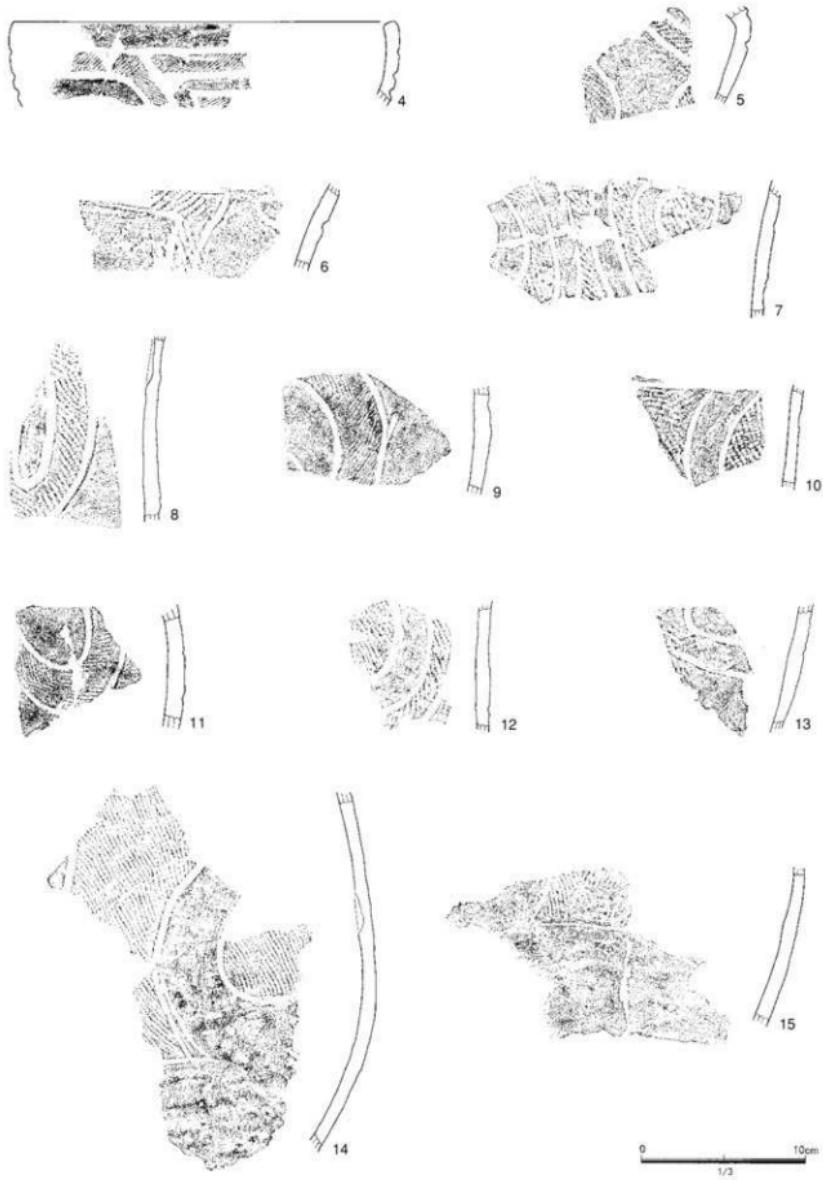
第18図 塚越遺跡出土縄文土器 (D-5土器集中)



18号土坑



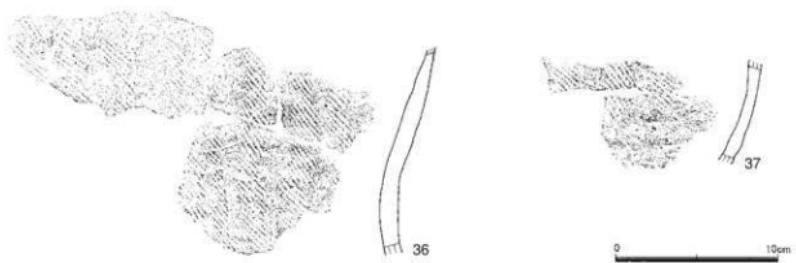
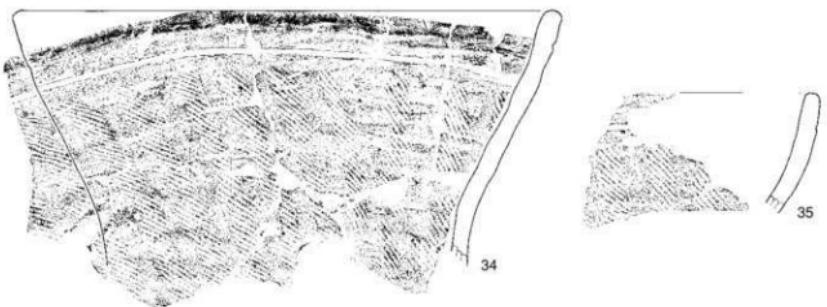
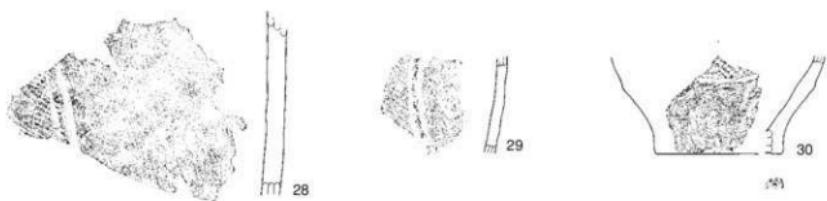
第19図 塚越遺跡出土繩文土器（18号土坑・遺構外）



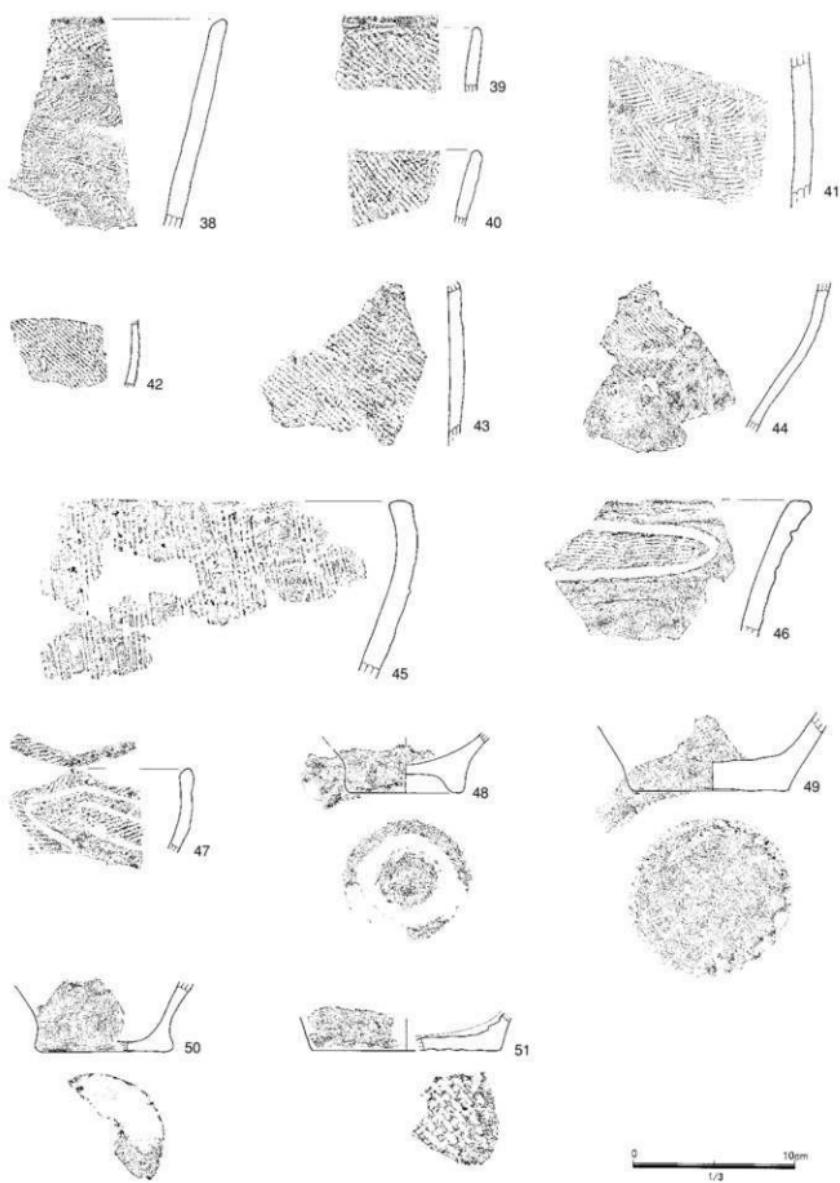
第20図 塚越遺跡出土繩文土器（遺構外出土）



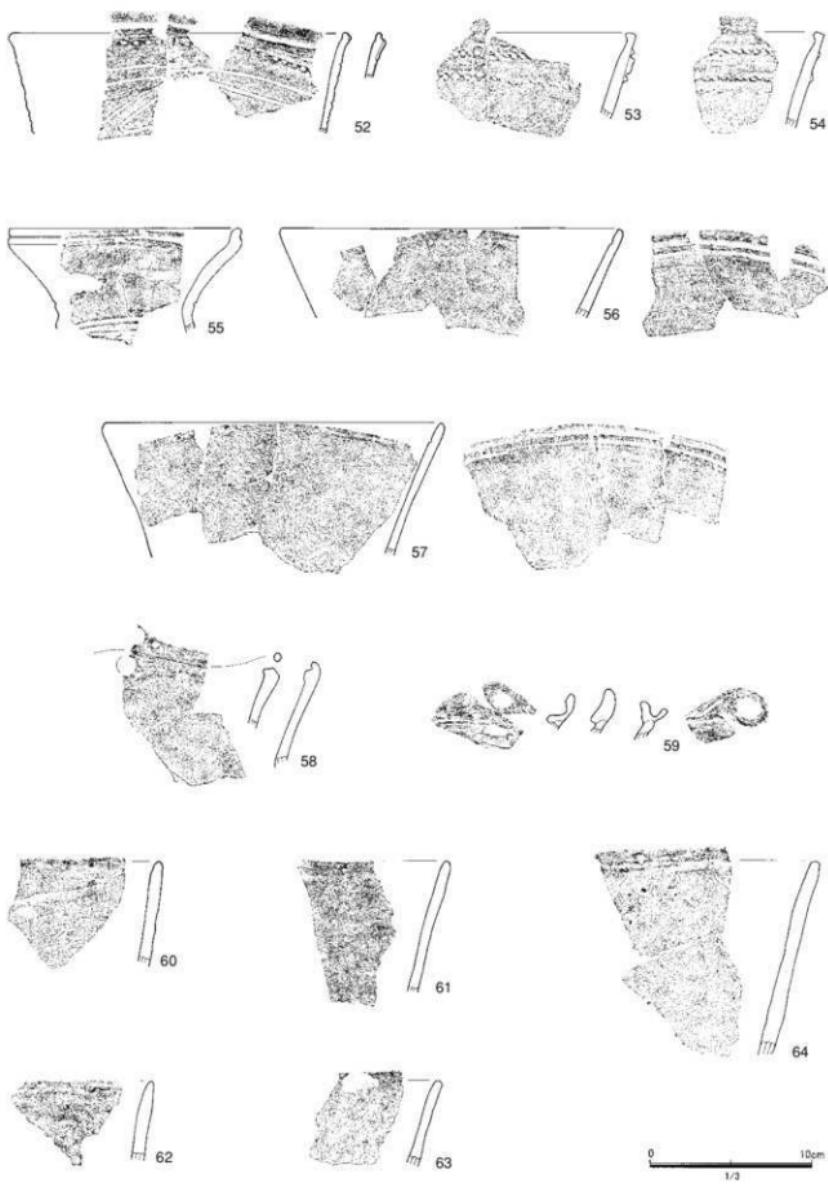
第21図 塚越遺跡出土網文土器（遺構外出土）



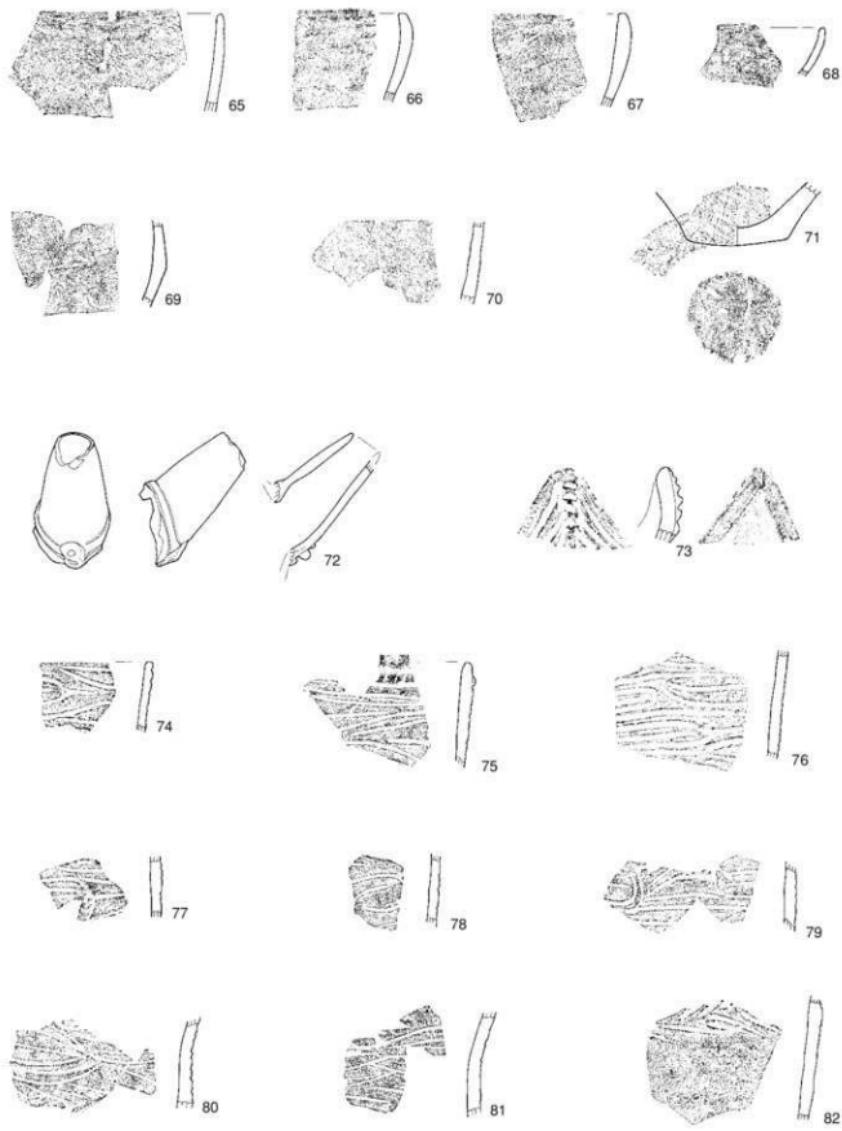
第22図 塚越遺跡出土繩文土器（遺構外出土）



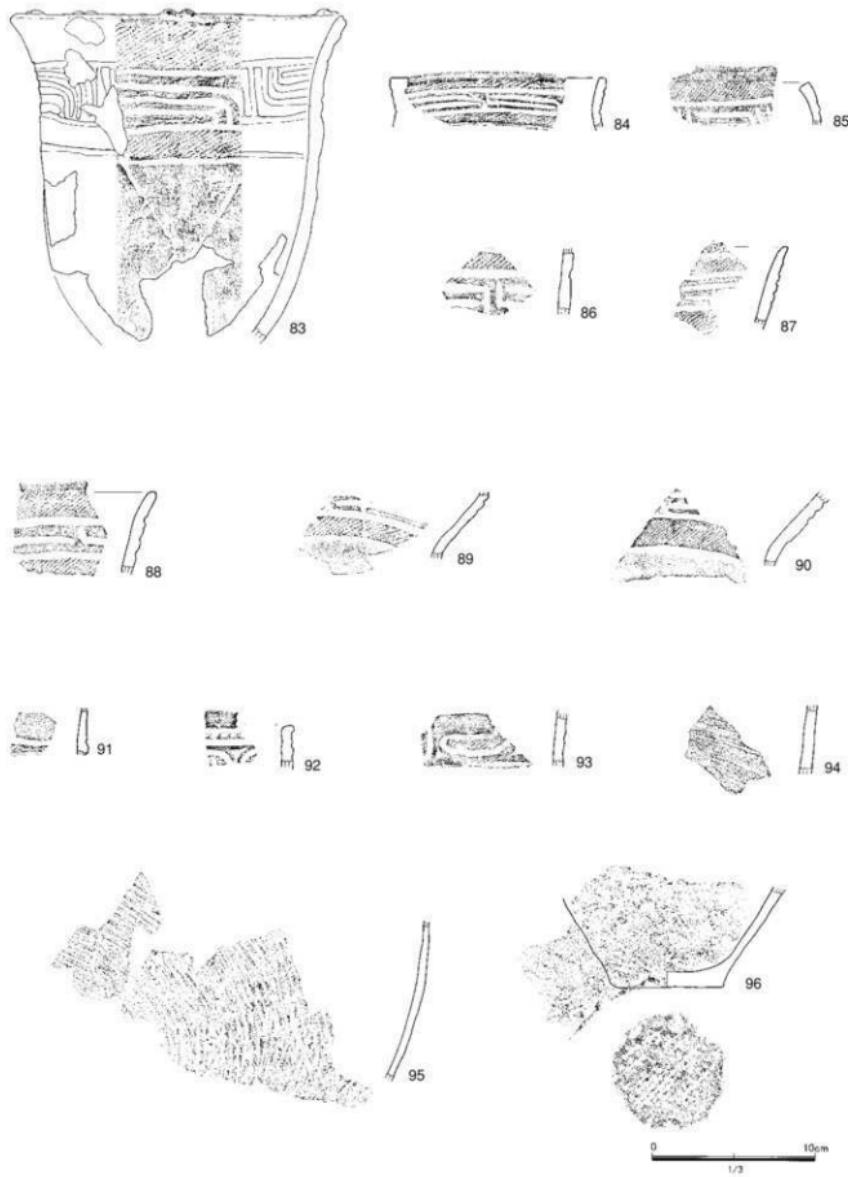
第23図 塚越遺跡出土網文土器（遺構外出土）



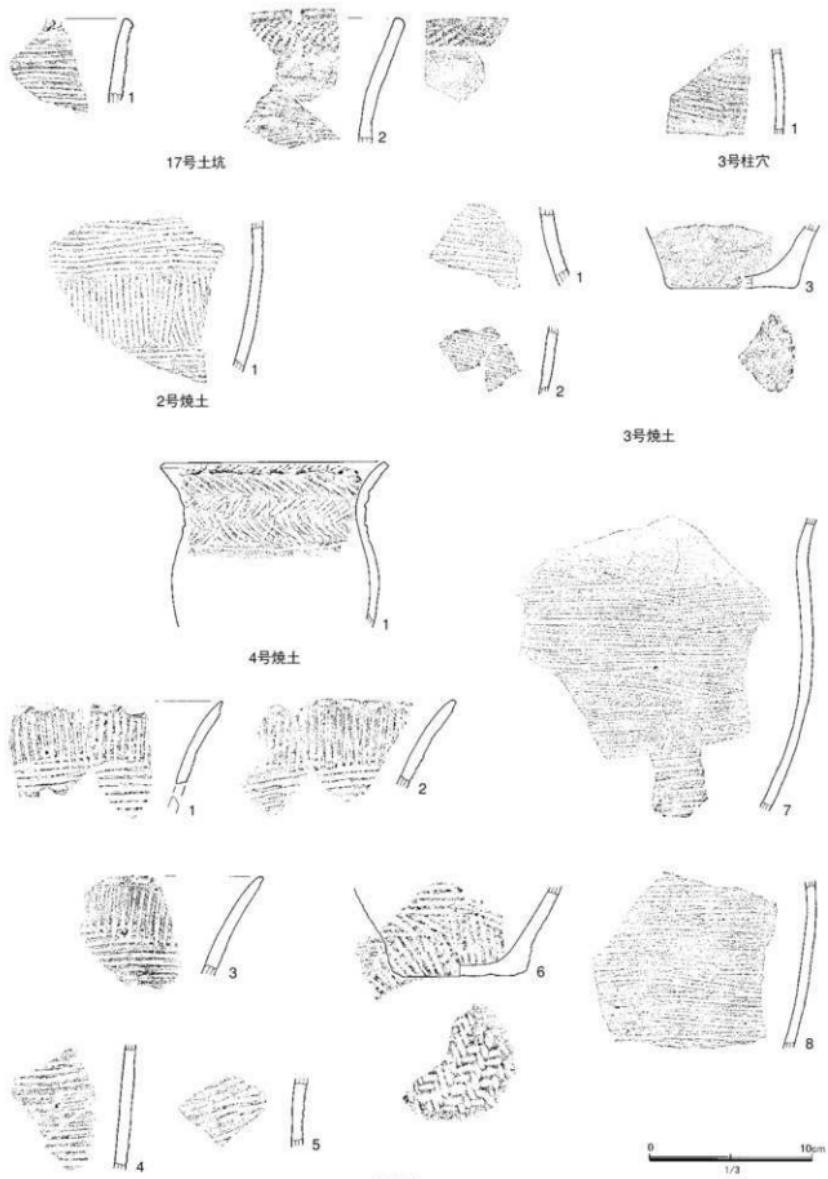
第24図 塚越遺跡出土繩文土器（遺構外出土）



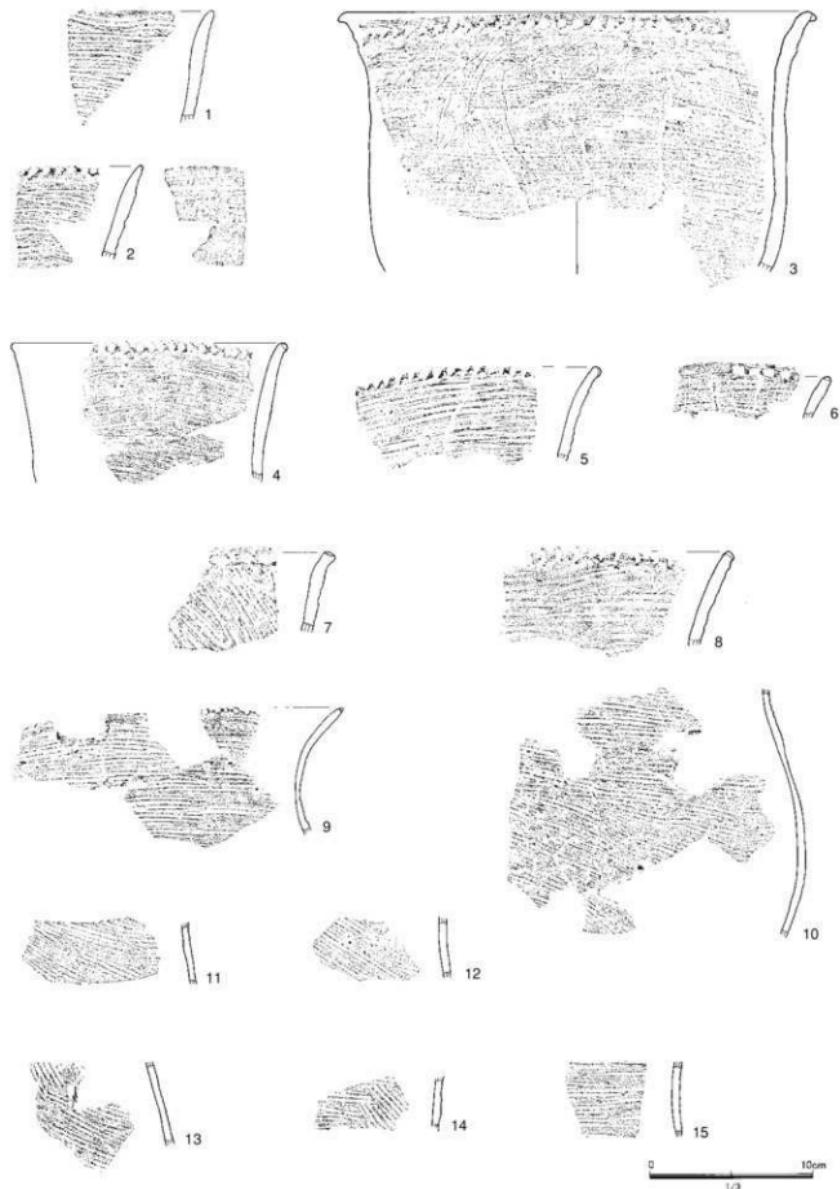
第25図 塚越遺跡出土網文土器（遺構外出土）



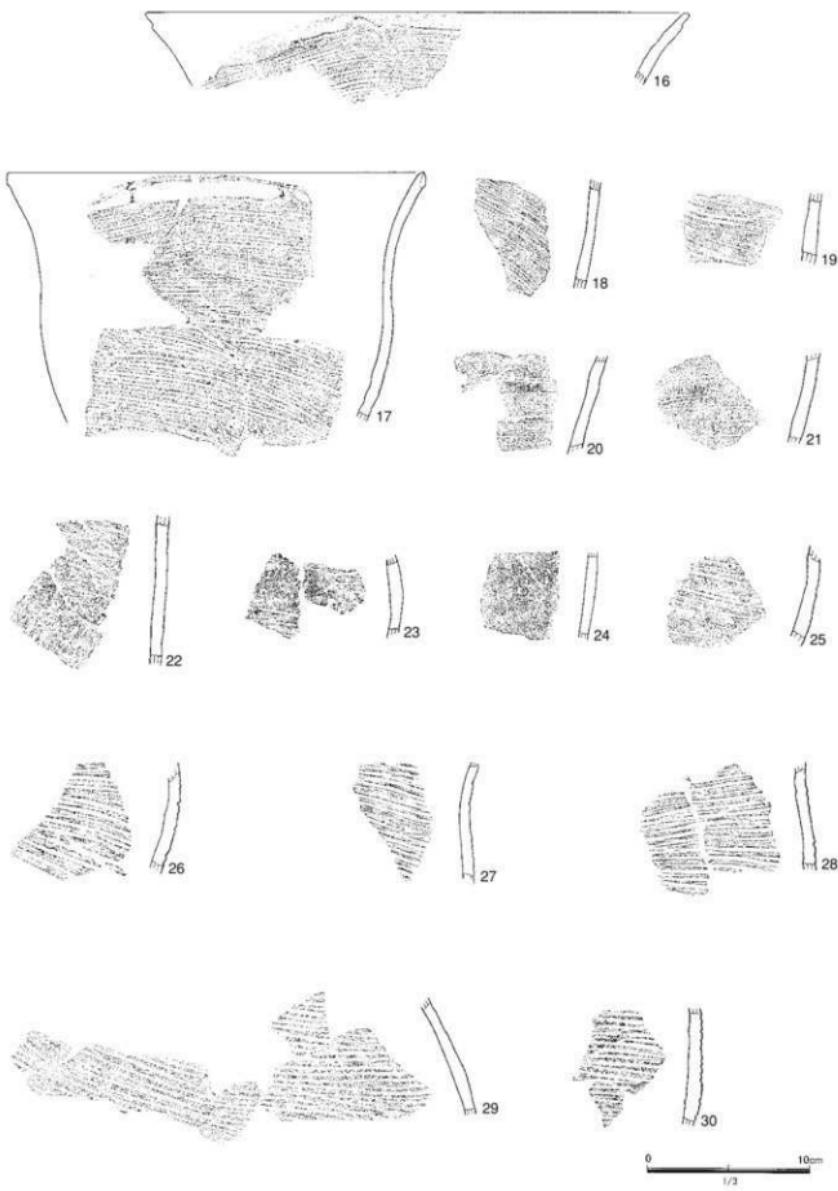
第26図 塚越遺跡出土繩文土器（遺構外出土）



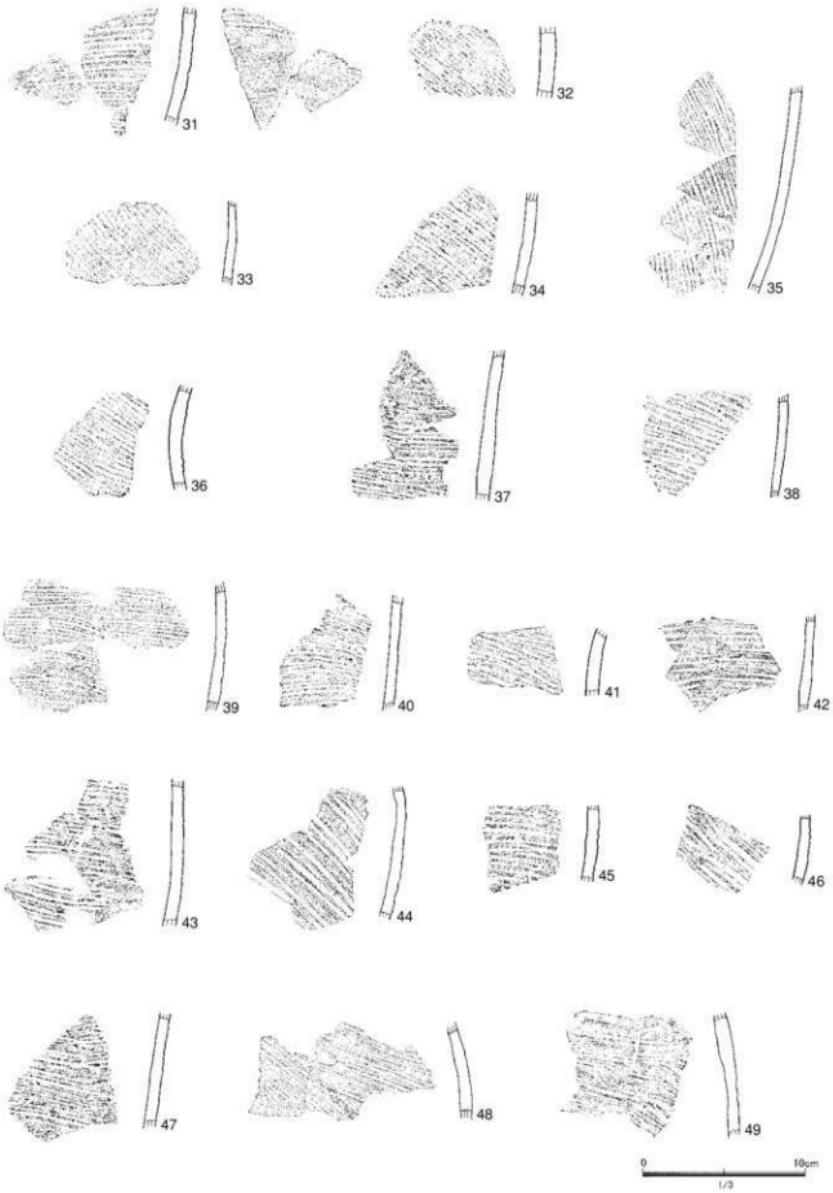
第27図 塚越遺跡出土弥生土器 (17号土坑・焼土・D-9土器集中)



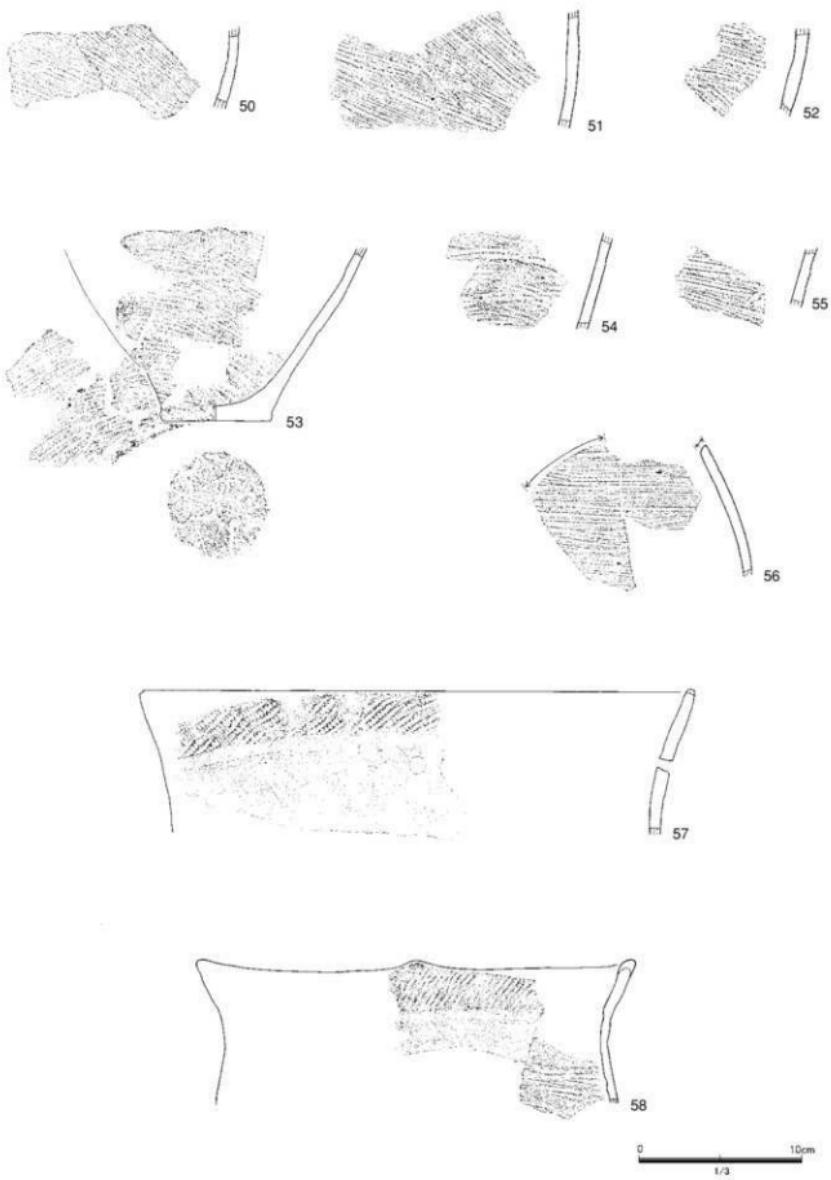
第28図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



第29図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



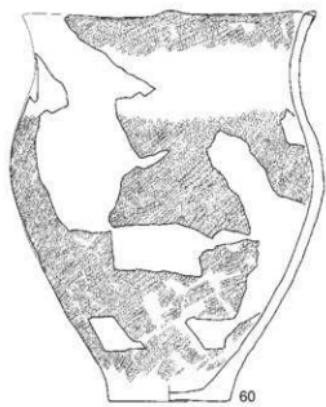
第30図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



第31図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



59



60



61



62



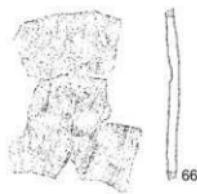
63



64



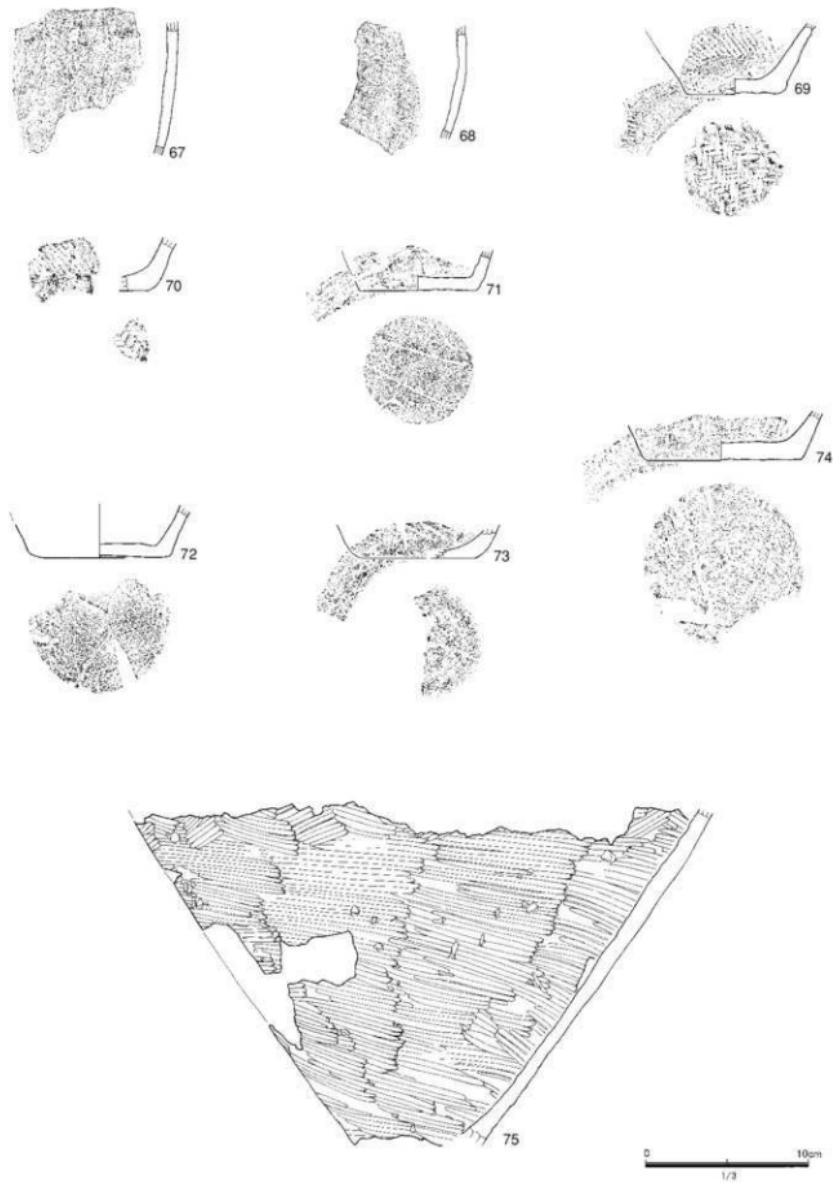
65



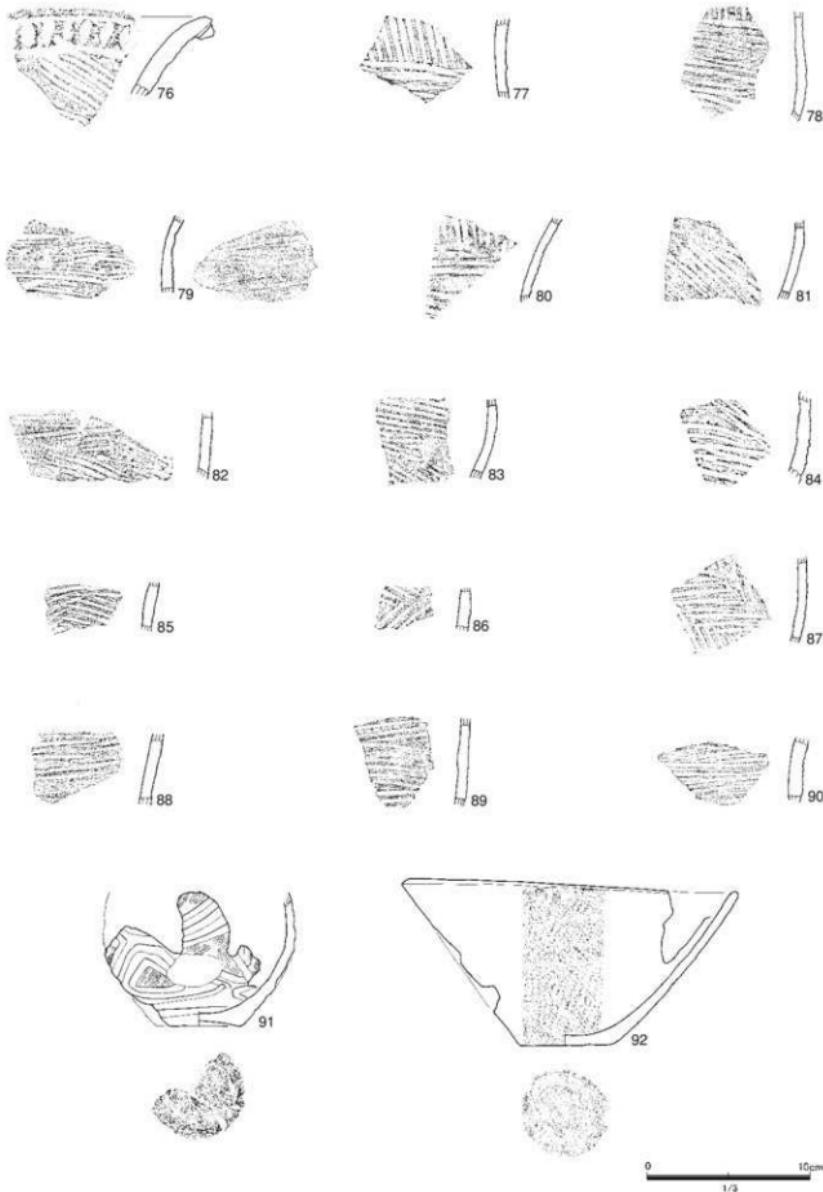
66

0 1 10cm  
1/3

第32図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



第33図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）



第34図 塚越遺跡出土弥生土器（遺構外出土）

第4表 墳越遺跡石器観察表

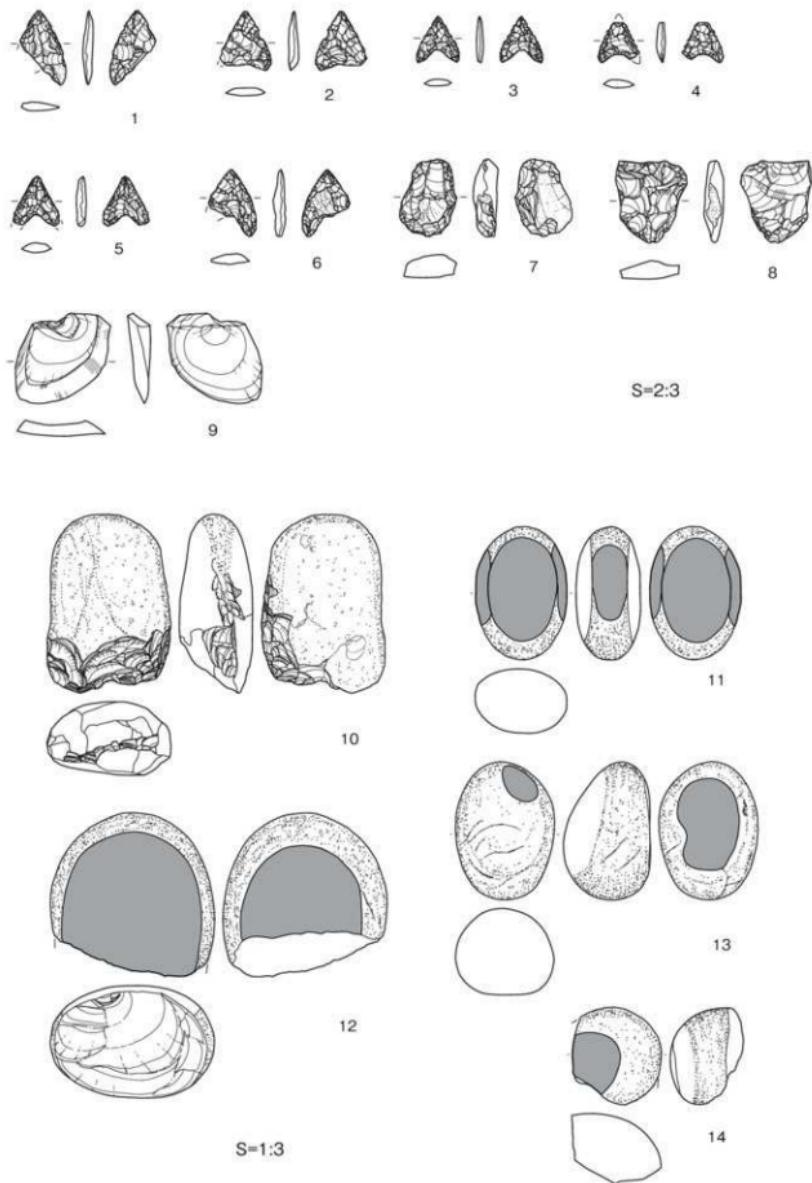
通番	器種	時代	遺構	石材	欠損 部位	刃部 属性	整形加工	成形工 具	石器基 部	打面 材形態	形態	石材	接觸成 形技術	石様 形技術	打面 部	剥片剝 離技術	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	所見
1	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	左脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	23.2	13.8	3.2	0.6	被燃資料?
2	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	左脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	18.3	15.8	3.4	0.7	被燃資料?
3	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	完形	nHP/磨	nHP/磨	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	14.4	13.1	2.3	0.3	
4	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	先端・右脚欠	nHP/磨	nHP/磨	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	12.5	12.8	3.1	0.3	
5	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	左脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	15.4	14.3	3.3	0.5	
6	回基盤	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	左脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	20.7	14.7	4.0	0.7	
7	両極石器	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	完形	HxD	HxD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	24.1	17.3	7.6	3.2	
8	両極石器	縄文(伴名寺式)	1号住居	黒曜石	完形	HxD	HxD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	Z	25.4	22.0	6.3	3.2	
9	剥片	縄文(伴名寺式)	1号住居	緑色凝灰岩	完形	Z	Z	Z	矩形剥片	平坦	コーン	D	Z	Z	Z	Z	28.2	28.8	6.9	5.2	骨製石斧の再加工の際 に生じた削片。
10	礫器	縄文(伴名寺式)	1号住居	燧灰岩	完形	HD	HD	なし	橢円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	109.7	76.2	45.2	483.1	標的を打ち伏 せる。
11	磨石	縄文(伴名寺式)	1号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	Z	橢円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	82.0	56.7	40.0	272.0	表面が見られ る。その範囲には肉 眼でも光沢が確認で きる。
12	磨石	縄文(伴名寺式)	1号住居	砾礫岩	半削	Z	Z	Z	橢円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	100.7	101.2	60.5	914.6	表面が見られ る。その範囲には肉 眼でも光沢が確認で きる。
13	磨石	縄文(伴名寺式)	1号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	Z	橢円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	84.8	61.1	53.7	399.1	表面が見られ る。その範囲には肉 眼でも光沢が確認で きる。
14	磨石	縄文(伴名寺式)	1号住居	硬砂岩	断片	Z	Z	Z	橢円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	59.8	55.1	45.4	165.5	表面が見られる。そ の範囲には肉眼でも 光沢と構状が確認で きる。
15	磨石?	縄文(伴名寺式)	1号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	Z	臺角錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	71.5	55.3	49.2	279.8	明瞭な表面がみられ ない。実際には機 能面を有していたか は不明である。

通番	器種	時代	遺構	石材	欠損 部位	刃部 属性	加工 工	石器熟 成形加 工	打面 形態	開始 部	素材	石核 形状	石片剥 離技術	打面 厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	重量(g)	所見	
16	磨石?	縄文(伴名等式)	1号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	稍円錐	Z	Z	Z	Z	Z	87.7	60.2	42.9	324.2	明瞭な磨面がみられないで、実際に機械的な磨面がみられないで、実際に機械的な磨面を有していたかは不明である。	
17	磨石?	縄文(伴名等式)	1号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	稍円錐	Z	Z	Z	Z	Z	104.1	78.3	35.8	443.5	No. 50 と検合。明瞭な磨面がみられないで、実際に機械的な磨面を有していたかは不明である。	
18	磨石?	縄文(伴名等式)	1号住居	硬砂岩	断片	Z	Z	稍円錐	Z	Z	Z	Z	Z	96.6	73.4	56.0	582.9	No. 48 と検合。明瞭な磨面がみられないで、実際に機械的な磨面を有していたかは不明である。	
19	被然釋	縄文(伴名等式)	1号住居	安山岩	断片	Z	Z	亞角錐	Z	Z	Z	Z	Z	93.1	83.0	51.3	392.1	被然を受け、強く角化している。同一石材であるため、同一母岩の可能性が高い。	
20	多孔石	縄文時代	2号住居	黒曜石	先端欠	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	192.7	150.5	78.6	3117.6	石器画面に凹が見られる。
21	凹基盤	縄文時代	2号住居	黒曜石	先端	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	9.4	15.5	3.7	0.5	
22	凹基盤	縄文時代	2号住居	黒曜石	先端	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	24.6	15.7	3.7	1.1	
23	有茎繩	縄文時代	2号住居	頁岩	先端・茎部欠	nIP/繩	nIP/繩	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	20.7	12.6	4.6	1.1	
24	石撲	縄文時代	2号住居	チャート	側部欠	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	20.9	22.7	5.7	1.6	
25	磨石	縄文時代	2号住居	硬砂岩	完形	Z	Z	円錐	Z	Z	Z	Z	Z	24.5	22.2	17.5	12.9	土留めのための留石か?	
26	凹基盤	縄文時代	C-5	黒曜石	完形	nIP/繩	nIP/繩	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	19.9	13.2	3.4	1.1	凹基盤の未製品と思われる。
27	石撲	縄文時代	C-5	黒曜石	完形	S'P	S'P	S'P	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	19.5	14.2	5.9	0.5	凹基盤の未製品と思われる。
28	石撲	縄文時代	C-5	黒曜石	完形	S'P	HP	HP	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	16.3	10.5	3.8	0.5	凹基盤の未製品と思われる。
29	凹基盤	縄文時代	C-6	黒曜石	右脚欠	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	12.2	11.6	3.1	0.3	
30	凹基盤	縄文時代	C-7	黒曜石	左脚欠	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	19.0	11.9	4.1	0.6	
31	凹基盤	縄文時代	C-7	黒曜石	完形	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	15.4	15.9	4.0	0.6	
32	凹基盤	縄文時代	C-7	黒曜石	完形	S'P	S'P	なし	剝片	不明	不明	不明	Z	Z	11.9	13.6	3.2	0.4	

通番	器種	時代	遺構	石材	欠損部位	刃部属性	加工形態	石材形態	打面形態	開始面	素材	石核	剥成技術	打面剥片技術	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	所見	
33	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	左脚欠	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	24.7	16.4	4.9	1.1	
34	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	右脚欠	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	19.2	17.3	4.2	0.9	
35	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	18.2	14.7	4.3	0.8	脚付け根部分に研磨痕がある。
36	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	左脚欠	nHP/端 削	nHP/端 削	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	21.4	13.1	3.8	0.5	五角形微少?
37	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	左脚欠	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	20.3	12.0	3.4	0.6	
38	凹基盤	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	18.3	16.8	4.4	0.7	
39	石撃	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	HP	HP	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	17.2	13.9	9.0	1.8	
40	両極石器	彌文時代	C-4	黒曜石	完形	HvD	HvD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	26.0	22.4	10.8	5.6	
41	両極石器	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	HvD	HvD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	17.0	17.2	5.3	1.4	
42	両極石器	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	HvD	HvD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	19.1	20.0	9.0	3.1	
43	両極石器	彌文時代	C-7	チャート	左脚欠	HvD	HvD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	35.4	36.6	15.0	15.2	
44	石核	彌文時代	C-8	黒曜石	完形	Z	Z	Z	Z	角離	なし	自然面	ID	Z	Z	21.9	27.7	18.5	9.0	磨製石斧の所加工の跡に生じた削片。
45	剥片	彌文時代	C-8	褐色碧玉 岩	完形	Z	Z	なし	矩形剥片	平坦	ヨーク	ID	Z	Z	Z	32.0	35.2	10.9	10.9	No.62と接合。基部一帯が崩壊している。着所による摩擦痕と被削痕がみられる。
46	打製石斧	彌文時代	C-6	安山岩	左脚欠	HD	HD	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	129.9	59.4	15.7	122.0	石器正面側の深い痕跡が残る。
47	乳棒擦製 石斧	彌文	D-5	硬質碧玉 岩	左脚欠	不明	P+Po	P+Po	不明	不明	不明	Z	Z	Z	Z	112.6	47.8	36.5	300.1	石器正面側に擦面がある。
48	磨石	彌文	C-4	硬砂岩	完形	Z	Z	Z	椭円錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	120.3	94.7	53.8	913.4	石器正面側に擦面がある。
49	石皿	彌文	C-7	安山岩	欠損	Z	Z	Z	至角錐	Z	Z	Z	Z	Z	Z	22.2	13.8	3.6	0.6	
50	凹基盤	彌文時代	D-3	黒曜石	完形	nHP/端 削	nHP/端 削	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	25.9	16.4	4.4	1.6	
51	凹基盤	彌文時代	D-5	黒曜石	両脚欠	nHP/端 削	nHP/端 削	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	12.6	15.8	4.0	0.6	
52	凹基盤	彌文時代	D-5	チャート	左脚欠	削	削	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z	25.7	16.3	4.1	1.3	
53	凹基盤	彌文時代	D-5	チャート	左脚欠	S/P	S/P	なし	剥片	不明	不明	Z	Z	Z	Z					

通番	器種	時代	遺構	石材	欠損	剖面	刃部	加工	石器形態	整形加成形	打面	開始	基材	石材	石核	石核成形技術	打面技術	幅	長さ	厚さ	重量(g)	所見
54	剥片	彌文時代 後期	D-4	チャート	完形	Z	なし	機長剥片	平坦	コーン	留	Z	Z	角縫	なし	自然面	HD	37.2	49.6	19.8	31.9	
55	石核	彌文(奥 内23)	D5土器 集中	黒曜石	完形	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	角縫	なし	自然面	HD	26.8	37.0	16.9	14.7	
56	原石	彌文(奥 内23)	D5土器 集中	黒曜石	完形	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	角縫	なし	自然面	HD	37.2	49.6	19.8	31.9	
57	原石	彌文(奥 内23)	D5土器 集中	黒曜石	完形	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	角縫	なし	自然面	HD	48.3	24.0	15.9	17.9	
58	原石	彌文(奥 内23)	D5土器 集中	黒曜石	完形	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	角縫	なし	自然面	HD	42.1	23.0	18.1	15.1	
59	凹基盤	-	表様	黒曜石	右脚欠 角縫	nBP/端	nBP/端	な	な	な	な	な	な	な	な	自然面	HD	45.4	31.8	24.5	27.7	
60	凹基盤	C-鉢型 トレンチ	黒曜石	完形	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	自然面	HD	25.8	15.8	4.2	0.9	洞側面の幅が他の時の 際の石器の剥離面と 比べ幅広である。
61	鍬器	-	表様	安山岩	完形	HD	なし	なし	扁平端	Z	Z	Z	Z	Z	Z	自然面	HD	152.5	129.7	46.0	1263.9	
62	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	紙長剥片	平坦	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	27.5	20.1	6.1	2.6	
63	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	矩形剥片	平坦	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	32.1	41.3	8.0	6.7	右辺に微小剝離痕が みられる。
64	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	紙長剥片	平坦	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	31.4	24.8	5.8	4.6	右辺に微小剝離痕が みられる。
65	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	機長剥片	不明	不明	不明	Z	Z	Z	自然面	HD	20.5	26.7	6.0	3.1	木材末端 に微小剝離痕がみら れる。
66	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	機長剥片	平坦	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	23.1	26.5	7.6	3.9	木材末端に微小剝 離痕がみられる。
67	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	機長剥片	自然面	曲げ	(HD)	Z	Z	Z	自然面	HD	32.5	42.5	8.5	9.7	左辺に微小剝離痕が みられる。
68	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	紙長剥片	自然面	曲げ	(HD)	Z	Z	Z	自然面	HD	35.6	29.2	8.8	5.7	裏面の左辺に微小剝 離痕がみられる。
69	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	機長剥片	切子	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	51.2	28.5	9.5	11.6	裏面の右辺に微小剝 離痕がみられる。
70	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	MF?	Z	Z	Z	紙長剥片	切子	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	40.6	19.3	6.6	3.9	裏面の右辺に微小剝 離痕がみられる。
71	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	なし	Z	Z	Z	紙長剥片	自然面	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD	33.7	24.8	8.5	3.1	裏面は砸れををおこ している。
72	剥片	D9土器 集中	緑色燧灰 岩	完形	なし	Z	Z	Z	紙長剥片	自然面	コーン	留	Z	Z	Z	自然面	HD					

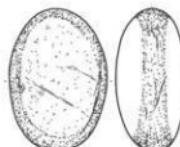
通番	器種	時代	遺構	石材	欠損部	部位	属性	工形	整形加工	石材形態	石器素面	打面	開始部	素材	石様	石様剥成	石様剥片	打面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	所見	
73	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	標準剥片	自然面	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	20.1	25.1	5.5	3.0	左辺に微小剝離痕が みられる。	
74	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	標準剥片	平坦	曲げ	曲げ	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	23.3	19.4	6.3	2.1	左辺に微小剝離痕が みられる。	
75	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	矩形剥片	平坦	コーン	コーン	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	26.7	29.6	5.0	3.1	左辺に微小剝離痕が みられる。	
76	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	標準剥片	不明	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	27.8	19.4	6.1	2.8	素材打面は断面によ り欠損している。	
77	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	標準剥片	平坦	コーン	コーン	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	33.6	18.1	6.8	2.6		
78	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	完全	Z	Z	矩形剥片	平坦	曲げ	曲げ	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	20.7	24.3	3.6	0.9		
79	剥片	弥生	19号土器 集中	绿色砾灰岩	打面欠	Z	Z	剥片	不明	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	17.0	22.3	3.1	1.2		
80	凹基盤	弥生	3号焼土 集中	黑曜石	右脚欠	nHP	nHP	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	14.8	10.7	4.5	0.5		
81	凹基盤	弥生	17号土 坑	黑曜石	先端欠	nHP/nHP/無 備	nHP/nHP/無 備	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	14.6	13.7	4.1	0.6		
82	凹基盤	弥生	C-7	黑曜石	先端・ 右脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	9.8	10.9	2.8	0.2		
83	凹基盤	弥生	D-9	黑曜石	先端・ 右脚欠	S'P	S'P	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	11.3	14.7	4.0	0.6		
84	凹基盤	弥生	D-10	黑曜石	完全	nHP	nHP	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	13.3	11.3	3.2	0.3		
85	凹基盤	弥生	C-9	黑曜石	完全	HP	HP	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	31.2	13.7	4.2	1.1		
86	石盤	弥生	D-7	黑曜石	脚部欠	nHP/nHP/無 備	nHP/nHP/無 備	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	28.5	11.9	4.2	0.9		
87	両極石器	弥生	C-9	黑曜石	完全	HxD	HxD	なし	剥片	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	32.9	15.9	10.8	5.6		
88	二次加工 剥片	弥生	D-8	黑曜石	完全	nHD	nHD	なし	角離	Z	Z	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	36.0	21.1	14.0	10.3		
89	両極石器	弥生	D-9	黑曜石	完全	HxD	HxD	なし	角離	Z	Z	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	30.5	23.4	16.4	10.3		
90	石核?	弥生	D-9	黑曜石	完全	Z	Z	Z	Z	Z	Z	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	28.5	29.8	23.3	17.4		
91	打製石斧	弥生	C-9	オルゾ フェルス	基部欠	HD	HD	なし	角離	なし	角離	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	78.3	73.8	15.9	117.2		
92	打製石斧	弥生	D-9	オルゾ フェルス	刃部欠	不明	HD	なし	角離	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	87.4	57.0	20.9	115.5		
93	環状石斧	弥生	D-9	安山岩	完全	Pe+Po	Pe+Po	なし	不明	不明	不明	(回)	Z	Z	Z	Z	Z	Z	95.8	79.8	40.5	400.6	両方向から敲打と研 磨で穿孔している。	



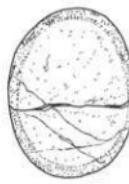
第35図 1号住居出土石器



15



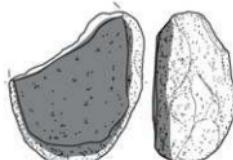
16



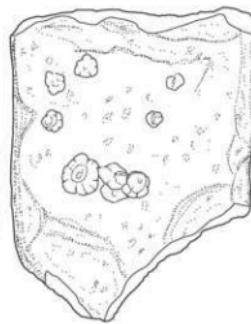
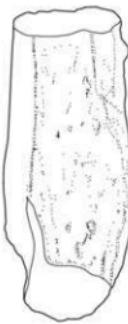
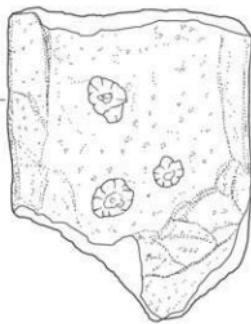
17



18



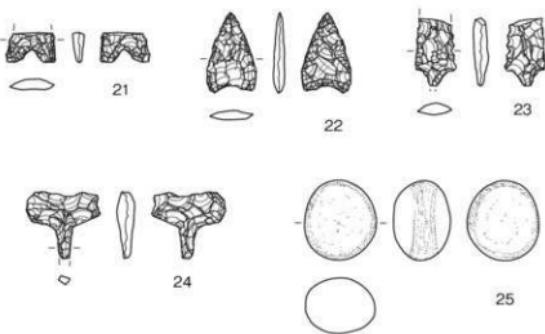
19



20

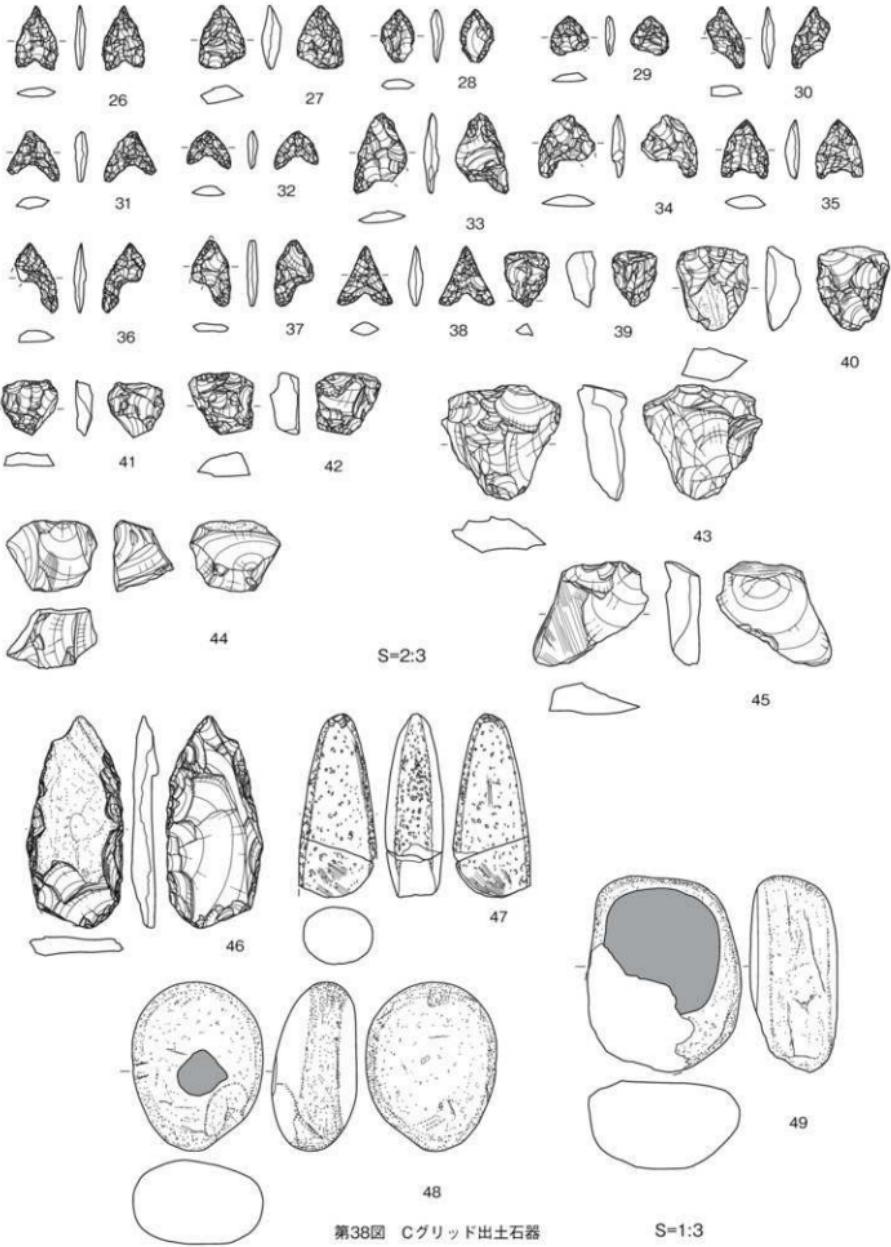
S=1:3

第36図 1号住居出土石器



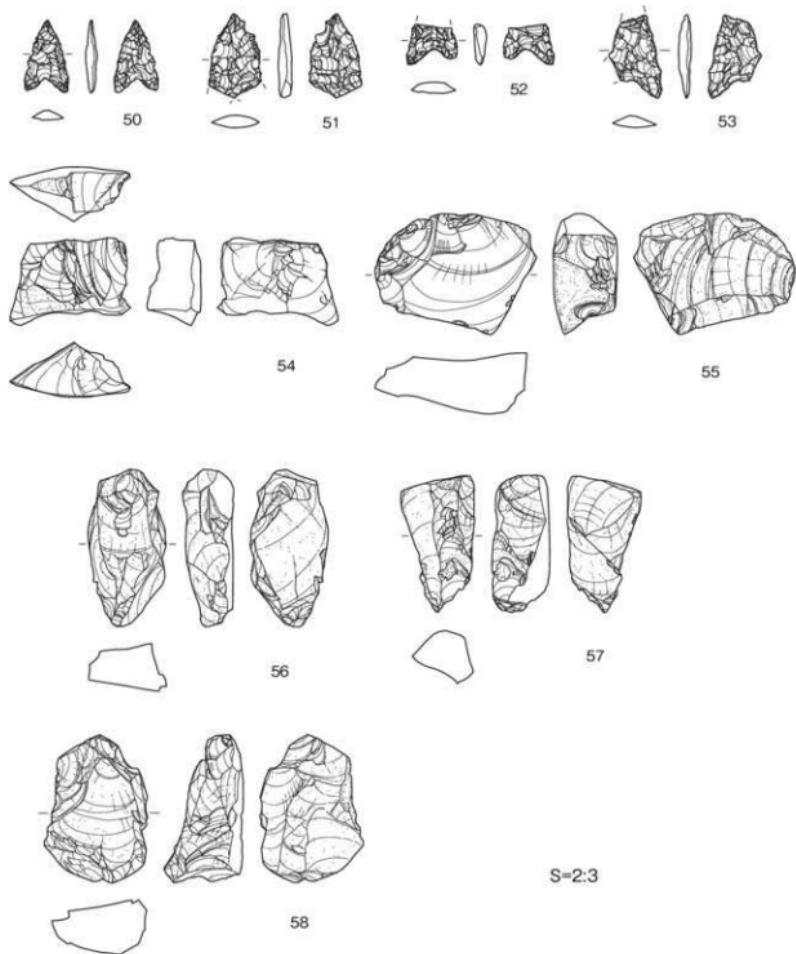
S=2:3

第37図 2号住居出土石器



第38図 Cグリッド出土石器

S=1:3



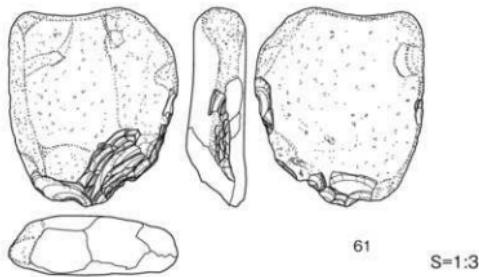
第39図 Dグリッド出土石器



一括

縄文最下層出土

$S=2:3$

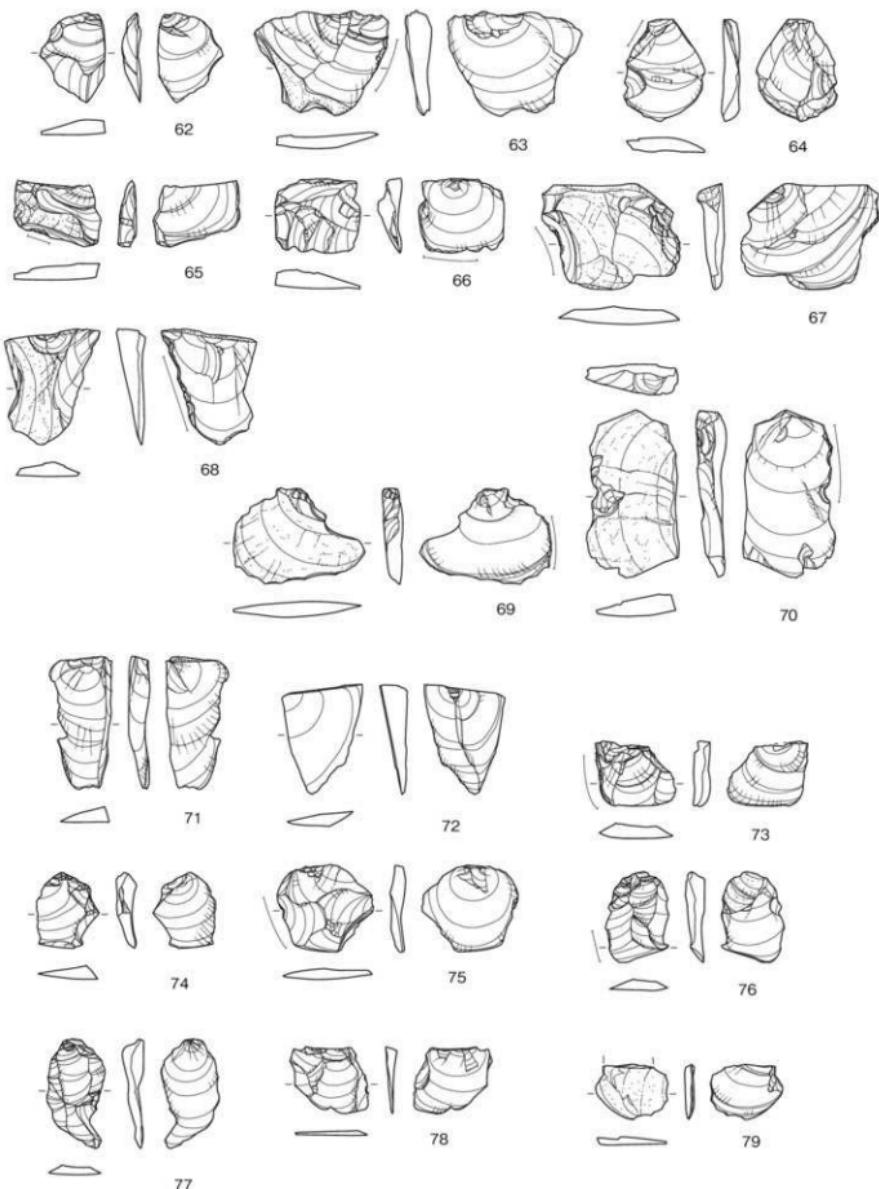


61

$S=1:3$

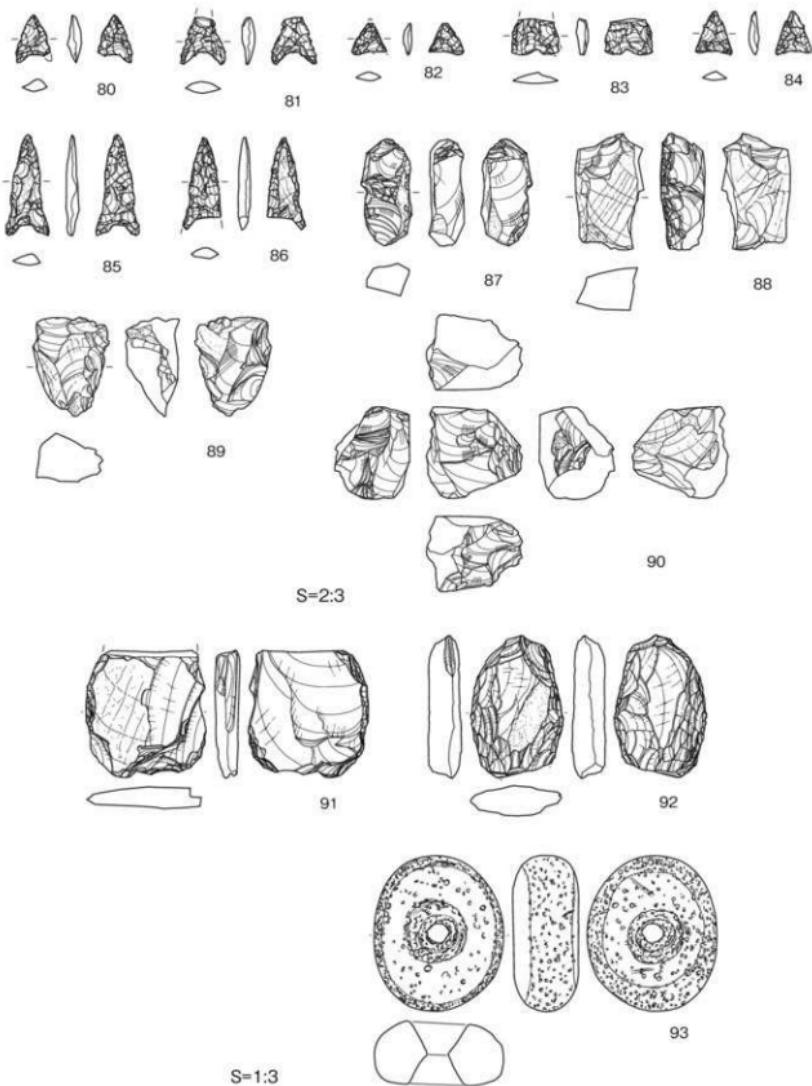
表採

第40図 その他石器



第41図 D-9土器集中一括出土剥片

S=2.3



第42図 弥生時代出土石器

## 第4章 炭焼遺跡

### 第1節 調査の方法と基本層序

#### (1) 調査の方法

試掘調査は平成14年度に、本調査は平成15年度および16年度に行われた。平成15年度は井坪遺跡とあわせて約6ヶ月間、平成16年度は塙越遺跡とあわせて約2ヶ月間の調査日程を計画した。しかし、平成16年度の調査では、塙越遺跡の調査が当初の予定期間を延長したため、最終的には両遺跡をあわせて約6ヶ月間の調査となった。

本調査は、地表下0.6~1.0mにある遺物包含層上部まで油圧ショベルを用いて土砂を平坦に取り除き、その後は、人力による掘り下げ、精査、および遺構・遺物の検出、記録を行った。

調査区内のグリッドは、5m方眼で設定し、北から南に123...、西から東にABC...とグリッド番号を振り分けた。

#### (2) 基本層序

炭焼遺跡の土層は第I層から第VII層に分層される（第43・46図）。第I層・第IV~VII層までは調査区のほぼ全体でみられ、1区北側の緩斜面から1区中央部以南においては水平となる現地形に沿って堆積する。第I層は耕作土。II・III層は2区においてみとめられ、第I層下に入る。第III層の洪水堆積砂礫層は2区南側にしかみられない。明治24年の地図によれば、現在は炭焼遺跡の南側約100m、井坪遺跡の北側に隣接して流れている山の神川が、調査区南部を東西方向に走る道路上を流れおり、そのころの状況をしめしている。IV層は無遺物層である。V層は近世～平安時代の遺物包含層である。第Va～Ve層に分けられるが、近世～平安時代の遺物が各層より出土し、層位ごとに時代区分できない。第V層は調査区北側で厚く、南に向かって徐々に堆積が薄くなる。遺物も第V層の堆積状況とおなじく、南に進むにつれて出土量が減少する。VI層は無遺物層であり、ところによって10cm大の礫が多くはいる。VII層からは若干であるが、弥生時代の遺物がふくまれる。VII層無遺物層。

### 第2節 遺構と遺物

#### (1) 遺構

##### 竪穴状遺構（第46図）

【位置】 A-14・15グリッドで検出された。

【重複】 中央部、南側を自然流路に切られる。

【形状・規模】 半分が調査区外に伸びているため、平面形は定かではないが、ほぼ方形を呈すると思われる。南北6mを計る。

【壁】 北側で21cm、西側で20cmを測る。

【柱穴】 柱穴は検出されなかった。

【その他の施設】 なし。

【遺物出土状況】 古墳時代の土器小破片が1点出土しているが、図示には耐えられない。

【時期】 遺物はごく少数であり、不明である。

##### 土坑（第44~46図）

今回の調査では21基の土坑が検出された。これらの詳細なデータについては一覧表（第5表）を参照されたい。

#### 烟跡（第46図）

A-16・17、B-16・17、C-16・17グリッドにまたがって確認された畝状の遺構が見られる区画で、煙跡と見られる。東西9.34mの範囲に、長さ0.5~3.86m、幅0.18~0.59m、深さ0.02~0.19mの畝が0.14~1.18mの間隔で15条検出された。IVa層上面から掘り込まれる。

#### 集石遺構（第46図）

B-4・B-5グリッドにあり、1.25×0.7mの規模である。8~35cm大の礫18点からなり、土器片など出土は見られない。集石下には下部遺構は確認されなかった。Vb層上面で検出され、平安時代～中世のものと考えられる。

#### 焼土遺構（第45図）

A-4・5グリッドにおいて検出された。規模は長径1.69m、短径1.06mを測る。なだらかに立ち上がる掘り込みを持つ。東側において15号土坑を切る。遺物は出土していないが、中世～平安時代のものと考えられる。

### （2）遺物（第47図）

遺物は主に土器・陶磁器・鉄製品があり、1区調査区北側半分において散在し、集中して出土する部分はみられない。これらの遺物は縄文時代～近世に属し、以下のように分類基準を設ける。

第Ⅰ群 縄文時代の遺物。

1類 縄文時代中期中葉曾利式土器の遺物。

2類 中期中葉以外の縄文時代の遺物。

第Ⅱ群 弦生時代の遺物。

第Ⅲ群 平安時代の遺物。

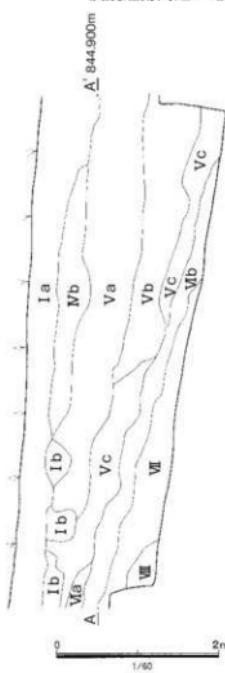
第Ⅳ群 中世の遺物。

第Ⅴ群 近世の遺物。

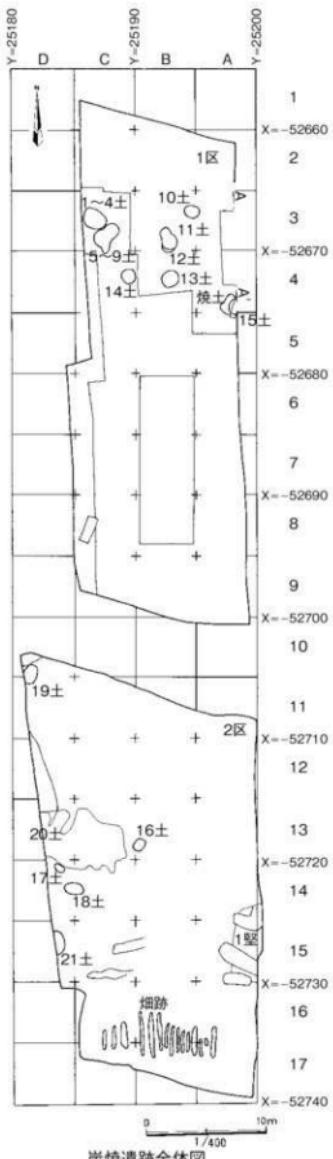
遺物の詳細なデータについては一覧表（第6表）を参照されたい。なお、遺構中からも遺物は出土しているが、小破片であるため図示できない。

第5表 炭焼遺跡遺構一覧表

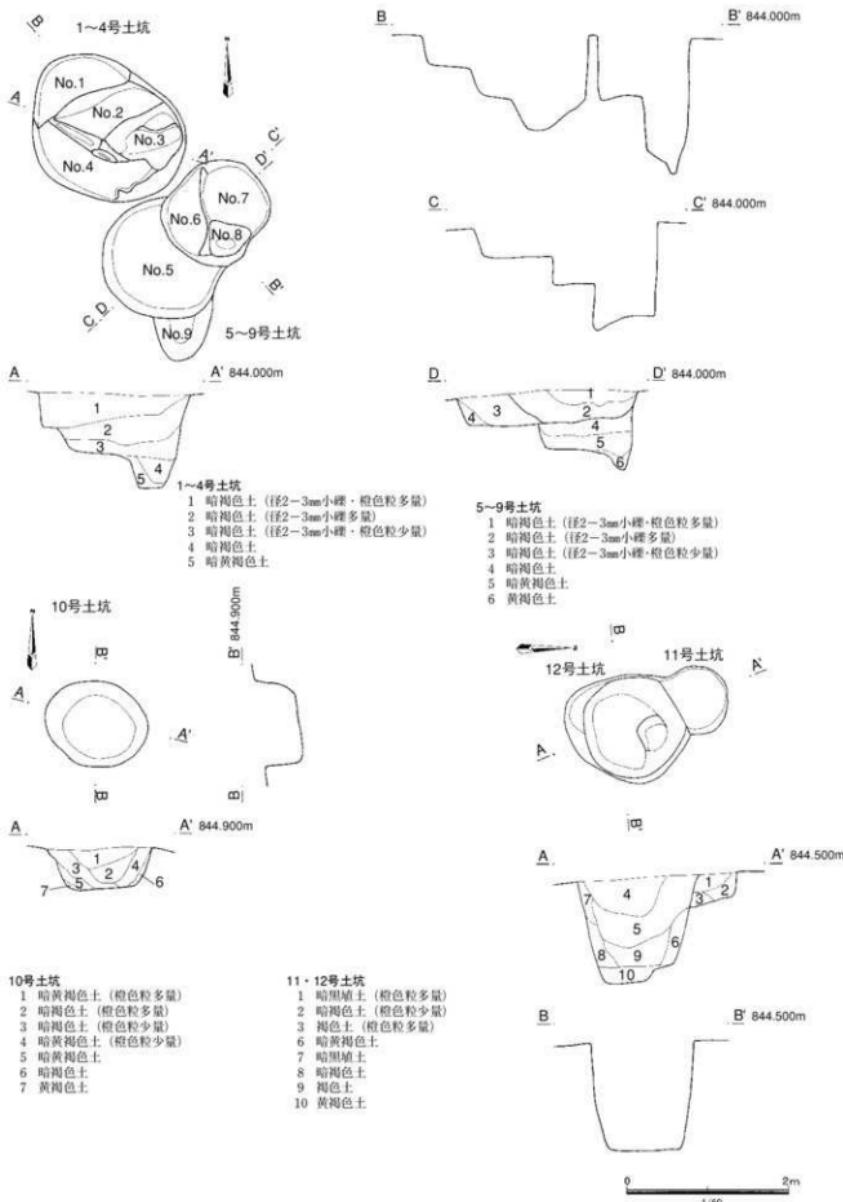
土坑番号	時期	位置(グリッド)	重複	形状	長軸m	短軸m	深さm	出土遺物/備考
1土	平安	C-3	2・3・4土	凹形	1.32	-	0.32	
2土	-	C-3	1・3・4土	-	-	-	0.78	
3土	-	C-3	1・2・4土	-	-	-	1.19	
4土	-	C-3	1・2・3土	-	-	-	1.07	
5土	平安	C-3	6・7・8土	長円形	1.32	-	0.35	平安時代土師器小破片1点出土。
6土	-	C-3	なし	楕円形	1.19	-	0.71	
7土	-	C-3	なし	楕円形	1.04	0.78	1.19	
8土	-	C-3	なし	楕円形	0.59	0.57	1.68	
9土	-	C-3	なし	楕円形	-	0.71	0.11	
10土	平安	A-3, B-3	なし	楕円形	1.28	1.06	0.56	平安時代土師器小破片3点出土。
11土	平安	B-3	12土	円形	0.85	-	0.53	
12土	平安	B-3・4	11土	楕円形	1.56	1.56	1.33	平安時代土師器小破片3点出土。
13土	平安	B-4	なし	楕円形	1.45	1.25	0.78	平安時代土師器小破片1点出土。
14土	平安	B-4, C-4	なし	円形	1.28	1.13	0.40	
15土	平安	A-4・5	1焼	楕円形	-	-	0.53	平安時代土師器小破片1点出土。
16土	-	B-13, C-13	なし	楕円形	1.01	0.86	0.29	
17土	-	D-14	なし	楕円形	0.87	0.56	0.24	
18土	-	C-14, D-14	なし	楕円形	1.57	1.02	0.38	
19土	-	D-11	なし	楕円形	1.52	1.13	0.35	
20土	-	D-13	なし	楕円形	-	0.78	-	
21土	-	D-15	なし	楕円形	1.86	0.89	0.24	



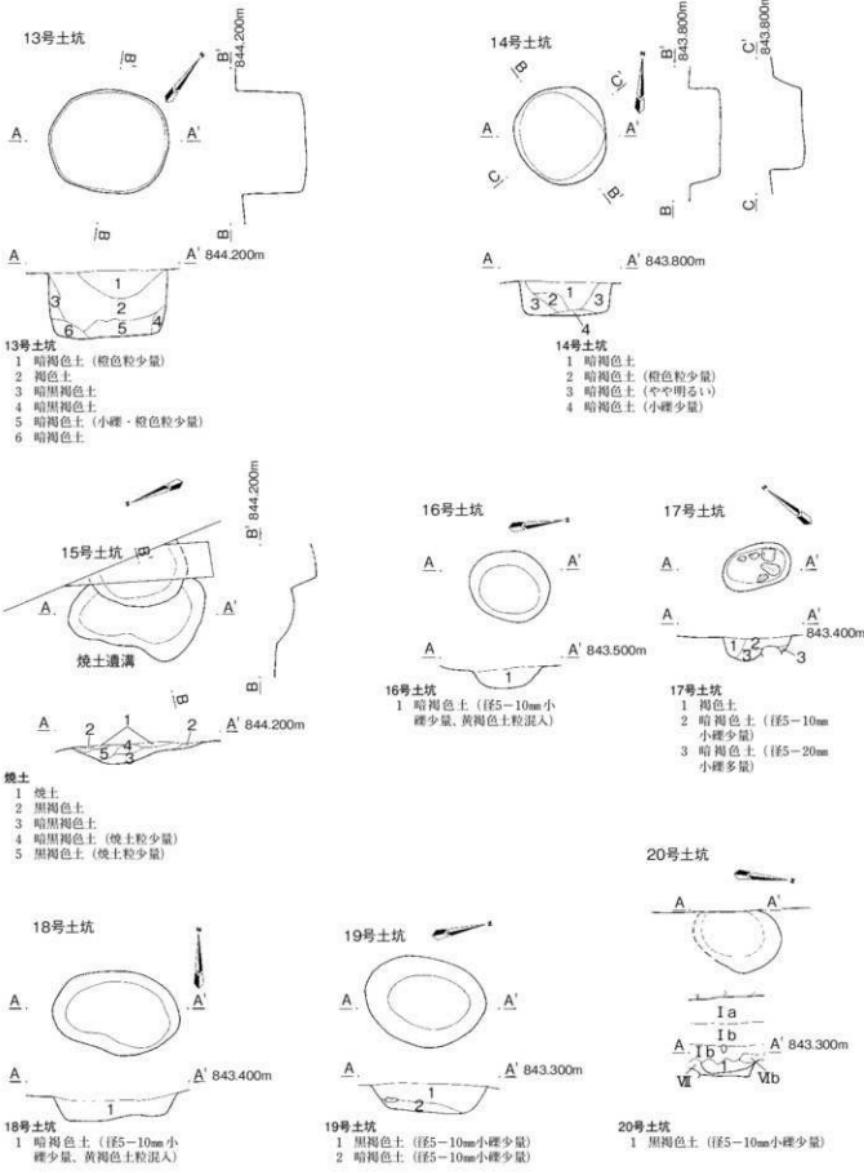
- Ia 暗褐色土。耕作土。
- Ib 暗黄褐色土。耕作土。
- II 盛り土。
- IIIa 砂疊。
- IIIb 暗黄褐色土シルト質土。
- IIIc 暗褐色シルト質土。
- IV'a 暗褐色土。
- Va 暗黒褐色土。遺物包含層。
- Vb 黒色土。(褐色粒多量) 遺物包含層。
- Vc 黑褐色土。遺物包含層。
- VIa 褐色土。
- VIb 暗黃褐色土。
- VII暗褐色土。(褐色粒多量)。
- VII黃褐色土。(褐色粒多量)。



第43図 炭焼遺跡周辺の地形・全体図・基本層序

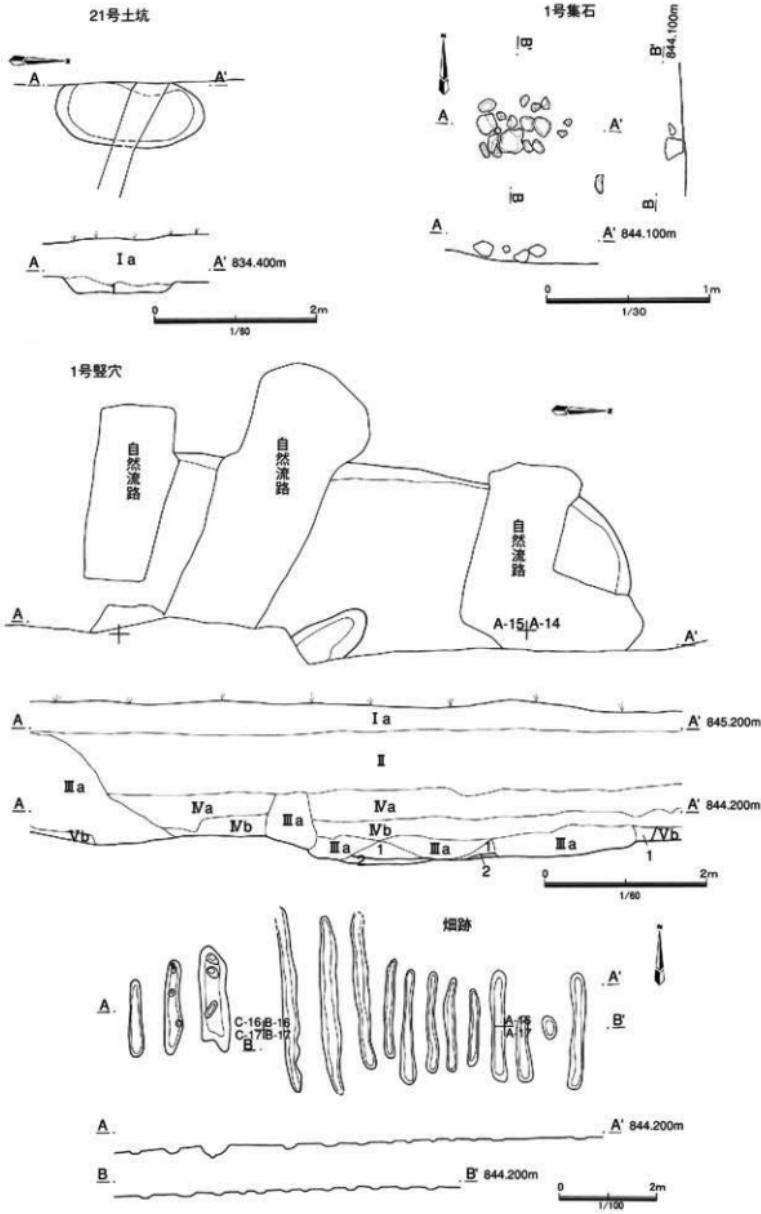


第44図 炭焼遺跡土坑



第45図 炭焼遺跡土坑・焼土

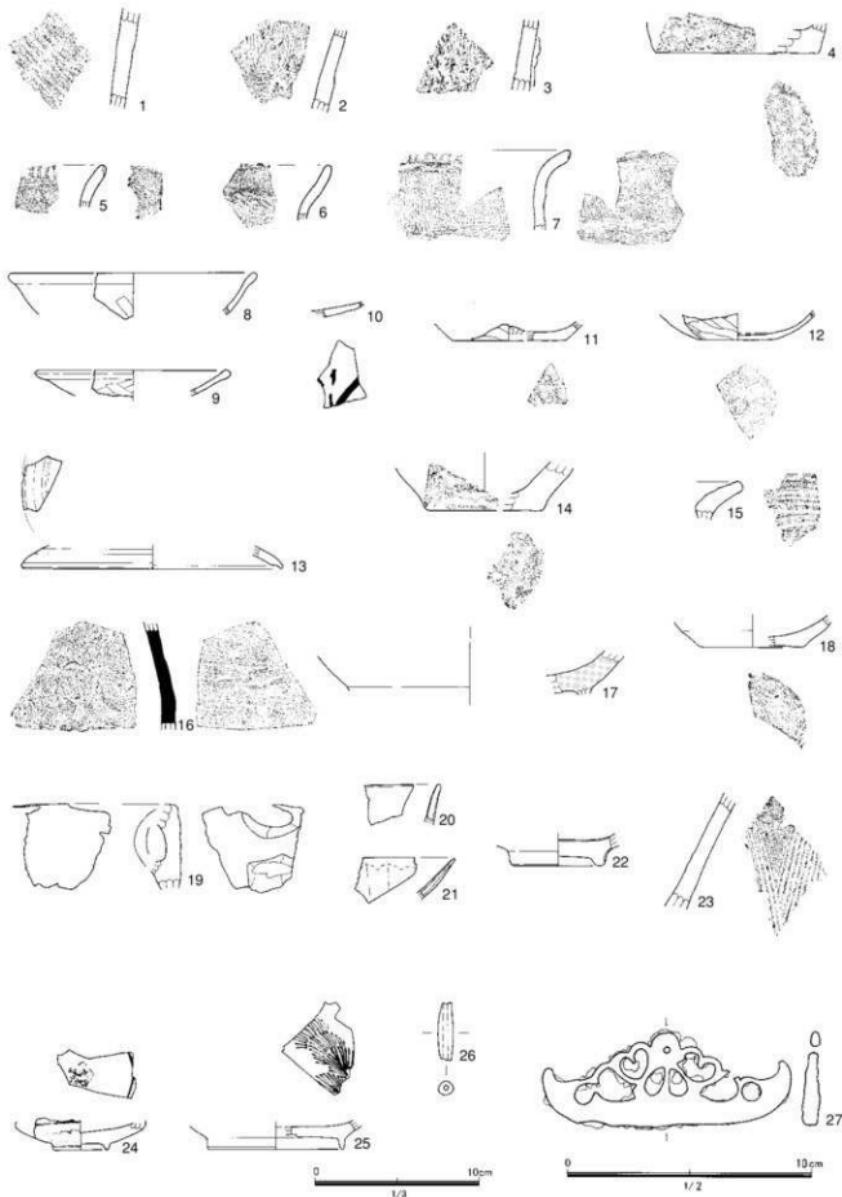
0 2m  
1/80



第46図 炭焼遺跡土坑・集積・竪穴状遺構・烟跡

第6表 炭焼遺物観察表

出土地点	區段番号	分類	標種	口径・底面・高さ (cm) （）＝復元値	部位・形態	类型・施文技法		色調	胎土	備考	
						周縁	底面				
D-8	47	1	I前縁	深鉢	周縁が直面。 周縁の各縁を施す。平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.3と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—	
B-3	47	2	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
B-3	47	3	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
B-3	47	4	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-5	47	5	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-7	47	6	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
夷異	47	7	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
A-4	47	8	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-5	47	9	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-4	47	10	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-5	47	11	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-8	47	12	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
A-6	47	13	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
D-5	47	14	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
B-4	47	15	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-9	47	16	I前縁	深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
C-5	47	17	I前縁	台付深鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
D-5	47	18	I前縁	直口	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
—	47	19	IV群	碗	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
A-5	47	20	IV群	碗	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
A-6	47	21	IV群	碗	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
A-6	47	22	IV群	碗	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
一括	47	23	V群	ナリ鉢	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
夷異	47	24	V群	碗	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
一括	47	25	V群	直口	周縁	平行打継の痕跡有り。底面に施文する。No.1と同一個体。	周縁	底面	にぶい黄褐色 （黒母子）	泥	—
B-5	47	26	III群	大口打金	長3.6×幅0.9×厚0.9	—	山型	基部の周縁は夷異する。基部の突起にはつまみ状の施物が施される。	—	—	
C-4	47	27	III群	大口打金	長10.2×幅3.9×厚0.9	—	山型	基部の周縁は夷異する。基部の突起にはつまみ状の施物が施される。	—	—	



第47図 炭焼遺跡出土遺物

## 第5章 井坪遺跡

### 第1節 調査の方法と基本層序

#### (1) 調査の方法

試掘調査は平成14年度に、本調査は平成15年度に行われた。本調査では炭焼遺跡とあわせて約6ヶ月間の調査日程を計画した。また、本調査時には、調査区域が水路や道路で分断されているため、北側から1区～3区に分けて調査を行った。

本調査は、地表下1.0～2.0mにある黒色火山灰層上部まで油圧ショベルを用いて土砂を平坦に取り除き、その後は、人力による掘り下げ、精査、および遺構・遺物の検出、記録を行った。

調査区内のグリッドは、5m方眼で設定し、北から南に123...、西から東にABC...とグリッド番号を振り分けた。

#### (2) 基本層序

井坪遺跡の基本層位については第48図のとおりである。基本的には第Ⅰ層から第Ⅸ層までに分層され、第Ⅰ層からⅦ層、第Ⅸ層は調査区全体に分布する。第Ⅰ層耕作土下は第Ⅱ層から第Ⅶ層まで無遺物層がつく。第Ⅲ層及び、第Ⅵ層は河川等の氾濫による洪水堆積層であり、Ⅵ層は構成疊により、Ⅵa層～Ⅵc層に分層した。第Ⅵc層は土中にスコリアが多量に含まれており、洪水によりⅦ層が削られ、再堆積したものと考えられる。第Ⅶ層黒色スコリア純層中には細粒・細砂粒の層が何層にも重なっており、火山灰降下後、洪水や降雨などにより再堆積している状況が読み取れる。ほとんどの遺構・遺物はこの第Ⅶ層下で確認され、遺構内には埋没土がなくⅦ層のスコリアが堆積する。縄文遺跡においては弥生時代中期遺物包含層と縄文時代晚期遺物包含層の間に火山灰層がみとめられており、縄文時代晚期～弥生時代中期の間の富士山の噴火によって堆積したものと考えられる。第Ⅷ層は1号遺物集中区の縄文時代後期後葉包含層であり、G-15グリッド北東部約4×2mの範囲にしか堆積しない。第Ⅸ層以下は無遺物層となり、深くなるにつれ、疊も多く、大型化していく。

### 第2節 遺構

#### 土坑（第49・50図）

今回の調査では9基の土坑が検出された。1号土坑が第V層上面より掘り込まれる以外は、第Ⅶ層の火山灰層下で検出された。土坑中からは遺物は出土しなかったため、時期は不明である。詳細なデータについては一覧表（第7表）を参照されたい。

#### 溝状遺構

##### 1号溝状遺構（第50図）

【位置】 B-4・5、C-4・5、D-4グリッドで検出された。

【重複】 4号土坑、2号溝状遺構、2号畝状遺構を切る。

【覆土】 第Ⅶ層の火山灰層上面において確認された。

【形状・規模】 現在長12.8m、幅2～4.10m、深さ0.01～0.26mを測る。1区を東西方向に走り、調査区ほぼ中央で試掘トレンチに切られる。

**[遺物出土状況]** 砂礫層中より縄文時代後期の土器片が出土。土器片は磨耗が少なく、炭化物が大量に付着していることから、井坪遺跡の東方向に近接している遺跡から流されてきたものと思われる。

**[時期]** 不明。

**[性格]** 明確な掘り込みは見られず、覆土中に砂礫層が堆積していることから自然流路と考えられる。

#### 2号溝状遺構（第51図）

**[位置]** C-4、D-2・3・4グリッドで検出された。

**[重複]** 4・5号土坑、2号畝状遺構と重複する。新旧関係は不明。

**[覆土]** 第VII層の火山灰層が堆積する。

**[形状・規模]** 現在長16m、幅0.38～0.84m、深さ0.01～0.15mを測る。1区北西隅において東西から南北に向きを変え、C-4グリッドの4号土坑との重複地点でやや西側に進路を変える。

**[遺物出土状況]** 遺物は出土しなかった。

**[時期]** 不明。

#### 畝状遺構（第51・52図）

第VII層火山灰層を取り除いたところ、8条の畝状遺構が検出された。詳細なデータは一覧表（第7表）を参照されたい。

### 土器集中

#### 1号土器集中（第53図）

G-15グリッド北東部において、約4×2mの範囲で縄文時代後期後葉の3個体の土器となる合計303点の土器片が出土した。北部では大型の土器片が折り重なるように出土している。焼土や炭化物などの生活を表すものはみられない。土器は第VII層火山灰層とIX層砂礫を多く含む黄褐色土層に挟まれたVIII層褐色土層から出土した。

#### 2号土器集中（第54図）

G-16グリッド南東部4×2mの範囲で縄文時代後期後葉の土器44点が第VII層火山灰層下から出土した。土器集中範囲中央部は建物基礎が残っているため、全貌はわからないが、東側と西側に炭化物集中範囲が確認され、何らかの遺構に伴っている可能性がある。土器は口縁部破片（第56図2号土器集中1）以外は同一個体で横方向の矢羽根状沈線が施される深鉢胴部破片である。

### 第3節 遺物

（第55～57図）

井坪遺跡の出土遺物は縄文時代前期末葉～近世に及ぶ。遺構外の土器は調査区全体に散在しており、流路中より出土したもの以外は第VII層直下で出土した。遺物の時期は縄文時代早期～平安時代に属し、以下の通りに分類した。

**第Ⅰ群 縄文時代早期**

**第Ⅱ群 縄文時代前期末葉**

**第Ⅲ群 縄文時代後期**

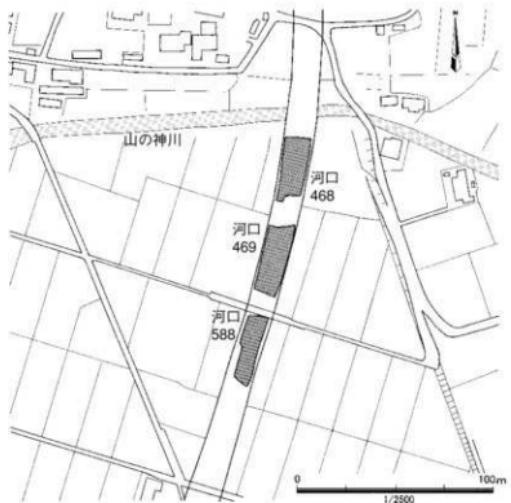
**第Ⅳ群 縄文時代後期後葉**

**第Ⅴ群 平安時代**

詳細なデータについては一覧表（第8表）を参照されたい。

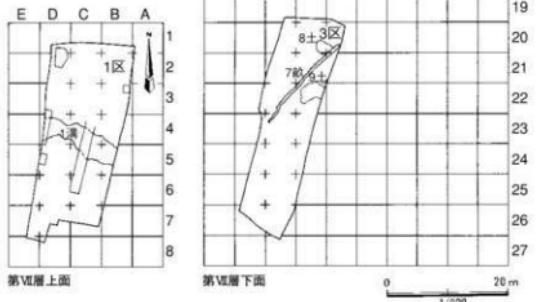
第7表 井坪遺跡遺構一覧表

遺構番号	時期	区位置(グリッド)	重複	形状	長軸m	短軸m	深さm	出土遺物/備考
1土	-	2	F-15・16	なし	不整円形	1.92	1.86	0.53 底面凸がはげしい。
2土	-	1	C-1・2	1歎	不整円形	2.75	2.10	0.38 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
3土	-	1	C-2・3	なし	不整円形	1.65	1.50	0.20 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
4土	-	1	C-4	2溝・2 歎・3歎	椭円形	3.10	2.00	0.34 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
5土	-	1	C-5・D-5	2溝・2歎	椭円形	2.10	1.20	0.11 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
6土 (欠番)	-	-	-	-	-	-	-	
7土	-	2	F-12	なし	不整円形	2.73	2.31	0.25 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
8土	-	3	F-20・21, G-20・21	7歎	椭円形	2.40	2.00	0.32 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
9土	-	3	G-21・22	8歎	不整円形	-	2.30	0.35 VII層火山灰層下で検出。壁面緩い傾斜。
1溝	-	1	B-4・5,C-4・ 5,D-4	4土・2 溝・2歎	-	12.80	2~4.10	0.26 自然流路。砂礫層中より炭化物が付着した繩文土器片。
2溝	-	1	C-4,D-2・3・4	4・5土、 2歎	-	16.00	0.84	0.15 VII層火山灰層下で検出。
1歎	-	1	B-3,C-2・3	2土	-	5.50	0.15~0.37	0.05~0.11 VII層火山灰層下で検出。断面台形。
2歎	-	1	B-4,C-4・5,D-5	4・5土、 2溝	-	10.2	0.14~0.30	0.06~0.12 VII層火山灰層下で検出。
3歎	-	-	B-4,C-4・5	4土	-	3.20	0.14~0.42	0.04~0.12 VII層火山灰層下で検出。
4歎	-	-	B-5・6,C-5・6	なし	-	4.8	0.08~0.39	0.02~0.12 VII層火山灰層下で検出。
5歎	-	2	D-11・12,E-12	なし	-	8.63	0.15~0.24	0.02~0.11 VII層火山灰層下で検出。断面台形。
6歎	-	2	D-13	なし	-	1.96	0.19~0.48	0.05~0.07 VII層火山灰層下で検出。断面台形。
7歎	-	3	F-20・21,G- 21・22,H-22・ 23	なし	-	17.40	0.29~0.63	0.07~0.31 VII層火山灰層下で検出。歎南西端にて炭化材が集中する。
8歎	-	3	G-22	9土	-	1.80	0.20~0.31	0.09~0.24 VII層火山灰層下で検出。

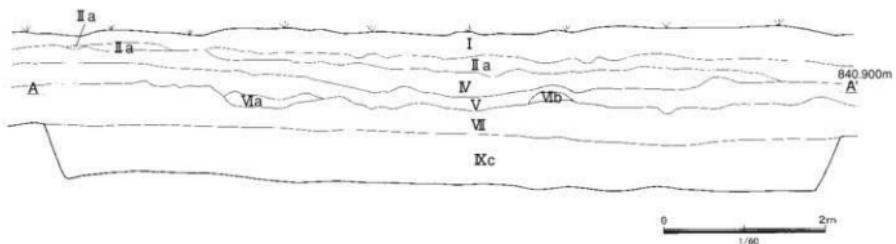


井坪遺跡周辺の地形

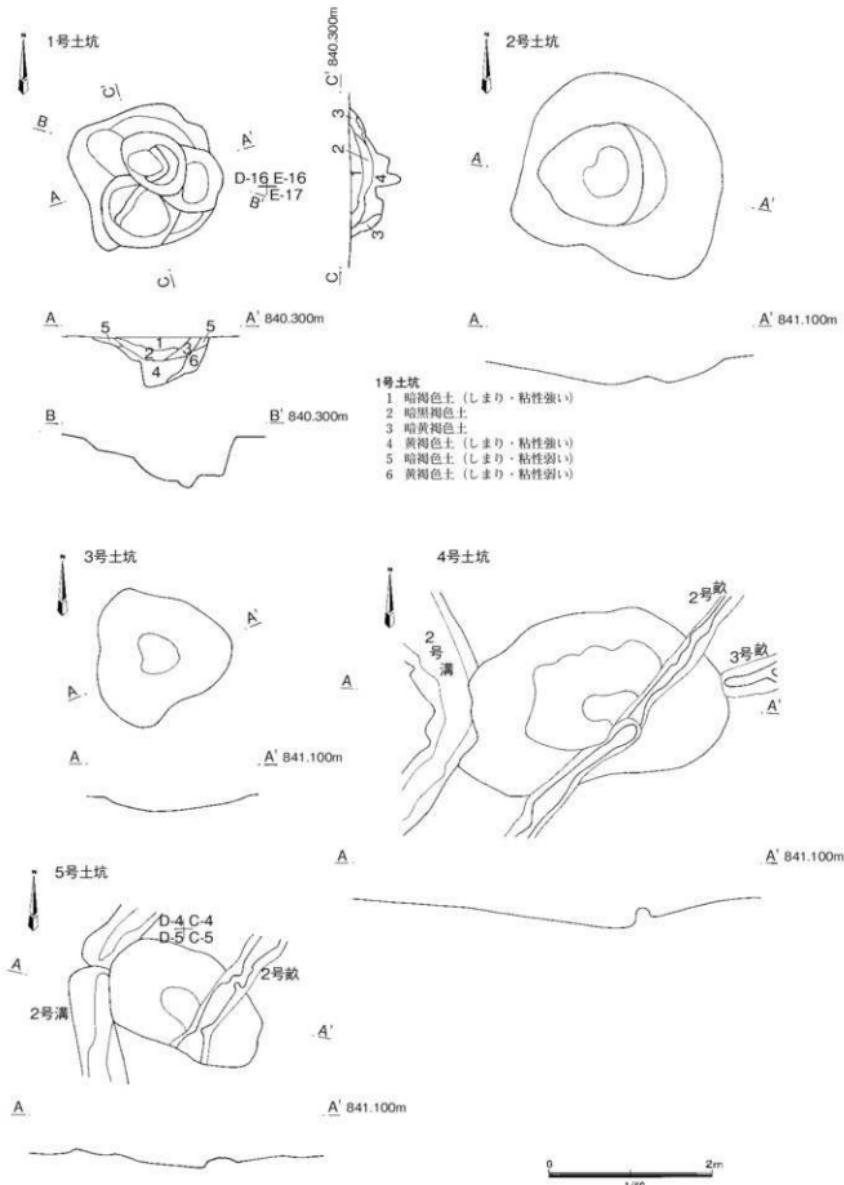
- I 黒色土。
- IIa 喻黃褐色土（小粒多量）。
- IIb 褐色土。
- III 喻褐色砂礫。
- IV 喻褐色土。
- V 黄褐色土。
- VIa 喻褐色砂礫。
- VIb 赤褐色砂礫。
- VIc 喻黃褐色砂質土（スコリア多量）。
- VII 黒色スコリア。
- VIII 褐色土（炭化物多量）。縄文時代後期後葉遺物包含層。
- IXa 褐色土（小粒多量）。
- IXb 褐色砂質土。
- IXc 褐色土（砾多量）。



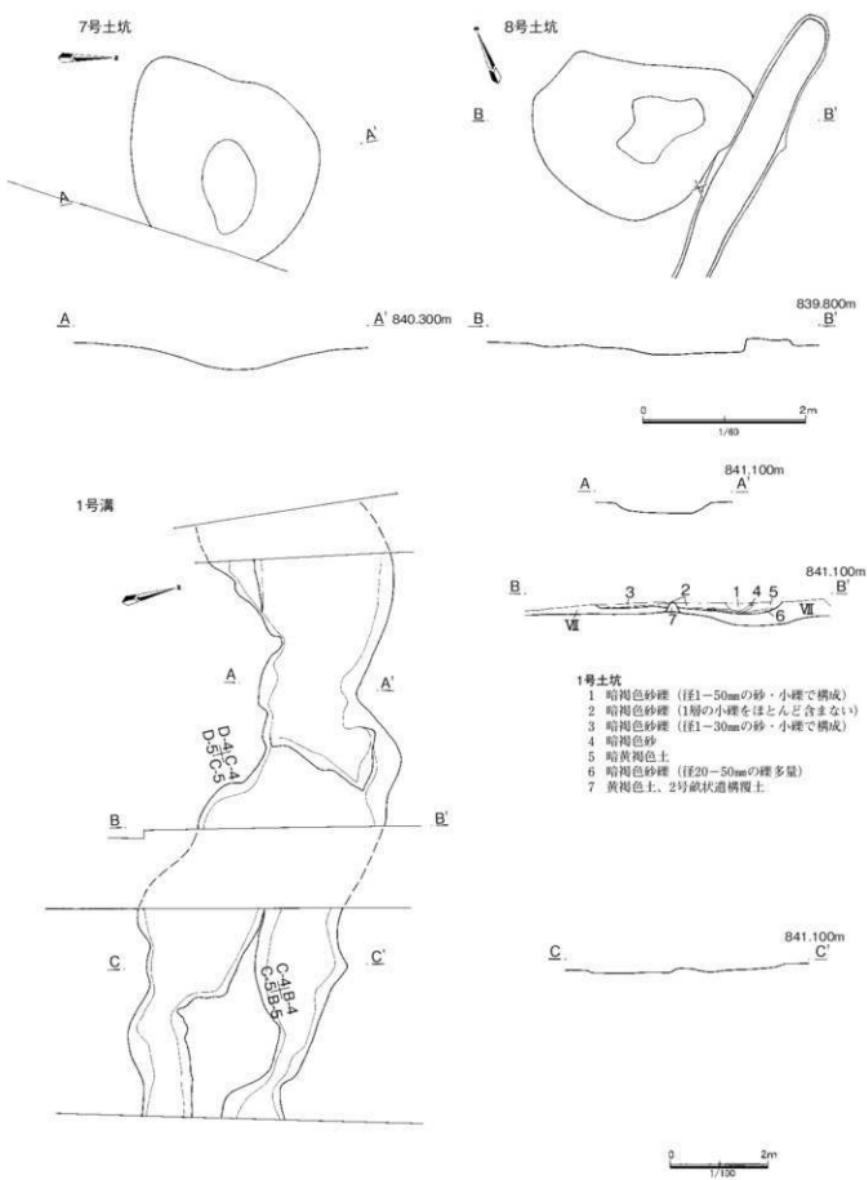
井坪遺跡全体図



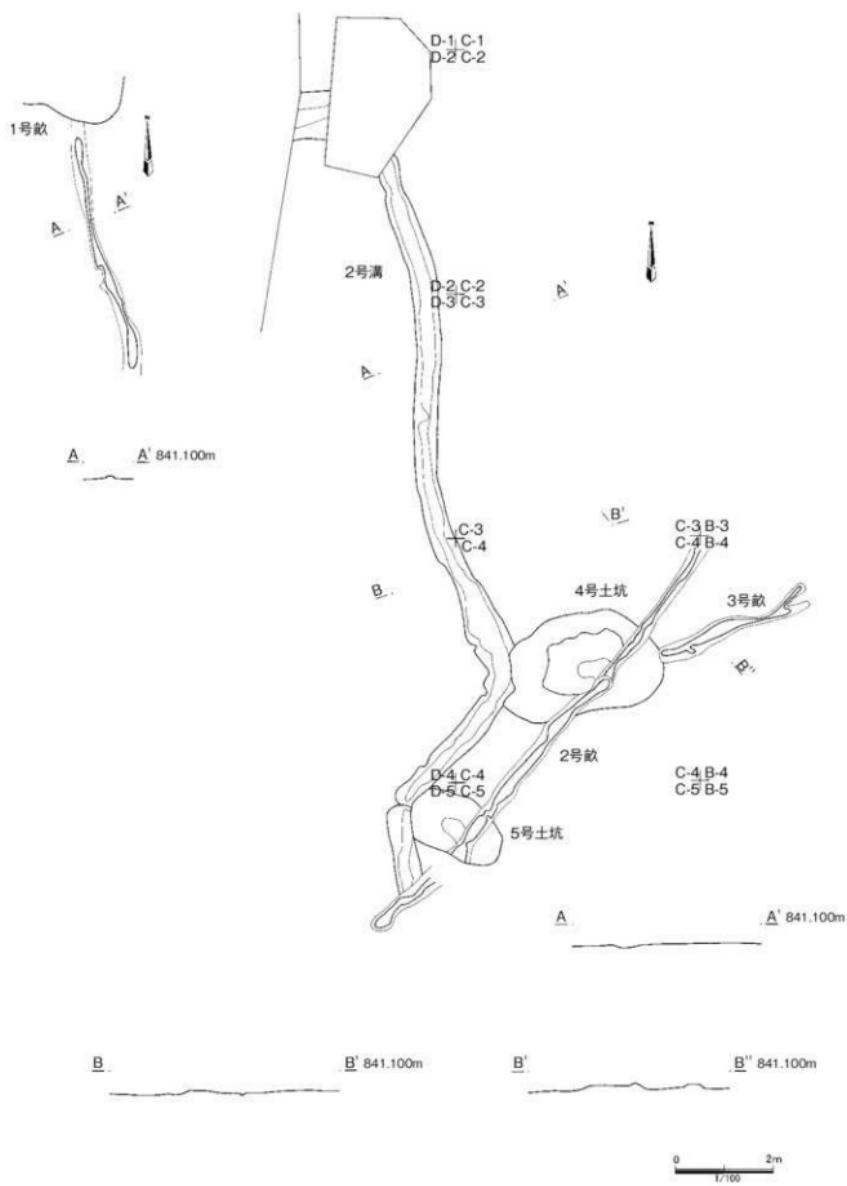
第48図 井坪遺跡周辺の地形・全体図・基本層序



第49図 井坪遺跡土坑

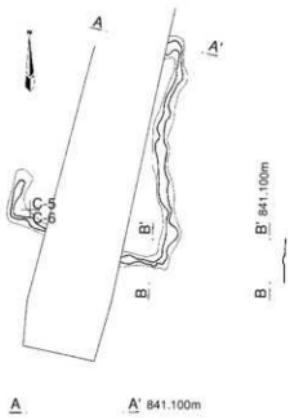


第50図 井坪遺跡土坑・溝状造構



第51図 井坪遺跡溝状遺構・鉱状遺構

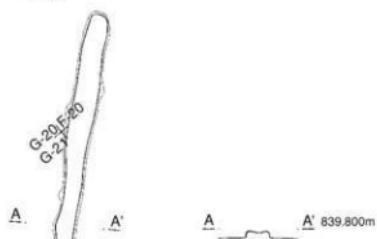
4号鉄



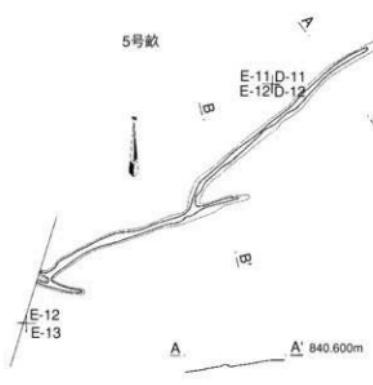
6号鉄



7号鉄



5号鉄



B

$B'$

840.600m

I-22  
H-22  
I-23  
H-23

C

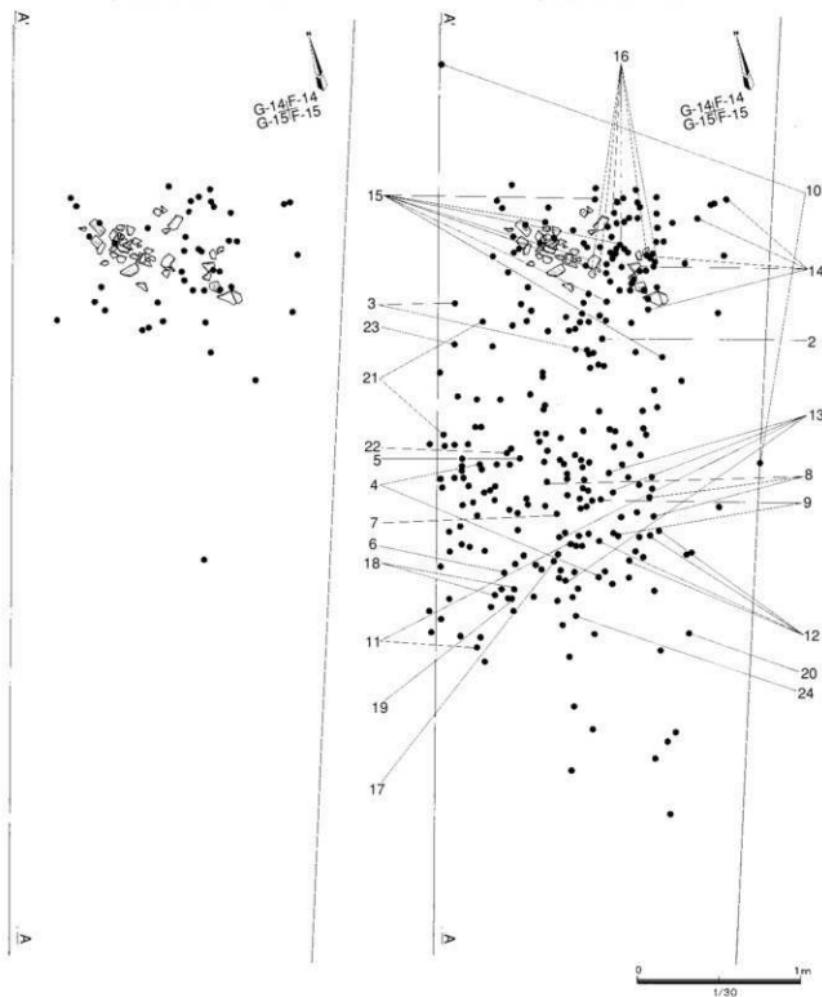
$C'$

839.800m

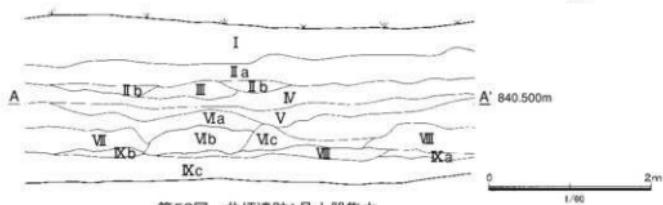
0  
100  
2m

第52図 井坪遺跡鉄状遺構

1号土器集中遺物No.1出土状況

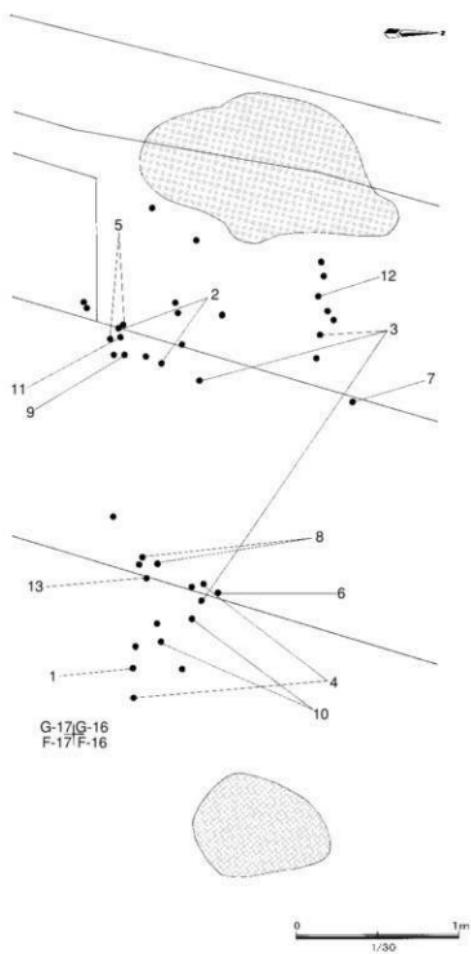


1号土器集中遺物出土状況



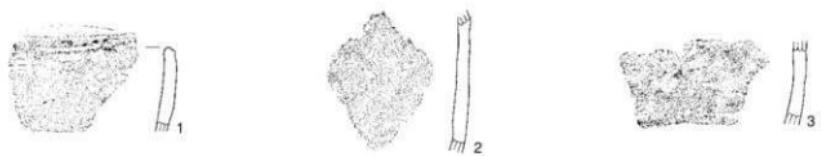
第53図 井坪遺跡1号土器集中

2号土器集中

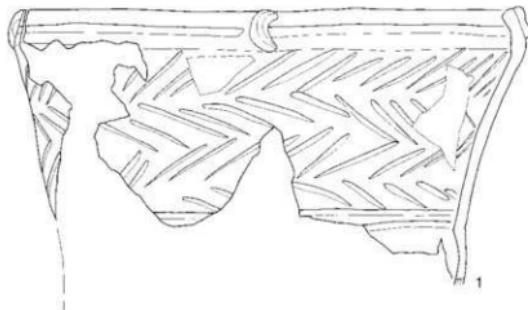


第54図 井坪遺跡2号土器集中

第8表 井坪測跡植物觀察表



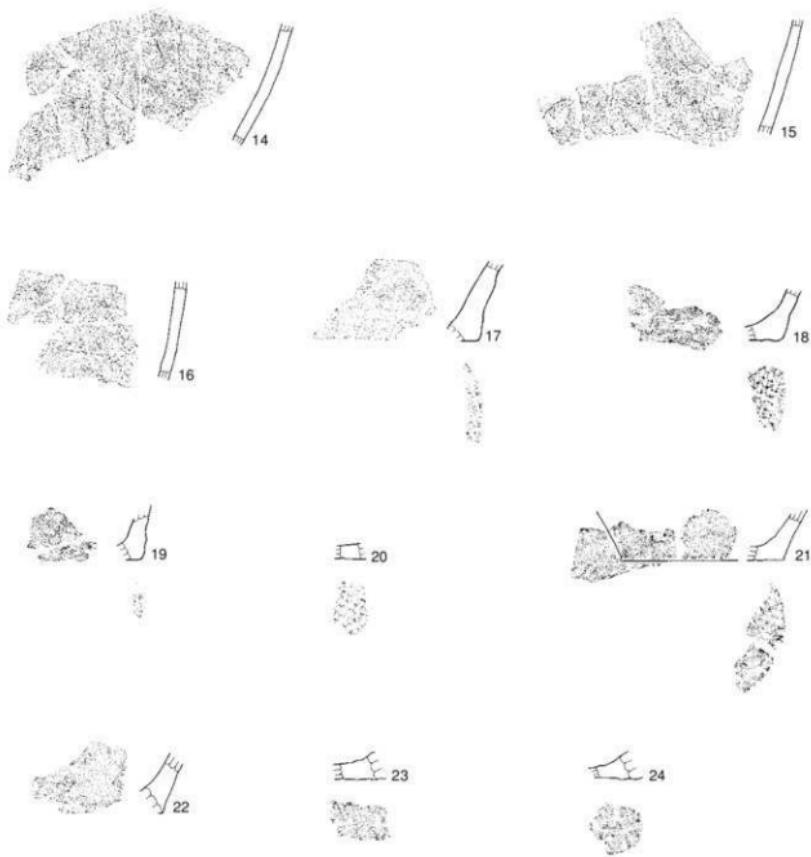
1号溝



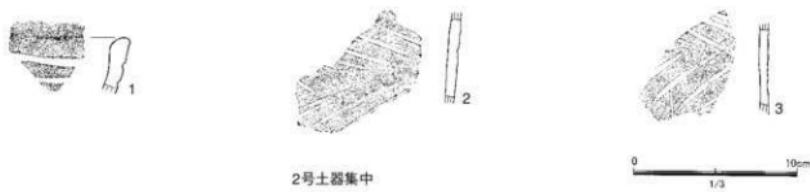
1号土器集中



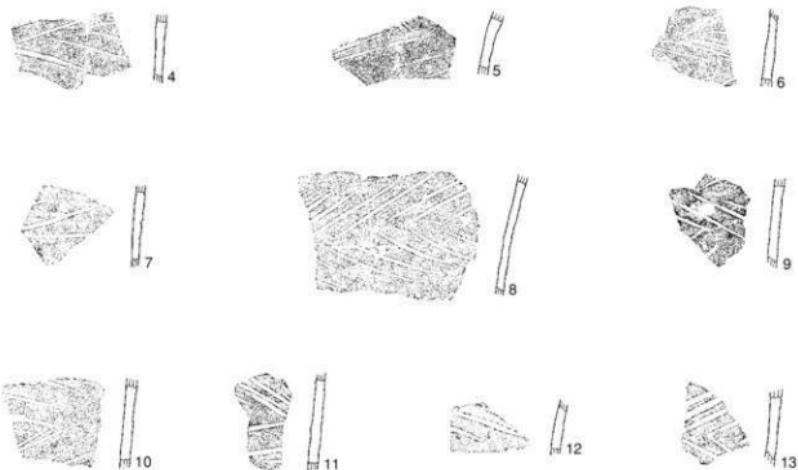
第55図 井坪遺跡出土遺物（1号溝・1号土器集中）



1号土器集中



第56図 井坪遺跡出土遺物（1号土器集中・2号土器集中）



2号土器集中



遺構外出土



第57図 井坪遺跡出土遺物（2号土器集中・遺構外出土）

# 第6章 自然科学分析

パリメ・サーヴェイ株式会社

## 第1節 塚越遺跡の自然科学分析

### はじめに

塚越遺跡は、山梨県南都留郡富士河口湖町河口に所在し、山際の傾斜地に立地している。発掘調査の結果、中近世、弥生時代、縄文時代の遺構、遺物が確認されており、特に、弥生時代、縄文時代の遺構検出面は、スコリアや土石流による堆積物により覆われており、保存状況は極めて良好な状態とされている。

本報告では、弥生時代の土坑や柱穴等の遺構が集中する調査区南部から検出された弥生時代前期末葉～中期初頭頃と考えられる焼土（3号焼土）と、縄文時代後期初頭と考えられる柄鏡形敷石住居跡内から検出された石圓炉（1住炉）の2遺構から採取された土壤を対象として、これらの土壤中に含まれる植物遺体、動物遺存体等の検出を目的として微細遺物分析を行い、当該期の植物利用、動物利用等に関する情報を得る。

### 1. 試料

試料は、弥生時代前期末～中期初頭頃と考えられる3号焼土と、縄文時代後期初頭と考えられる柄鏡形敷石住居跡内から検出された石圓炉（1住炉）から採取された土壤2点である。3号焼土は、発掘調査区壁際から検出されており、試料は遺構覆土上部の焼土層より採取されている。一方、1住炉は住居跡内のほぼ中央に位置しており、炉覆土下部の焼土層より採取されている。

なお、各試料とも後述する分析処理過程において微細遺物の回収量が少ないことが把握されたことから、さらに、分析対象とする土壤量を3号焼土は1526.8g、1住炉は2105.5gに增量し、微細遺物分析を行っている。

### 2. 分析方法

試料を常温で3昼夜乾燥させる。試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、目に付いた炭化材や炭化物を拾い出す。水を満たした容器に試料を投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。最後に、容器内の残土を0.5mm目の篩を通して水洗する。回収された炭化物と分析残試料を、粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や2mm角以上の炭化材、動物遺存体などを抽出する。

検出された種実の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等と比較し、種類を同定し個数を求める。実体顕微鏡下の観察による判別が困難な複数の分類群は、ハイフォンで結び表示する。種実以外の種類(炭化材、木材組織が確認されない)、種類・部位共に不明の炭化物(不明炭化物)、動物遺存体片)は、乾燥後の重量(g)を表示する。

炭化材は、比較的大きな破片で遺存状況の良いものを各試料より5点、計10点抽出し、実体顕微鏡で試料の木口(横断面)で組織の特徴を観察し、種類を同定する。なお、全て細片のため、柾目(放射断面)と板目(接線断面)の観察と、走査型電子顕微鏡による観察は不可能であった。

分析後の炭化材を除く検出物は、65℃ 48時間乾燥後、種類毎にビンに入れて保管する。残試料は乾燥後の重量を求め、袋に入れて保管する。

### 3.結果

結果を第9表に示す。以下に、各遺構における微細遺物の検出状況を記す。

#### 1)3号焼土

3号焼土の土壤(1526.8g)中からは、炭化種実、炭化材、動物遺存体等が検出された。炭化種実は、栽培植物のアワーヒエーキビの炭化した胚乳(5点)であつた。炭化材は0.3g検出され、このうち炭

化材5点は、広葉樹(4点)とイネ科(1点)に同定された。この他に不明炭化物が0.1g未満検出された。動物遺存体は0.1g未満検出されたが、いずれも白色を呈した焼骨で、最大4mmの微細片である。小型獣等の破片とみられるが、種類、部位等の特定には至らなかった。

#### 2)1住戸

1住戸の土壤(2105.5g)中からは、同定可能な種実は検出されず、炭化材等が検出された。炭化材は0.5g検出され、このうち5点は全て広葉樹であり、このうち環孔材の道管配列を有する炭化材(1点)も確認された。この他に、不明炭化物が0.1g未満検出された。

以下に、同定された種実の形態的特徴と、炭化材の解剖学的特徴等を記す。なお、広葉樹については、いずれも観察範囲が狭いことや、道管の配列等の詳細な観察が不可能であったため種類の同定には至らなかった。

##### ・アワーヒエーキビ(*Setaria itarica* (L.) P.Beauv.- *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno-*Panicum miliacium* L.)

イネ科エノコログサ属-ヒエ属-キビ属

いずれも炭化しており黒色を呈す。広楕円体でやや扁平。径2mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。正中線上基部には胚の凹みがある。径1~1.5mm程度のアワやヒエよりも大型で、キビの可能性も考えられるため、3種をハイフォンで結んだ。

アワ、ヒエ、キビは、走査型電子顕微鏡下による内外顎の観察による区別が可能であるが(松谷,1980;2000など)、検出された胚乳は遺存状態が悪く、表面に顎が付着した個体は認められなかった。

##### ・イネ科(Gramineae)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められる。放射組織は認められない。以上の特徴からイネ科の組織と考えられる。イネ科には、栽培植物のイネ、ムギのほか、比較的大型になるススキ属、稈が木質化するタケ・ササ属、ヨシ属など多くの種類が含まれる。炭化・残存したことを考慮すると、稈が比較的硬く丈夫な種類(タケ・ササ属、ヨシ属、ススキ属等)の可能性があるが、観察範囲が狭く組織の観察が十分ではないため、同定には至らなかった。

### 4.考察

弥生時代前期末葉～中期初頭頃とされる3号焼土からは、栽培植物のアワーヒエーキビの炭化した胚乳が5点検出された。アワーヒエーキビは胚乳が食用される雜穀類である。このことから、植物質食糧としてアワーヒエーキビが利用されていたことが推測される。また、この他に動物遺存体の微細片も検出され、いずれも焼骨であることが確認されたが種類の特定には至らず、当該期における動物利用については今後の課題である。

ところで、山梨県内では弥生時代における植物質食糧の調査事例は多数あり、今回検出されたアワーヒエーキビに着目すると、石之坪遺跡(笛崎市)や村前東遺跡(柳形町、現南アルプス市)の弥生時代後期の住居跡等の事例が挙げられる(櫛原,1999・埋蔵文化財研究会,2001)。一方、弥生時代前期～中期初頭頃の調査事例は少ないため、本分析結果は当該期の調査成果として貴重な検出例と言える。なお、本遺跡におけるアワやキビの利用を詳細に検討するためには、この他の焼土遺構の土壤洗い出しや、同土壤中におけるこれらの植物体に由来する痕跡の調査(植物珪酸体

第9表 微細遺物分析結果

試料名	3号焼土	1住戸	備考
土壤分析量	1526.8g	2105.5g	備考
炭化胚乳	アワーヒエーキビ 5点	-	
炭化材	-	0.3g 0.5g 各5点を選択し樹種同定	
広葉樹(環孔材)	-	1点	
広葉樹	4点	4点	
イネ科	1点	-	
不明炭化物	<0.1g	<0.1g	
動物遺存体	<0.1g	- 焼骨	
分析後残渣	132.5g	319.5g	

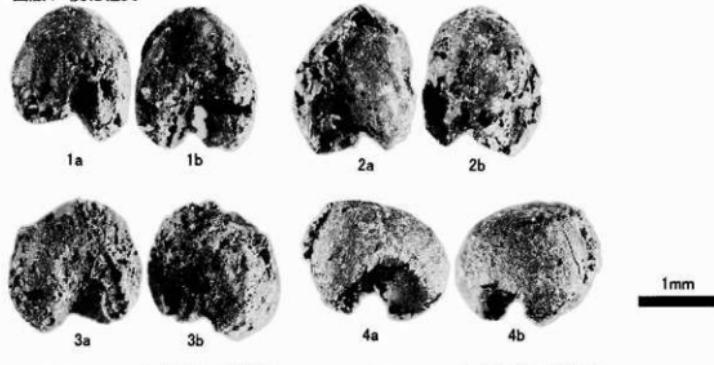
など）等が必要と考えられる。

3号焼土や1住戸からは、広葉樹やイネ科を含む炭化材が検出された。ただし、イネ科を除くといずれも種の同定には至らず、本分析結果からは当該期の周辺植生と植物利用について言及することはできない。この点については、今後の資料の蓄積を待ち、改めて検討したい。

#### 〈引用文献〉

- 石川 茂雄,1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 柳原 功一,1999「炭化種実から探る食生活-古代～中世を中心に-」『柳原 功一(編著),帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2 食の復元 遺跡・遺物から何をよみとるか』株式会社岩田書院,81-98.
- 埋蔵文化財研究会,2001「埋蔵文化財データーベース」「第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会-適応、開発から共生へ-発表要旨集」
- 松谷 曜子,1980「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」『浦幌町郷土博物館報告』第16号,203-211.
- 松谷 曜子,2000「植物遺残の識別と保存について」『Ouroboros,東京大学総合研究博物館ニュース』Volume5,Number1,8-10.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志,2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会,642p.

図版1 炭化種実



1. アワーヒエーキビ 胚乳(3号焼土)  
3. アワーヒエーキビ 胚乳(3号焼土)

2. アワーヒエーキビ 胚乳(3号焼土)  
4. アワーヒエーキビ 胚乳(3号焼土)

## 第2節 井坪遺跡・炭焼遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

山梨県南都留郡富士河口湖町に所在する井坪遺跡・炭焼遺跡は、御坂山地の御坂山と三ツ峠山の南麓（標高約840-845m）に位置している。

#### ・井坪遺跡

現地表面下約1.0-2.0mの火山灰層直下より、畦および畝状遺構が検出されている。また、この他に土坑や、土器集中、炭化材集中などが認められている。畦や畝状遺構については時期は不明であるが、これらの遺構直下の土器集中部からは縄文時代後期後葉に比定される土器片が確認されている。

#### ・炭焼遺跡

現地表面下約0.6-1.0mの黒褐色土層中に遺物包含層が確認されており、縄文時代中期、弥生時代後期、平安時代、中近世の土器や陶器片が確認されている。また、この黒褐色土層を掘込む土坑が検出されており、覆土中からは平安時代の土器片が出土している。

本報告では、上記の2遺跡で確認された遺構・遺物について、1)井坪遺跡で確認された畝状遺構の用途推定、2)両遺跡から出土した炭化材や獸骨の種類同定、という2点の課題を設定し、自然科学的手法を用いて検討を行う。

### I. 畝状遺構の用途推定

#### 1. 試料

井坪遺跡の発掘調査区3区の7号畝状遺構は北東から南西に幅約50cm、長さ約17mほどの規模を有する。試料は、当遺構のほぼ中央にあたる位置から採取された土壤2点（G-21グリッド脇の畝状直下、G-21グリッド南脇の畝）である。これらの試料について、植物珪酸体分析、微細遺物分析、土壤理化学分析を行う。

#### 2. 分析方法

##### (1) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

##### (2) 微細遺物分析

土壤試料各400ccを水に一晩浸漬し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等と比較し、種類を同定し、個数を数える。検出された炭化材や炭化物は、48時間80°Cで乾燥後、乾燥重量を求める。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れ保存する。

##### (3) 土壤理化学分析

今回の土壤理化学分析では、特に地力に関する情報を得ることを目的とし、有機炭素、全窒素、全リン酸、可給態

リン酸、可給態窒素を測定する。有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解一水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解バナドモリブデン酸比色法、可給態リン酸はトルオーグ法およびブレイ第二法、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出一水蒸気蒸留法でそれぞれ行った(土壤環境分析法編集委員会,1997、小川ほか,1989)。以下に各項目の操作工程を示す。

#### <分析試料の調製>

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

#### <有機炭素>

粉碎土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。

#### <全窒素>

風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって空素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量(T-N乾土%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

#### <全リン酸>

粉碎土試料1.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸20mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採り、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸量(P2O5mg/g)を求める。

#### <可給態リン酸(トルオーグ法)>

風乾細土試料1.00gを300ml三角フラスコに秤りとり、0.002N硫酸溶液(pH3)200mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リ

ン酸量(P2O5mg/100g)を求める。

#### <可給態リン酸(ブレイ第二法)>

風乾細土試料1.00gを50ml遠沈管に秤りとり、抽出液20mlを加え、室温で1分間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、ホウ酸液および混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リ

ン酸量(P2O5mg/100g)を求める。

#### <可給態窒素>

風乾細土試料10.00gを100ml三角フラスコにはかり、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素を測定する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態窒素量(Nmg/100g)を求める。

### 3.結果

#### (1)植物珪酸体分析

第10表 植物珪酸体分析結果

種類 試料	3区7号歯状遺構 G-21'グリット'		
	歯 歯状直下	歯 歯	歯 歯
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケア科	1	2	
ヨシ属	1	1	
ウシクサ族ススキ属	7	3	
不明キビ型	12	20	
不明ヒゲシバ型	2	3	
不明ダンチク型	7	4	
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケア科	3	-	
ヨシ属	-	1	
ウシクサ族	5	4	
不明	7	4	
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	30	33	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	15	9	
総計	45	2	

結果を第10表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、検出個数が少ないのである。また保存状態も悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

両試料ともに、イネ属やキビ類、ムギ類に由来する植物珪酸体は全く認められない。これら2試料では、タケア科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族などが僅かに検出される程度である。

### (2)微細遺物分析

結果を第11表に示す。両試料とも簡別後の残渣からは、同定可能な種実遺体は検出されない。G-21G脇の歯状直下からは、5mm角以下の炭化材が10片(0.01g未満)と、種類・部位など由来不明の炭化物が1点(0.01g未満)検出された。なお、歯状直下で検出された炭化材や炭化物は、小片であるため、種類の特定には至らない。

### (3)土壤理化学分析

結果を第12表に示す。土壤の生産力を評価するにあたり、土壤有機物量の指標として有機炭素、全窒素量、また火山灰土壤のような累積土壤においてはリン酸量も有機物量を推測する指標とされる。

有機炭素量、全窒素量、リン酸量は、両試料とともに低い傾向にあり、土壤有機物の集積は少ないことが指摘される。土壤有機物は作物の生育基盤となる土壤の物理性、化学性、生物性を改善し、生育や収量を高める効果を担っており、一般的には腐植に換算して2%以下の土壤では有機物を施与するなどの改良が必要とされる。

一方、生産力評価においては、養分豊否の指標である可給態リン酸量および可給態窒素について調査を行い、可給態リン酸については今回、トルオーグ法とブレイ第二法の両手法を試みた。可給態リン酸評価法の一つであるトルオーグ法はリン酸カルシウム、リン酸マグネシウムを溶解して得られるリン酸を、ブレイ第二法はリン酸カルシウムに加えて、リン酸アルミニウム、リン酸鉄を溶解し得られるリン酸を抽出するとされている。土壤診断の際には一般的にトルオーグ法が利用されているが、火山灰土壤からなる畑地構成に対しては、長年にわたって固定されたリン酸を評価する上で、ブレイ第二法を用いた方が妥当と考えられる。分析調査の結果、トルオーグリン酸量、ブレイ第二リン酸量、可給態窒素量のいずれも、両試料ともに少ない傾向にあり、現状の養分豊否を見る限りでは作物の生育に必要な養分は不足状態にあると判断される。

第12表 土壤理化学分析結果

試料			土性	土色	有機炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 (mg/g)	可給態リノ酸		可給態窒素 (mg/100g)	
3区	7号歯状直下	G-21 グリッド脇	歯 直下	SC	10YR2/3 黒褐色	0.67	0.07	10	1.50	3.4	6.8	5.7
		G-21 グリッド南端	歯	SC	10YR2/3 黒褐色	0.82	0.07	12	1.6	6.1	5.6	2.9

注：(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色図（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

(2) 土性：土壤質鑑定ハンドブック（ペドロジスト誌会編、1984）の野外土性による。

SC…砂質埴土（粘土25~45%、シルト0~20%、砂55~75%）

## 4.考察

7号歯状直構は、約1.0~2.0の火山灰層の直下から検出されていることから、本分析結果で認められた植物珪酸体は、これらの火山灰層堆積以前に生育していた母植物に由来すると考えられる。歯状直構及び歯脇から採取された土壤からは、タケア科、ヨシ属、ススキ属などが検出されたが、栽培種のイネ属や、栽培種を含む分類群のヒエ属(ヒエ)、キビ属(キビ)、エノコログサ属(アワ)、オオムギ族(ムギ類)などは検出されなかった。また、栽培植物に由来する植物体や種実遺体の検出を目的として行った微細遺物分析結果、これらに由来する種実遺体は全く検出されなかった。

一方、歯状直構の土壤については、生産力を評価する上で、土壤の理化学性について調査した。ただし、当時の土壤の特性が変化せずに保持されているとは考えにくく、直接的な評価は難しいが、本分析結果によれば、歯状直構を

構成する土壌の地力や養分豊否の現状は、生産力に乏しい土壤と判断される。したがって、植物珪酸体や微細植物遺体の産状や上記した土壤の特性などを考慮すると、現段階では7号竪状遺構が畑として利用されたことを積極的に支持できない。

山梨県下では甲府盆地、釜無川や富士川流域では、古代～近世の竪状遺構が多数検出され、分析調査も行われている。このうち、野牛島・大塚遺跡や櫛原・天神遺跡（八田村）では、イネ属の植物珪酸体がわずかに検出されている（中摩・渡部編集,2000）。また、鰐沢A・B遺跡（鰐沢町）では近世～近代の畠からイネ属やオオムギ族の植物珪酸体が検出されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,未公表）。一方、これらの穀物類の利用を示す炭化種実も多数確認されている（柳原,1999）。したがって、今後は、当地域における竪状遺構の分析を行うとともに、当該期における植物利用を検証するため住居跡や窓を対象とした分析も行い、総合的に検証することが望まれる。

## II.井坪遺跡における木材利用

### 1.試料

試料は、1号土坑から出土した炭化材1点（No.200）と7号竪状遺構南端から出土した炭化材1点の計2点である。1号土坑は、発掘調査区2区の南側から検出され、平面形は不整円形を呈し、径約2mを測る。炭化材は、当土坑の附削近から出土している。一方、7号竪状遺構南端の炭化材は、竪状遺構上面に広がっていた炭化物のうち、木材組織観察の可能な炭化物を選択・抽出した試料である。

### 2.分析方法

木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の3面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 3.結果

1号土坑の炭化材はトチノキ、7号竪状遺構南端の炭化材はケンボナシ属に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

- トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で階層状に配列する。

- ケンボナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で、孔圈部は2-3列以上であるが、割れているために孔圈部の幅や孔圈外への移行状況は確認できない。孔圈外小道管は厚壁で、単独または2-3個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

### 4.考察

井坪遺跡の1号土坑から出土した炭化材は、落葉広葉樹のトチノキであった。トチノキは、主として溪流沿いの肥沃地など、水分条件の良い場所に生育する種類である。一方、7号竪状遺構の炭化材は、落葉広葉樹のケンボナシ属であった。ケンボナシ属には、ケンボナシとケケンボナシの2種があり、ケケンボナシが本州（西部に多い）と四国に分布し、ケンボナシが北海道、本州、四国、九州に分布する。本地域ではケンボナシが付近の山林に普通に見られる種類である。したがって、出土した炭化材は、本遺跡周辺に生育した木材を利用した可能性がある。ただし、1号土坑や7号竪状遺構の用途は明らかでないことや、分析点数が少ないとことから、目的や用途による利用については今後の検討課題としたい。

### III. 井坪遺跡・炭焼遺跡の出土骨鑑定

#### 1. 試料

試料は、井坪遺跡3区H-26Gで検出された微細な骨片(No.4)と炭焼遺跡1区C-5Gで検出された臼歯(No.21)の計2点である。

#### 2. 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、同定には金子浩昌氏の協力を得ており、同定時の観察所見を3.結果に示す。

#### 3. 結果および考察

##### ・井坪遺跡3区 H-26G No.4

破損した骨片のみであり、接合を試みたが一部の破片が接合したのみで、原形を推測することはできない。形状から、おそらくニホンジカ(*Cervus nippon*)の臼歯のエナメル質部分と考えられ、未萌出歯と推定される。

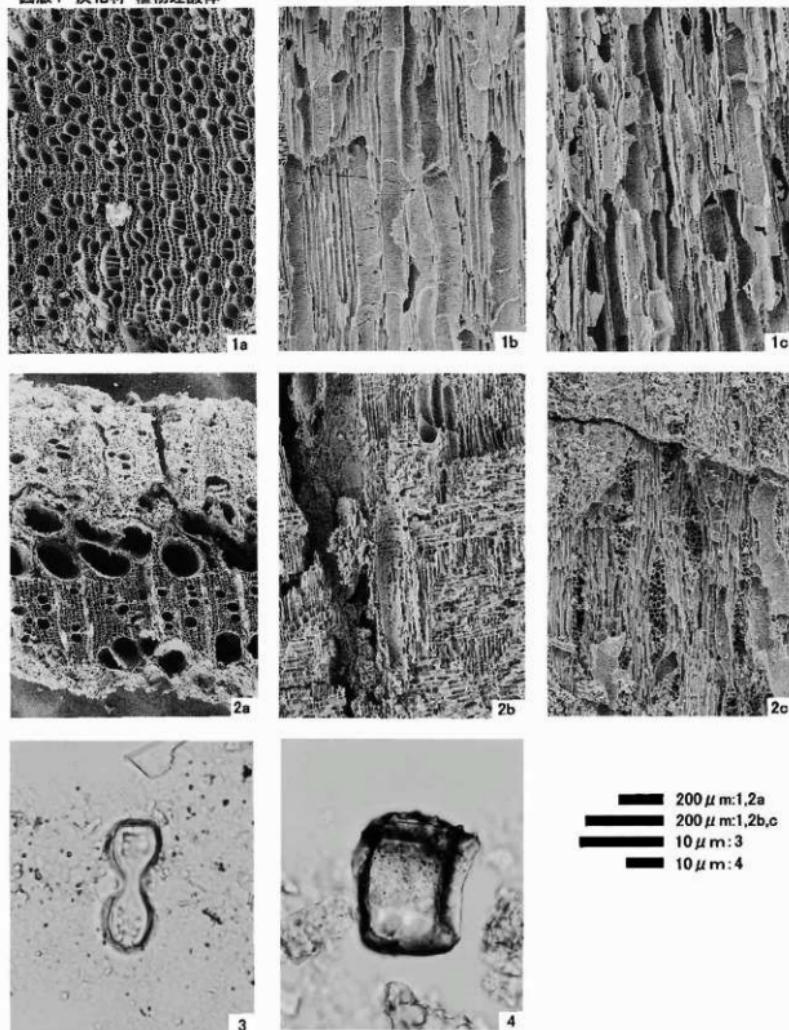
##### ・炭焼遺跡1区 C-5G No.21

ウマ(*Equus caballus*)の右上顎第2後臼歯である。外側のセメント質は、一部を残して大半が欠失し、咬面の象牙質部分も腐食した状態が観察される。全歯高は、現長で51.0mm前後を計り、歯根部が破壊され遺存状況が悪いものの、歯冠原型がわずかに残存する。西中川ほか(1989,1991)などを参考にすると、推定年齢7歳前後とみられる。

#### 〈引用文献〉

- 土壤環境分析法編集委員会(編),1997『土壤環境分析法』博友社,427p.
- 石川 茂雄,1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 近藤 錠三・佐瀬 隆,1986『植物珪酸体分析、その特性と応用』第四紀研究,25,31-64.
- 樋原 功一,1999『炭化種実から探る食生活-古代～中世を中心に-』『樋原 功一(編著),帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2 食の復元 遺跡・遺物から何をよみとるか』株式会社岩田書院,81-98.
- 中摩 浩太郎・渡部 敏也(編),2000『全国はたけ事例集成』『日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集シンポジウム はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会,113-291.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会,642p.
- 西中川 駿・上村 俊雄・松元 光春,1989『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究—とくに日本在来種との比較—』『昭和63年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書』
- 西中川 駿・本田 道輝・松元 光春,1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』『平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書』
- 小川 吉雄・加藤 弘道・石川 実,1989『リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法』『土肥誌』60,160-163.

図版1 炭化材・植物珪酸体



1.トチノキ (1号土坑; No.200) a:木口, b:柾目, c:板目  
 2.ケンボナシ属 (7号歓状遺構; 南端炭化材) a:木口, b:柾目, c:板目  
 3.ウシクサ属機動細胞珪酸体 (7号歓状遺構; G-21G脇歓状直下9)  
 4.スキ属単細胞珪酸体 (7号歓状遺構; G-21G南脇歓)

## 第3節 塚越遺跡出土の石器

高橋哲（株式会社アルカ）

### (1) 遺構出土石器

#### ・1号住居

縄文時代後期初頭、称名寺式古段階の敷石住居である。石器は石錐6点、両極石器2点、剥片1点、疊石器1点、磨石4点、磨石と思われる疊4点、被熱疊1点、多孔石1点である。

石錐は凹基錐であり、すべて黒曜石製である。

両極石器はすべて黒曜石製である。

剥片は、緑色凝灰岩であり、背面側に研磨面がみられることから、磨製石斧を再加工した際に生じた剥片と考えられる。

疊石器は、凝灰岩の梢円形自然疊を素材とし、長軸の一端に急角度の刃部を作出している。

磨石は明瞭に摩耗の痕跡がみられるものに限り磨石と分類し、形態的に磨石と類似しているが、明瞭な研磨面がみられないものについては、磨石？とした。

顕著な磨面が確認できたのは、No.11,12,13,14の4点であり、その内3点について金属顕微鏡で観察したところ磨面に光沢が確認できた。No.14は磨石の断片である。磨面以外の表面には光沢などは確認できず(写真3)。磨面には光沢が確認できた(写真1,2)。No.11にもやはり同種光沢が確認できた(写真1,2)。

磨石No.12は斑欄岩の梢円疊を素材とし、両面に明瞭な研磨面がみられる。この面を金属顕微鏡で観察したところ光沢と線状痕が観察できた。この光沢は上記2点で確認された光沢と同じ特徴を持っている。この石器は半削されており、打点部分が観察できることから、意図的に打ち削られたと考えられる。石の中には、金雲母らしき鉱物が含有されており、土器の胎土に混入するための鉱物を採取するためであろうか。

No.17も同じく半削りしているが、特に金雲母などの特徴的な鉱物は含有されていない。石材は硬砂岩である。

No.19は安山岩疊の平坦面に強い被熱の痕跡が残されていた。

No.20は大形の安山岩扁平石の両面に凹みの痕跡が残され、多孔石と考えられる。

#### ・2号住居

清水天王式が出土しており縄文時代晩期に帰属する住居である。

石錐3点、石錐1点、磨石1点出土している。

石錐は凹基錐2点、有茎錐が1点である。凹基錐は2点とも黒曜石製である。有茎錐は頁岩製であり、凹基錐と石材が異なる。また凹基錐と比較し、意図的に縁辺を鋸歯状に加工している。

石錐は摘みが形成されており、チャート製である。

磨石は、硬砂岩製の小形円疊を素材とし、全面が滑らかである。土器の表面を磨くための磨石であろうか。

### (2) グリッド出土石器

#### ・Cグリッド

C4,5,6は時期が重複し、C7,8,9,10は称名寺式段階である。

石錐13点、石錐1点、両極石器4点、石核1点、剥片1点、打製石斧1点、乳棒状磨製石斧1点、磨石1点、石皿1点出土している。

石錐はすべて凹基錐で、黒曜石製である。No.28は石錐未製品である。No.36は基部の抉り部分が深く、基部の付け根の両面に研磨した痕跡がみられる。縁辺は鋸歯状に加工されている。No.37は平面形態が五角形を呈しており、遺構出土を含め、形態的に塚越遺跡では特徴的な平面形態を有する石錐である。五角形の石錐は東海地方に出土例が多く、同地方の影響を受けた石錐であろうか。

乳棒状磨製石斧は、硬質凝灰岩製であり破損している。基部側はD-5グリッド、刃部側はC-5グリッドから出土している。全面を敲打し整形し、刃部付近は特に顕著に研磨し、整形している。

剥片は、緑色凝灰岩であり、背面側に研磨面がみられることから、磨製石斧を再加工した際に生じた剥片と考えられる。

- ・Dグリッド

D-5グリッドでは、塚之内II式の土器集中が確認され、そこから黒曜石の原石が5点検出されている。

石鎌は凹基鎌であり、石材は黒曜石とチャート製である。

- ・その他

縄文時代の最下層から、黒曜石製凹基鎌が1点出土している。

2区から黒曜石製凹基鎌が1点出土している。

表掲資料で、大形の礫石器が出土している。

### (3) 弥生時代

時期は弥生時代前期から中期ごろである。遺構は焼土が確認されている。

石鎌7点、両極石器1点、二次加工石器1点、石核2点、打製石斧2点、環状石斧が1点である。

石鎌はすべて凹基鎌であり、縄文時代の石鎌と比較し、ハンマーが固いため深く抉れており、結果的に鋸歯線を形成している。7点中2点は長身の石鎌である。

環状石斧は、安山岩を素材とし、全面を敲打し、部分的に研磨し整形している。

打製石斧2点はホルンフェルスを素材とし、縁辺をハードハンマーの直接打撃で加工している。

D-9土器集中から出土した土器の間から剥片18点が一括して出土している。石材は緑色凝灰岩であり、相模川上流域、山梨県都留市近辺で採集できる(「石器Mode」ホームページ参照)。塚越遺跡の立地が近辺のことから、一帯で採取できる石材を利用したと考えられる。ほとんどが平坦打面もしくは自然面打面をもち、直接打撃で剥離している。素材開始部には、コーンはみられるが、形の整ったコーンではない。リップが確認できる場合もあり、真性のハードハンマーというより、軟質石のハンマーによる直接打撃の可能性が高い。

多くの緑色凝灰岩剥片には微小剥離痕が残されており、使用痕剥片と考えられる。

### (4) 石器組成

時期ごとに、出土している石器組成が異なる。

縄文時代後期初頭の1号住居では、定型的な石器として石鎌の他に磨石、多孔石などの礫石器が検出され、非常に偏った石器組成である。

C7,8,9,10は称名寺式段階である。石鎌、石皿、磨石や磨製石斧素材の剥片が出土している。五角形石鎌は、C8から出土している。

石鎌と磨石・石皿類がこの時期の石器組成であり、内容的には、狩猟と採集が主目的な時期といえよう。堅果類を採集し、同時に堅果類を削とするイノシシなどのほ乳類を狩る遺跡であったのであろうか。

縄文時代後期、塚之内II式段階では、遺構は検出されてなく、グリッド出土である。石器組成としては、石鎌と、黒曜石の原石そして剥片が主である。

縄文時代晩期の2号住居は石鎌以外に石錐と磨石のみ出土し、非常に石鎌に偏った石器組成である。

弥生時代の石器組成は、石鎌と打製石斧と環状石斧が主である。D-9土器集中から緑色凝灰岩製剥片がまとめて出土したことについて、この石材が南関東で採取できることもあり、南関東の地域と何らかの関係があったものと考えられる。

各時期を通して非常に偏った石器組成である。基幹集落というより、定期的に占地された遺跡であった可能性が非

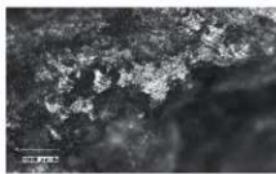
常に高いといえよう。

## (5) 石材

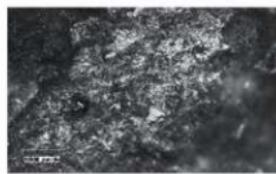
縄文時代後期初頭では、剥片石器は、黒曜石でしめられている。磨石は石の目が緻密な硬砂岩を使用し、他の砾石器は主に安山岩製である。

後期堀之内II段階には、石鎚に黒曜石と共に、チャート製や頁岩製で構成される。晩期になると、石鎚は、同じく黒曜石とチャートで石器石材が占められている。

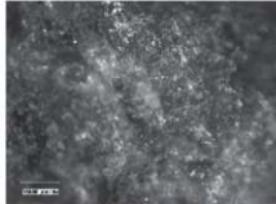
弥生時代にはふたたび黒曜石製で占められている。また土器の間から出土した緑色凝灰岩などは相模川上流域で採集できる。



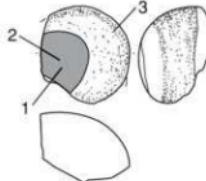
1 磨面にみられる光沢



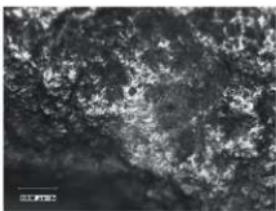
2 磨面にみられる光沢



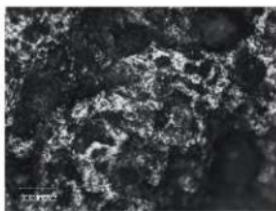
3 自然面の表面



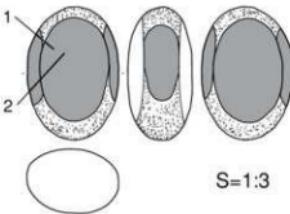
S=1:3



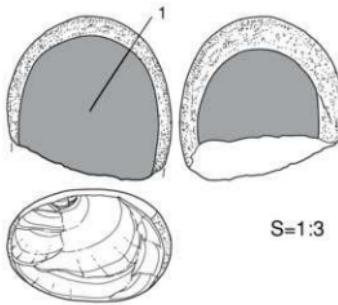
1 磨面にみられる光沢



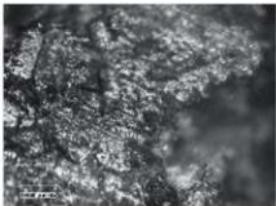
2 磨面にみられる光沢



S=1:3



S=1:3



1 磨面にみられる光沢

礫石器にみられる使用痕 1号住居出土石器

## 第7章 まとめ

### 第1節 繩文時代

#### (1) 塚越遺跡・井坪遺跡出土の繩文土器

##### 〈塚越遺跡第Ⅱ群繩文時代後期初頭の土器について〉

今回の調査では塚越遺跡1号住居跡および、Ve・Vd層中より繩文時代後期初頭の土器が出土している。住居は複数もなく、きわめて良好な一括資料といえる。遺物は調査区のほぼ全域から出土し県史編年の称名寺式古段階である。

称名寺式古段階の中でもより古い段階として1類a種の口縁部直下に窓枠状の区画をもつ中津式土器類似の土器群が伴う時期とされる。1住5、遺構外2・3がある。1類a種より後出的な1類bにみられる口縁部無文帯は在地系の土器群との交渉を示すものであり、1住2・4・5、遺構外4・5が主なものに当たる。

2類の圓沢類型は繩文時代中期後半加曾利式IV式の系統を引く土器群と考えられ、1住8~11、遺構外22・23・25が主なものである。口縁部の突起は立体的であり、S字状（遺構外23・25）、横状（1住9）などがある。胴部文様は胴上部にU字文（遺構外26）やU字文が変化したもの（遺構外22）などで、胴下部には無文地で渦巻き文が施文される（1住11）。

4類の器面全体に条線がほどこされるものは繩文時代中期の曾利式の系統を引くものと考えられ、遺構外45がある。

##### 〈塚越遺跡第Ⅲ群 後期中葉の土器群について〉

県史編年でいう塚之内2式新段階の土器群で、塚越遺跡18号土坑、D-5土器集中が該期の遺構であり、遺構外では調査区北側のVb層中に散在する。

1類は朝顔形の器形で胴部の文様帶は幅狭くなる。遺構外52・53・54がある。2類の繩文を充填した多条細沈線により連鎖状文などのモチーフを描く土器群は「石神類型」と呼ばれる。D-5土器集中1は外反する4単位の波状口縁で体部がくびれ、胴下部が大きく膨らむ器形を呈す。3類は称名寺以来の伝統を残すいわゆる「下北原式」といわれるもので、18号土坑1がある。「下北原式」は、時代が新しくなるにつれ、口縁部文様が消失し、懸垂文が流動化する傾向にある。18号土坑1は口縁部文様が施文されず、胴部のU字文モチーフも流動的で上下が分かれ、「U」と逆「U」字文を縦に並べたようになり、塚之内2式新段階の様相を呈する。

##### 〈井坪遺跡第IV群 繩文時代後期後葉の土器群について〉

井坪遺跡から出土した土器については第5章第3節で、第I群から第V群まで分類したとおりである。ここでは1号土器集中、2号土器集中においてまとめて出土したIV群の繩文時代後期後葉の土器群について検討を加える。

2号土器集中において出土した土器は2号土集1の口縁部破片以外はすべて同一個体の羽状沈線が施された胴部破片であり、器形や文様構成など詳しくは不明である。1号土器集中では3個体の口縁部をもつ土器が確認され、いずれも口縁部が緩く内折した口縁部をもち、胴部に羽状沈線の施された平縁口縁の深鉢であると考えられる。

1号土集1は口縁部文様帶に半円形の隆帯が4単位貼り付けられ、太いナデ状の沈線が横走する。体部のわずかにくびれる部分に2条の沈線をめぐらせ、口縁部屈折下部からくびれ部の間に羽状沈線が施される。羽状沈線とくびれ部分の沈線は口縁部のナデ沈線と異なり、細く鋭い。くびれ部以下は無文となると考えられる。

1号土集2~7は同一個体であり、口縁部文様帶に沈線が横走する。口縁部には隆帯による貼り付け文は見られず、沈線により、半円形に近いモチーフを描くものと考えられる（2）。口縁部屈折部以下の文様ははっきりしないが、羽状沈線文が施文されていると考えられる（7）。

8~11は同一個体で、口縁部文様帶は上下に円形刺突が連続し、末端が曲がってやや弧状をなす平行沈線が施文さ

れる。弧線間には半円形の隆帯が貼り付けられる（9）。12・13は8～11の胸部破片であるが、上下の羽状沈線が末端で重なり、鋸歯状の文様となる。

山梨県においては北杜市大泉町金生遺跡5号配石、北杜市大泉町姥神遺跡、都留市中谷遺跡などで同様の土器が出土しているが、検出例は少ない。これらの編年上の位置づけについては曾谷式並行（櫛原）、安行1式平行（奈良1981、新津1989、我孫子1993）、安行1・2式平行・高井東4式平行（百瀬1984、1999）、など様々な把え方がある。井坪遺跡においては他系統の土器や前後段階の土器群の出土が見られず、独自の変遷を追うことができないが、緩く内折した繩文帯が施されない口縁部に、回線が横方向に施されることから金生遺跡後期後葉Ⅱ期（安行1式平行、新津1989）、百瀬の羽状沈線文第5段階（高井東4式平行、百瀬1999）にあたると考えられる。

#### 〈塚越遺跡V群 晩期前半の土器群について〉

県史編年でいう晩期大洞C1並行の土器群で、2号住、遺構外Va層中から出土している。V群は1類の清水天王山式土器と2類の雷文土器に分けられる。

1類の清水天王山式は有刻突帯の有無により、a種：口縁形が平縁で有刻突帯をもたないもの、b種：口縁部に有刻突帯がめぐるものに2分される。1類a種は2住8・9、遺構外74がある。2住8、遺構外74は口縁部文様帶に三叉状入組文が1段施され、胸部に羽状沈線文がめぐると考えられる。1類b種は2住3・4・5が主だったものである。器形は口縁部が波状を呈するもの（2住3・4）、と平縁のもの（2住5）がある。有刻突帯下には右下がりの三叉入組文が施されるものが多く（2住3・4）、入組文が縱に連なるものもある（2住5）。

2類の雷文土器は、鍵の手文様帶の状況で整理すると以下のようになる。

a種：沈線が1条の入組まない鍵の手文。（2住2、遺構外88）

b種：沈線が2条の入組む鍵の手文。（2住1、遺構外84・86・87）

c種：b種の沈線間に縦位の沈線が施されるもの。（遺構外85）

d種：入組鍵の手文の入組む間に鍵の手文が配されるもの。（遺構外83）

e種：口縁部繩文帶のみのもの。（2住12・13）

鍵の手文は右下がりのものがほとんどであるが、2住2のように左下がりのものも見られる。

V群1類・2類土器群の文様は明らかに別種であり、沈線の施文工具も1類が細く鋭い工具、2類は太く断面が丸い棒状の工具と異なり、それぞれの土器群が別々の集団によって製作されたことが想定される。しかし、磨きや胎土などは同じであり、また2類の口縁部下繩文帶に1類のモチーフである右下がりの三叉入組文が2類に用いられる太く丸底を呈する沈線で施されるものもあり（2住No1）、1類・2類土器群のそれぞれの製作・使用集団がきわめて友好、あるいは近縁なものであったと考えられる。

## （2）遺構

#### 〈塚越遺跡後期初頭の敷石住居跡について〉

敷石住居は縄文時代中期に出現し後期前半まで存続する住居形態であり、山梨県ではこれまで45遺跡以上から200件以上の敷石住居が検出されている。全体を見通すと、中期末段階が少なく、後期に入り徐々に増えていく傾向にあるが、後期初頭称名寺式期のものはまだそれほど多くなく、6遺跡15軒を数えるのである（第13表）。その内訳は郡内地域：2遺跡5軒、甲府盆地東部2遺跡2軒、八ヶ岳南麓3遺跡9軒となる。

ここでは山梨県内における後期初頭の敷石住居を集成し、塚越遺跡1号住居の柄鏡形敷石住居の検討を行う。各遺跡のデータについては一覧表を参照されたい。また、塚越遺跡1号住居の詳細については第3章2節において報告したとおりである。

山梨県内の敷石住居は、中期末の曾利IV式段階に柄部を持たない敷石住居として出現し、Va～b式段階に柄部を持つ柄鏡形敷石住居が普及し始め、後期になると北杜市上ノ原遺跡の住居が柄部を持たない可能性を持つものの、ほぼ全域において柄鏡形を呈するようになる（櫛原2004）。また柱穴配置も主体部に5本の主柱穴を持つものが一般的と

され（柳原1999）、塚越遺跡1号住の平面形・柱穴配置は後期初頭に一般的なものともいえる。しかし、主体部敷石の平面形をみると、円形（駿遊堂遺跡群NII地区SB-10）、六角形（大月遺跡1号住、一の沢遺跡2号住）、隅丸方形（大月遺跡7号住、10号住）となり、塚越遺跡1号住のように五角形のものは見当たらない。

また、五角形の敷石は5本の主柱穴を結ぶ範囲内に収まり、敷石が柱穴を結ぶ梁の区画と一致することを明瞭に示している。県内においては主柱穴を結んだ範囲内に敷石を収める例は他に見られず、稀有な事例といえよう。

## 第2節 弥生時代

### （1）塚越遺跡出土の弥生時代中期初頭の土器について

塚越遺跡から出土した土器については第3章第3節において分類した第V群の土器群は弥生時代中期初頭に相当する。器形は1類・2類、3類の甕形土器と4類の壺形土器、5類の鉢形土器に分かれ。ここではそれぞれの器形ごとに検討を行う。

#### 〈甕形土器〉

1類b・c種の口縁部付近に刻み・押捺が連続して施される土器は弥生時代前期の条痕文系土器に祖形を求めることができる。1類d種の口縁部に長梢円形のくぼみをもつものは前期後半から見られる平縁口縁の深鉢と縄文時代末期の山形突起に系譜を求める。1類b・c・d種は口縁部の装飾において差異を認めることができるが、器面に施される条痕は、さら状工具により横あるいは斜めの同一方向に浅いものとなる。さら状工具による条痕は弥生時代前期の甕形土器にみられ、条痕は同一方向に施されるが、溝は深いものである。この条痕は時代が新しくなるにつれ浅くなり、中期中葉になるとさら状工具からクシ状工具へと変化する。条痕の方向も中期中葉になると縱方向の羽状、縱・横に交互方向など装飾性を持つようになる。このことから1類b・c種とd種の土器群は弥生時代中期初頭のⅡ期に位置づけられる。

2類の口縁部に縄文帯を持つ土器は、荒海式土器など縄文時代最終末の土器群からの系譜にあり、関東・東北の弥生土器に受け継がれる。これら関東・東北の土器の口縁部形態は、多くが縄文帯と無文帯との間に段や沈線などの明瞭な境界をもつものに対し、塚越遺跡の2類土器は頸部の無文帯には段・沈線などの明瞭な区画を持たない。山梨県内では甲州市（旧塩山市）獅子之前遺跡や富士河口湖町鶴の島遺跡で同様のものが出土している。これらの口縁部縄文帯に明確な境を持たない土器は富士・箱根を中心とした地域とも考えられており、中部高地から相模にかけて分布する縄文時代最終末土器群の流れをくむものが東方の技術を受け入れたものと考えられている。（谷口1990）

D-9土器集中1~6は同一個体で1類e種にあたる。口縁部に押捺が施され、押捺下に縱方向、以下横方向に条痕が描かれる。山梨県内において油田遺跡遺構外出土の甕形土器に1点見られるのみである。県外の中前期初頭土器群においては中部高地・相模地方に多く見られ、縄文時代末期の水1式土器系の土器が条痕文系土器の影響を受けて変質し、施文方向にその伝統が残されたものと考えられる。（谷口1990）

3類a種の4号焼土1（第43図）は口唇部に縄文が施され、口縁部に横走羽状沈線が描かれる。都留市牛石遺跡において類似する資料が見られるが、弥生時代中期後半に位置づけられており、4号焼土No1は中期初頭より新しい可能性がある。

#### 〈壺形土器〉

甕形土器に比べ出土資料が少なく、器形が想像できるものも造構外75と91の2例しかない。75は水神平系の壺であり、底部から胴部に向かってまっすぐ開く器形となる。器面の条痕は胴部のもっと膨らむ部分で縱方向の羽状文となり、以下横へと方向を変える。76は75の口縁部で口縁部にヘラ刻みを持つ突帯が施され、突帯下に横方向の条痕が施される。

弥生時代中期中葉（須和田・平沢式並行）の壺は底部から胴部に向かって膨らむように開く器形であり、75は中期中葉（須和田・平沢式並行）以前の土器群と考えられる。

## （2）塚越遺跡弥生時代の遺構について

### 〈塚越遺跡調査区南東隅遺構群について〉

塚越遺跡で検出された弥生時代中期中葉の遺構は、土坑1基、柱穴3基、焼土遺構5基、土器集中遺構1基である。このうち5号焼土を除くすべての遺構が調査区の南側において検出された（第9図）。3号焼土内からは動物のものと思われる骨片が出土している。3号焼土周辺からは特に多くの遺物が出土しており、直線上に並ぶ1～3号柱穴を付属施設とした住居跡の可能性も考えられる。

山梨県における弥生時代中期初頭の住居跡の発見例がなく、前後の時期においても前期の住居跡が韮崎市上手沢遺跡15号住の1軒のみ、中期中葉の住居跡が都留市牛石遺跡で3軒と記載されている。前期・中期中葉の住居形態をみると、前期の上手沢遺跡15号住の住居形態は隅丸方形プランで内部施設に4本の柱穴、地床炉と考えられる焼土跡がある。牛石遺跡Y-1号住居は隅丸方形の平面形で7本の柱穴とベッド状遺構をもつ。いずれも地面を掘り込んだ竪穴住居跡である。

塚越遺跡3号焼土周辺の土層の観察を行ったが、住居の掘り込みは見当たらず、平地式住居の可能性も考えられるが、東側と南側が調査区壁となり全体像はわからない。

### 〈塚越遺跡D-9土器集中について〉

塚越遺跡D-9土器集中は前述の報告のとおり、土坑中からは同一個体の菱形土器片（第27図D-9土器集1～6）がまとまって出土したほか、土坑上部において緑色凝灰岩片18点が土器片に挟まれて埋納されていた。人骨等は検出されなかったが、弥生時代中期の墓制に関連した遺構と考えられる。

弥生時代中期の東海・中部地方から関東・東北地方南部における代表的な墓制に土坑内に甕・壺などの土器を埋納する再葬墓が知られている。再葬とは遺体を一度仮葬し、肉を腐らせたのちに骨だけを取り出し、土器の中に埋納する葬制である。再葬墓への副葬品については玉類、石鎚、黒曜石剝片、石斧、硃石などが代表的なものとして挙げられる。D-9土器集中では菱形土器片がまとまって出土し、土器片間に石器剝片が埋納されていることから再葬墓と判断される。

山梨県内の弥生時代前期末から中期初頭にかけての墓制に関する事例では、北杜市大泉町寺所遺跡2号土坑、5号土坑、6号土坑、北杜市明野町中村道祖神遺跡93号土坑、甲府市（旧中道町）菖蒲池遺跡31号土坑ほか6基の土坑（森原1993）、北杜市明野町下大内遺跡225号土坑が挙げられる。これらの事例では塚越遺跡D-9土器集中のような土器片で石器剝片を埋納するような例はみられないが、菖蒲池遺跡の黒曜石剝片が類似する要素と考えられる。

また塚越遺跡出土の弥生時代中期初頭に属する石器・剝片の素材は黒曜石を主体としており、D-5土器集中で埋納されている緑色凝灰岩を素材とする石器・剝片は出土していないことから、何らかの特別な意味をこめて埋納したものと考えられる。

## 第3節 平安時代

### 〈炭焼遺跡の火打金〉

山梨県内の火打金については野代が集成を行っており、変遷や時期ごとの形態的特徴を挙げている（野代2003）。炭焼遺跡出土の火打金（第47図27）は遺構に伴わず、遺物包含層中から出土した。包含層中からは中世～平安時代までの遺物を包含しており、出土層位置からの具体的な時期の特定はむずかしい。ここでは炭焼遺跡出土火打金についての形態的特長を挙げ、野代の変遷に即して時期の検討を行う。

炭焼遺跡出土の火打金は全長10.2cm、高さ3.9cm、厚さ0.7cmを測る。全体的に山型を呈しており、基部の両端は湾曲して立ち上がりそこで完結する。基部の突起中央には孔があり、その両サイドにはつまみ状の装飾が施されている。

野代によれば山型を呈する形態は、県内で初見となる平安時代（9世紀後半～10世紀）から江戸期（19世紀）まで継続して見られる。また、基部の両端は湾曲して立ち上がり、そこで完結するものは平安時代から17世紀までの間に見られており、炭焼遺跡のものは形態的特長から17世紀より下ないと考えられる。野代の編年図で平安時代末期の12世紀後半のうちに挙げられる甲州市（旧塙山市）雲峰寺経塚出土の火打金をみると、形態的にもほぼ類似しており12世紀後半後の時期に限定される可能性もある。

県内出土の平安時代から17世紀までの火打金は全長2~8cmのものが多く、炭焼遺跡のように全長10cmを越すものはきわめて大型であり、特殊性が感じられる。また、つまみ状の装飾は、「一般利用を前提とするシンプルなものと異なり、装飾状のものを伴うことから儀式的な色彩が強い」（野代2003）とされ、炭焼遺跡の火打金はなんらかの儀式に用いられたものと考えられる。

#### 参考文献

- ・秋田かな子 1997 「石神類型"覚え書き"」『東海大学校地内遺跡調査報告7』東海大学校地内遺跡調査委員会
- ・我孫子昭二 1993 「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分布』『東京考古』11 東京考古談話会
- ・石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第5冊 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- ・石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 財团法人横浜市ふるさと歴史財团埋藏文化財センター
- ・大森 隆志 1990 「中村道祖神遺跡」明野村文化財調査報告5 明野村教育委員会
- ・小野 正文 1977 「清水天王山式土器」について『丘陵』3·4号
- ・小野 正文 1986 「再び清水天王山式土器について」『山梨県考古学論集』I 山梨県考古学協会
- ・小野 正文 1986 「駿遊堂I」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集 山梨県教育委員会ほか
- ・小野 正文 1999 「晩期」「山梨県史」山梨県
- ・樋原 功一 1987 「姥神遺跡」大泉村埋蔵文化財調査報告第5集 大泉村教育委員会
- ・樋原 功一 1995 「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- ・樋原 功一 2000 「敷石住居の居住空間」『山梨県考古学協会誌』第11号 山梨県考古学協会
- ・樋原 功一 2004 「敷石住居の発生—柄のない敷石住居の存在—」『山梨県考古学論集』V 山梨県考古学協会
- ・佐野 隆 1997 「下大内遺跡・星敷添第2遺跡・中原遺跡」明野村文化財調査報告11 明野村教育委員会
- ・重久 淳一 1985 「雷文土器の研究—東京都町田市なすな原遺跡出土土器を中心として」『古代探叢』II 早稲田大学出版部
- ・鈴木 徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帶の系統—「文様帶系統論」と文様帶連続説の再検討—」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- ・谷口 勉 1990 「堂山式土器」の再検討「神奈川考古」第26号 神奈川県考古同人会
- ・戸田 哲也 1980 「清水天王山式土器と晩期繩文土器の形成」『丘陵』8号
- ・長沢 宏昌・中山 誠二 1986 「一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第16集 山梨県教育委員会
- ・長沢 宏昌・笠原みゆき 1997 「大月遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第139集 山梨県教育委員会ほか
- ・中山 誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題—時間軸の設定—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- ・中山 誠二 1999 「弥生時代の編年」「弥生時代の住居と集落」『山梨県史』資料編2原始・古代2 山梨県

- ・奈良 泰史 1981「中谷・宮脇遺跡」都留市埋蔵文化財調査報告第8集 都留市教育委員会
- ・奈良 泰史 1986「清水天王山式土器の基礎的研究」『山梨県考古学論集』I 山梨県考古学協会
- ・新津 健・三田村美彦 1993「川又坂上遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第75集 山梨県教育委員会ほか
- ・新津 健・八巻与志夫 1987「寺所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集 山梨県教育委員会ほか
- ・新津 健 1989「金生遺跡II（縄文時代編）」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集
- ・野代 幸和 2003「県内出土の火打金（火打錠）について（予察）」『山梨県考古学ノート—田代孝氏退職記念誌—』田代孝氏退職記念誌刊行会
- ・三田村美彦 1999「後期初頭（称名寺式土器）」「後期前葉（堀之内式土器）」「後期中葉（加曾利B式土器）」「後期後葉～終末期」『山梨県史』山梨県
- ・百瀬 長秀 1984「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学協会誌』49号 長野県考古学協会
- ・百瀬 長秀 1999「離山遺跡羽状沈線文の編年観」『長野県考古学協会誌』90号 長野県考古学協会
- ・百瀬 長秀 1999「清水天王山式の入組文（上）」『長野県考古学協会誌』91号 長野県考古学会
- ・百瀬 長秀 1999「清水天王山式の入組文（下）」『長野県考古学協会誌』92号 長野県考古学会
- ・百瀬 長秀 2001「清水天王山式の終焉と周辺」『長野県考古学協会誌』95号 長野県考古学会
- ・森原 明廣 1996「菖蒲池遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116号 山梨県教育委員会ほか

第13表 瓦住居一覧表

遺跡名	遺構名	時期	形態	主体部形態	裏石規矩・形態	柱穴
大月遺跡 (大月市)	1号住 称名寺古段階	柄輪形	六角形	柄輪形	六角形石圓柱	柄部と主体部の境に1基 無し
	7号住 称名寺古段階	柄輪形	隅丸方形	柄部石板状。 主体部は縁石が造り、側の奥壁側 に敷石残る。	五角形石圓柱	柄部と主体部の境に1基 無し
	10号住 称名寺古段階	柄輪形	隅丸方形	柄部石板状。 主体部は縁石が造り、側の奥壁側 に敷石残る。	方形石圓柱	柄部と主体部の境に1基 無し
一の沢遺跡 (笛吹市塩川町)	13号住 称名寺古段階	柄輪形	円形or六角形	より入り口側の敷石が無い。 前面は石板状。	方形石圓柱	無し
	2号住 称名寺式新段階	柄輪形	六角形	主体部放矢状。	方形石圓柱・土器數き	無し
駿遊室遺跡II区 (笛吹市一宮町)	S8-10 称名寺中段階	柄輪形	円形	主体部西北部抜き取られ、縁石が 残る。	無し	無し
川又坂上遺跡 (北杜市高根町)	5号址 称名寺中段階	柄輪形	-	入り口部にナフカニ=残存。	方形石圓柱	17基(複数性 見られない)
石之坪遺跡 (笛吹市内野町)	95号住 称名寺古・中 柄輪形	-	-	柄部に一部残存。	無し	-
	16号住 称名寺中段階	-	円形?	奥壁・敷石が残存。	-	-
	33号住 称名寺古段階	-	円形	奥壁に敷石残存。	方形石圓柱	8本以上
	36号住 称名寺中段階	-	柄円形	敷石一部残存。	石圓柱?	無し
上ノ原遺跡 (北杜市須玉町)	85号住 称名寺中段階	-	円形	奥壁側に縁石・敷石残存。	方形石圓柱	9本?
	108号住 称名寺中段階	-	円形?	敷石一部残存。	地環柱?	無し
	112号住 称名寺古段階	-	円形?	敷石一部残存。	石圓柱?	7本
	120号住 称名寺古段階	-	円形	奥壁側に残存。二周繋が造り、敷石 が一部残存。	地環柱	7本以上



塚越遺跡北上方より河口湖方面を望む



塚越遺跡調査区北側（縄文時代）



塚越遺跡調査区南側（縄文時代）

図版2 塚越遺跡



塚越遺跡基本土層



塚越遺跡基本土層



1号住居跡（柄鏡形敷石住居）



1号住居跡（敷石除去）



1号住居跡土層堆積状況



1号住居跡周堤部土層堆積状況



1号住居跡柄鏡部遺物出土状況



1号住居跡柄鏡部遺物出土状況



2号住居跡



2号住居跡土層堆積状況



18号土坑遺物出土状況



D-5土器集中遺物出土状況



塚越遺跡調査区南側（弥生時代）



塚越遺跡調査区南西部（弥生時代）



調査区南側遺物出土状況（弥生時代）



2号焼土



3号焼土



D-9土器集中遺物出土状況（上部）



弥生時代遺構外鉢出土状況



D-9土器集中遺物出土状況（下部）



弥生時代遺構外甌出土状況



弥生時代遺構外石器出土状況



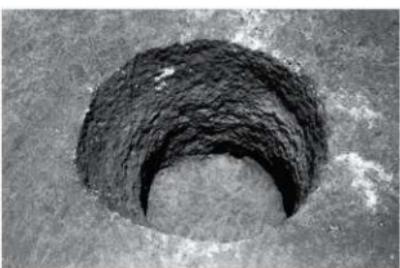
塚越遺跡調査区南側（近世）



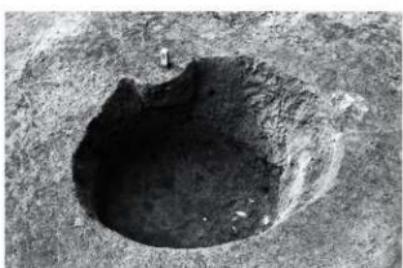
2号土坑



4号土坑



6号土坑



7号土坑



8号土坑



9号土坑



14・15号土坑



炭焼遺跡1区



炭焼遺跡2区東側



炭焼遺跡2区西側



炭焼遺跡基本土層



調査風景



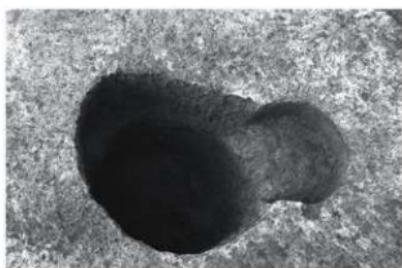
1号竪穴状遺構



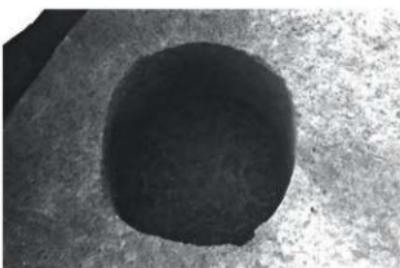
1~4号・5~9号土坑



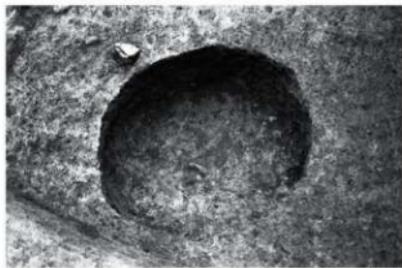
10号土坑



11・12号土坑



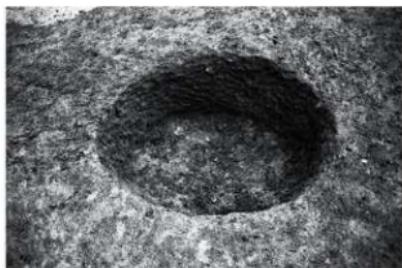
13号土坑



14号土坑



15号土坑・焼土遺構



16号土坑

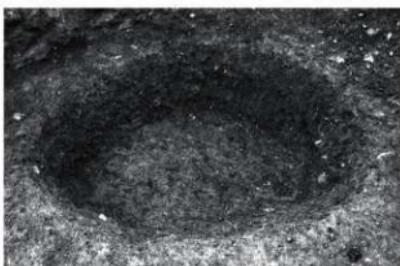


17号土坑

図版8 炭焼遺跡 井坪遺跡



18号土坑



19号土坑



煙跡



集石



井坪遺跡調査区全景



井坪遺跡表土剥ぎ風景



井坪遺跡調査風景

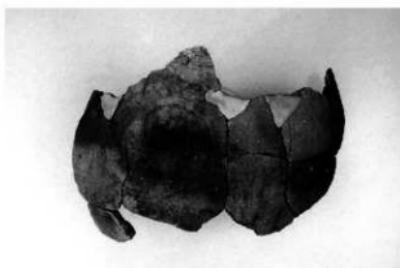


1号土器集中遺物出土状況（下面）

1号溝状遺構



1号住居跡No.1



1号住居跡No.3



1号住居跡出土土器・土製品



2号住居跡No.1



2号住居跡出土土器



D-5土器集中No.1



18号土坑No.



塚越遺跡縄文時代遺構外No.22



塚越遺跡縄文時代遺構外No.34



塚越遺跡縄文時代遺構外No.83



塚越遺跡縄文時代遺構外出土土器



塚越遺跡弥生時代遺構外No.59



塚越遺跡弥生時代遺構外No.60



塚越遺跡弥生時代遺構外No.75



塚越遺跡弥生時代遺構外No.91



塚越遺跡弥生時代遺構外No.92



塚越遺跡弥生時代遺構内出土土器



塚越遺跡遺構外出土弥生土器

### 炭焼遺跡



炭焼遺跡出土遺物

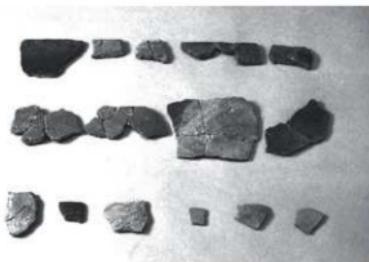


炭焼遺跡出土火打金

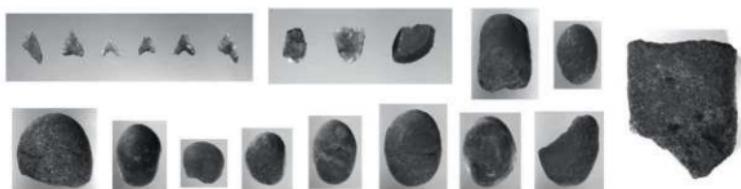
### 井坪遺跡



井坪遺跡1号土器集中No.1



井坪遺跡出土遺物



1号住居跡出土石器



2号住居跡出土石器



D-9土器集中出土剥片



V層出土石器



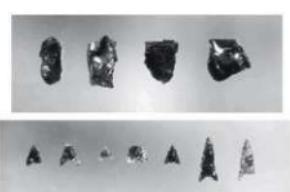
剥片石器



C グリッド出土縄文時代の石器



D グリッド出土縄文時代の石器



C グリッド出土縄文時代の石器



表採資料



弥生時代の石器



一括出土石器

## 報告書抄録

ふりがな	つかこしいせき・すみやきいせき・いつばいせき						
書名	塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡						
調査名	一般国道137号河口12期バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第237集						
著者名	依田幸浩・正木季洋・高橋哲・パリノサーウェイ株式会社						
収集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL.055-266-3016						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 山町村 通路番号	北緯(新)	東経(新)	調査期間	調査面積㎡	調査原因
つかこしいせき 塚越遺跡	やまなしけんみなみみつぐるん ふじかわぐらこまちかわぐら 山梨県南都留郡富士河口湖 町河口地内	19430 河-24	35° 31° 36°	138° 46° 41°	平成16年6月2日 ～11月29日	780	一般国道137号 河口12期バイパス 建設工事
すみやきいせき 炭焼遺跡	やまなしけんみなみみつぐるん ふじかわぐらこまちかわぐら 山梨県南都留郡富士河口湖 町河口地内	19430 河-23	35° 31° 29°	138° 46° 39°	平成15年10月7日 ～12月9日 平成16年9月21日 ～11月26日	1,000	一般国道137号 河口12期バイパス 建設工事
いつばいせき 井坪遺跡	やまなしけんみなみみつぐるん ふじかわぐらこまちかわぐら 山梨県南都留郡富士河口湖 町河口地内	19430 河-22	35° 31° 22°	138° 46° 38°	平成15年6月9日 ～10月8日	1,600	一般国道137号 河口12期バイパス 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
塚越遺跡	集落跡	縄文時代後期・晩期	敷石住居跡1 竪穴住居跡1 柱穴群1	縄文土器、石器	ほぼ完形の移名寺期柄鏡形敷石住居跡、晩期前半住居跡はくぼ地状にスコリア層直下より検出		
	集落跡	弥生時代中期	土坑1 柱穴3 焼土跡5	弥生土器、石器、環石、黒曜石	中期の弥生土器に伴い、完形の環石が出土。		
	土坑群	近世？	土坑16	遺物なし			
炭焼遺跡	包含層 土坑群	堅穴状遺構1 土坑21 烟跡1	縄文土器、弥生土器、平安時代土師器、火打金				
井坪遺跡	包含層	瓶状遺構8 溝状遺構2 土坑8	縄文土器、平安時代土師器	縄文時代後期後葉の土器がまとまって出土。			

### 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第237集

## 塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡

一般国道137号河口2期バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 2006年(平成18年3月15日)

発行日 2006年(平成18年3月31日)

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL.055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

山梨県土木部

印刷 篠ヨネヤ